

360  
a  
26



0011358-000

a 360-26

世界の平和と人類の康福

佐藤鉄太郎・著

奉仕会本部

1939

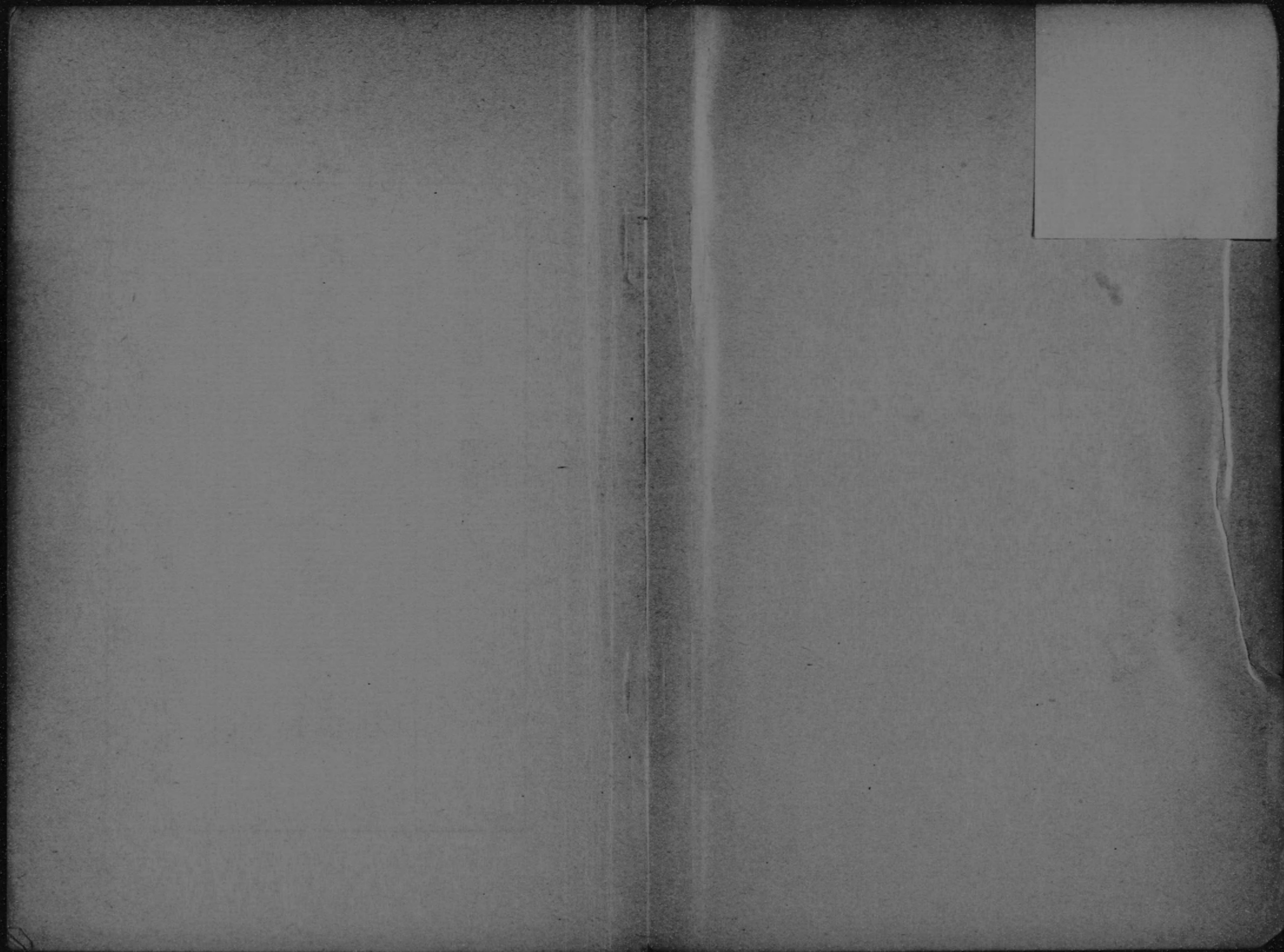
ABJ



360  
26

平和人數之幸福







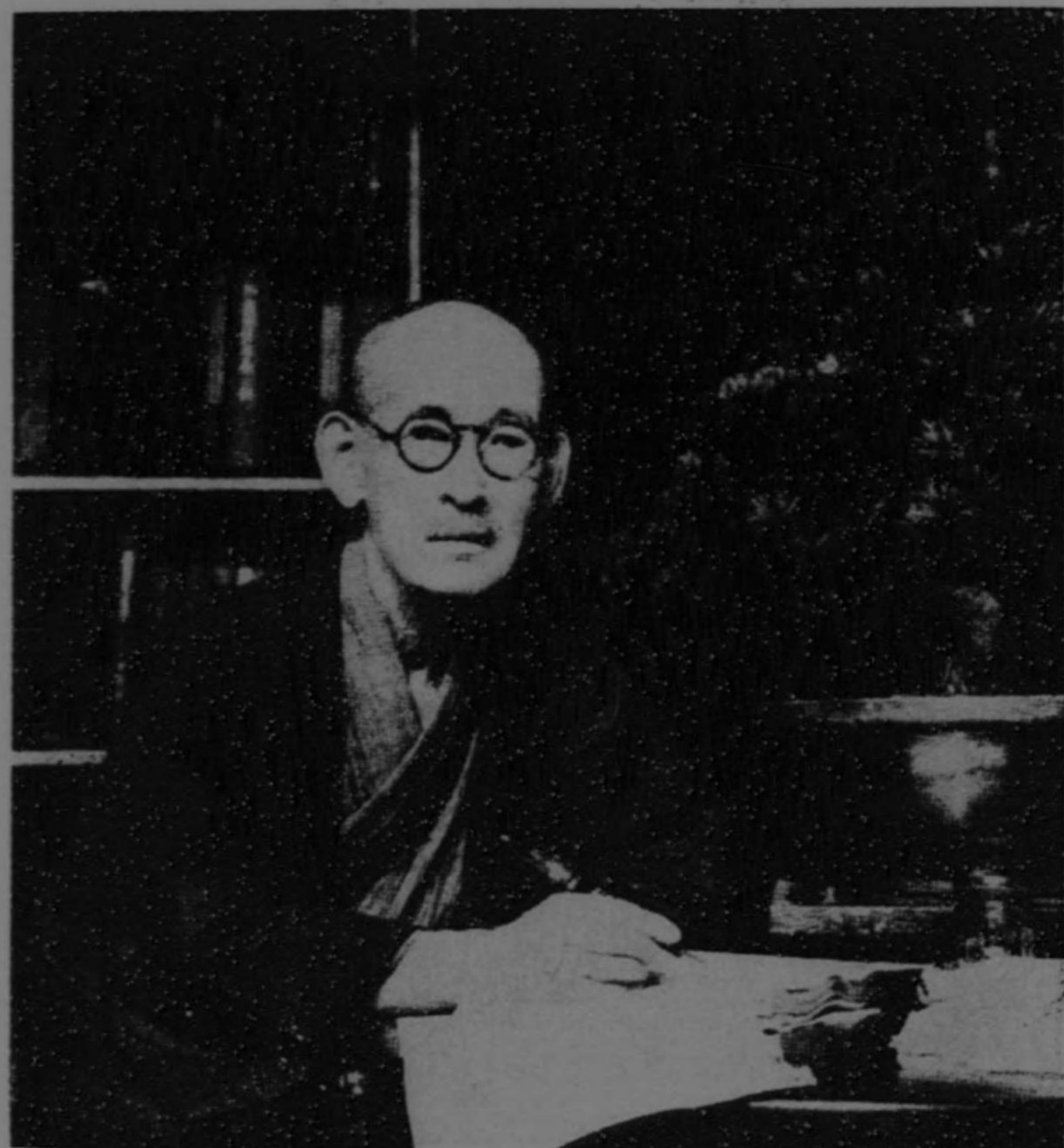
貴族院議員  
海軍中將 佐藤鐵太郎著

吾人比平初と人数と幸福

財團法人奉仕會刊



360  
26



(影 近 者 著)

13746



## 自序

吾輩は日清戦争以前、清國北洋艦隊の行動に刺戟せられ、帝國々防の研究に従事し、當時に於ける帝國海軍の缺點を指摘し、帝國々防私説を草し、之を其筋に提出したのであつたが、國防問題其物に對してこそは、相當の所信もあつたのであるが、當時以前の情勢としては、乍遺憾、我帝國も、未だ世界の日本として儼存するの資格も威望もなく、或は一生の間軍人として御奉公するの機會なきやも測られずと思ふこともあつたのであるが、意外にも、日清戦争が突發し、我日本帝國は、一躍して世界的舞臺に上つたので、茲に始めて、痛切に、我日本國の、世界的大國たるの資格あるに覺醒すると同時に、眞の理想的國家は、實に我日本帝國なりとの觀念を深くすると共に、我日本國には、極めて重大なる天職ありて



存するを感知するに至つたのである。そこで吾輩は、海軍省に在職中、國防問題を研究するの職務を與へられたるを動機とし、御國體に關する研究を始むることとなり、先第一に隣邦支那の統治制を歴史的に研究し、同國先覺者の言に徴し、堯舜禹湯文武の時代と雖も、何等の景慕すべき事實なく、古今を通じ、力を以て仁を假るの霸道を實顯するに過ぎざるを感じ、一人として、眞の理想國家を明説するものなきに落膽したのであつたが、國體の研究に關しては、聊か進境に入りたるを自覺し、眞の國防は國體の擁護に外ならず、殊に我日本帝國に於て、其意義の深刻なるを悟り得たのであつたが、其後英國及米國駐在の命を拜し、國防問題の研究に従事することとなつたので、茲に機を得て、歐米歴史を本とする、國體觀の研究に従事することを得たのであるが、歐州に於ても、何等支那以上の學ぶべき所なく、米國に於ても亦同様なるに落膽して、歸

朝したのであるが、幾何もなくして、日露戦争の勃發に會し、戦役中の諸經驗により、不知不識佛教に一種の憧憬を覺ゆることとなり、其研究の結果、法華經に論ずる所は、正に理想的國家の説明にして、我御國體の天下唯一の存在なるを證して餘りあるを確信するに至つたので、茲に意を決して、帝國々防史論を起稿したのであるが、其後幾何ならずして、高崎正風男爵より、埃國の碩學、スタイン先生の説を傳聞し、更に之を史上所載の事實に照し、彌々吾輩の自信を堅め、以て今日に至つたのであるが、此度思想問題の不祥事に感ずる所あり、御國體明徴の趣旨は、決して、一時的に一二の人を咎むるの法律的手段を以て透徹し得べきにあらず、必ずや各方面に互りて、其所説を根絶すると共に、同胞國民に説くに、御國體の眞實義を以てし、誠心誠意、之を同胞の腦裏に詰め込むによりてのみ、其目的を果し得べきを悟つたので、今茲に、右の目的に應ずる爲



四  
め、我國體の神髓」と題する小冊子を著はしたのである。吾輩は出來得る限り、我日本國の津々浦々に至る迄、右の趣旨を説き廻らんと欲するのであるが、我等の同胞諸君も、眞率に此問題を究明し、再び疑を生ずること決して是なきを期せられんことを望むのである。（昭和十年十月記）

右は、奉仕會員を中心として、同胞國民諸君に訴へたき念願を以て、「我國體の神髓」を發刊するに際して同書に附掲したる自序であるが、本稿も、同様の心持を以て書いたので、要するに我國體の神髓の補輯に過ぎぬは明白である。従て、今更に他の序文を以てするの必要を認めぬので、其儘に複之を用ゐたのである。（昭和十二年八月記）

吾輩は「我國體の神髓」と題し、舊稿の一部を纏め、昭和十年十月之を發刊し、更に昭和十二年八月を以て、「我等の日本と世界の將來」と題し、一書を草して奉仕會員に頒ち、其一覽を望むたのであるが、吾輩は更に其以前に於て、昭和五年二月舊稿の抄録とも稱すべき、吾等の踏むべき次の大道」と題する小冊子を編纂し、諸君の閱覽を請ふたのである。然るに其後の國家的情勢は、滿洲事變の突

發と共に、吾國の將來に重大なる關係を生じたので、前記の著述及近來の意見を取り纏め、更に一書を草し、「日本民族の世界的使命」と題して之を印刷に附するの要を認めたのである。但し、吾等の踏むべき次の大道は、新稿と共に之を印刷し、之を諸君に頒たんと欲するので、他の三稿即ち「我國體の神髓」と「我等の日本と世界の將來」と「日本民族の世界的使命」と共に、必ず之を讀まれんことを望むのである。（昭和十三年九月）

吾輩は昨年九月「日本民族の世界的使命」と題する一書を艸して奉仕會よりこれを公刊せしが、今年春世界狀勢の變化と日支事件の推移に感ずる所あり「世界の平和と人類の康福」と題する一書を起稿し、將に之を脱稿せんとするに至りたりしが不幸にして之を公刊するに及ばずして健康を害し其儘これを放棄するの已むなきに至れと唯も、幸にしてこれを公にするに適好の時機を得たるを以て一言を題して會員諸君に訴へて其責を塞ぎ得るに至れり幸に諸君のこれを諒せられんことを望む

昭和十四年七月

佐藤鐵太郎識



## 世界の平和と人類の幸福 目次

第一章	理想上より觀じたる我日本國民の天職……………	一
第二章	全世界人類の精神的進路の啓開……………	三
第三章	平和の慾求に基く軍備と國際關係……………	二六
第四章	軍備制限の概観……………	四七
第五章	猶太人の世界統治の根本思想……………	四八
第六章	猶太民族の世界的運動……………	五八
第七章	猶太人決意の梗概……………	六五
第八章	人類の道德と感恩思想……………	一〇七
第九章	回教其他に關する所見の概要……………	一三三
第十章	結言 善處主義の排斥……………	一五五



# 世界の平和と人類の康福

佐藤鐵太郎著

## 第一章 理想上より觀じたる、我日本國民の天職

吾輩の昭和十三年十月の舊稿（日本民族の世界的使命）の結語として述たる如く、日本國民は、如何なる民族、國民に對しても、天地の正道に基き、敵我の差別觀を去り、一視同仁の根本義を堅守すると共に、我天職を遂行するに必要な第一義は、速成にあらざりて完成にあり、との意義を遺るべからずとは、今日に於ける、日支事變の局面に對しては、何となく孱弱の嫌もあるであらうが、併しながら、百年千年の大事業は、決して軟弱なる心の動きを以て判斷すべきにあらず。一時の善處の方便の如きは、如何に外觀の強硬なるにもせよ、決して尊重すべきにあらずと信ずるが故に、讀者諸彦も、吾輩の所論の、動もすれば軟弱觀を呈するを諒知せられ、一讀の榮を賜はらんことを禱るのである。何に致せ、吾輩は其修養の程度としては、極めて不徹底でもあり、自分ながら不満足に感ずる次第ではあるが既に老境に入りたる今日の事でもあるので、凡



二  
そ何事をも遠慮なく、露骨に吾が胸裏を披瀝して、斯道の先輩の批判と訓戒とを仰ぎ、老後の補正的修養をなさんと欲するのである。

出羽の莊内に産まれた吾輩として、次の如き言をなすは、不適當なことで、不都合の至りかも知れぬが、薩摩隼人といひ、莊内男子といへば、何となく一種の誇りを感じるやうにも思はるゝのであるが、戊辰前後に於ける薩摩隼人は、誠に立派なる勤王の士となつて、明治維新の大役を果したのに反し、莊内男子は、果して何事をなしたであらうか。假令幾分か、年を累ねたる時代の觀念に動かされ、感情の錯綜に魅せられたる關係があるにもせよ、佐幕藩士の牛耳を取り、最後迄忍耐して官軍と抗戦を續けた事を誇りとなし、薩州藩士西郷南州等の、深き同情裡に、辛ふじて、天朝の臣たる面目を保ち得たのは、誠に愧入りながらも、感謝すべき次第と思ふのである。其間に於て是非とも考へなければならぬのは、莊内の藩主酒井忠器公以來の誠忠無比なる史證とも稱すべき貴ぶべき事實と、重臣酒井右京以下刑死の秘話などに顧みれば、日本男子の尊むべき精神の躍如たるは勿論、佐幕の小節を死守するなどは、如何に徳川家との間に、特殊なる長日月の主従關係を味ひたりとは謂へ、君臣の本義に照し、餘りにも不思議なる結果を齎したものと謂はねばならぬ。吾輩は或る一種の事由により、酒井右京の忠節に關する秘聞を聞かされて居るので、一層深く當時の事情に心を動かすと同時に、如何に久遠なる而かも的確なる信念あるにも

せよ、動もすれば、一時の心的移動に魅せられて、大義名分を誤り、終に遺憾なる結果を見ることありしやをも忘れずには居れぬのである。而かも此際特に注意すべきは、如何に個人的崇拜の念に迷はされたる、温かき情操の發露とは謂へ、莊内藩士の一部に、西郷先生に對する報恩の時機なりとの誤念を生じ、信僞は知らぬが、莊内地方に不祥の企をなしたる事實を生ぜしと傳ふるが如きは、其間に存する微妙なる一時的錯誤の如何に恐るべきやを痛感せざるを得ぬと同時に、此點に關しては深き認識を切望せねばならぬと信するのである。

右のことの如きは、事實上、何等の價値なき舊聞に過ぎざるも、今回の大事變に際し、日支間に起れる紛糾と、我帝國の大使命と、其間に奔躍する世界諸國の行動と、其精神との關係を省察するときは、多大の訓戒に接するは勿論、此際に於ける善後の策に、永遠の大訓戒を含むに留意せざるを得ぬのである。即ち、此場合に於て最も必要なるは、寸時も感恩の念を遺れず、大義名分の觀念を離れてはならぬのであるが、それと同時に、寧ろ其以前に注意すべきは、其大義名分の根柢の、果して世界人類の理想的大道に協ふや否やを吟味することであるが、何に致せ世界の平和と人類の康福とは、何人も心底より熱望する理想的大道であらねばならぬ。

此理想的大道より吟味すれば、先第一に注意すべきは、世界各國統治者の資格を研討するにあつたので、凡そ人類として世界に群居して存在する以上は、自然の結果として、必ずや相互の間に



正否と利害との關係を生ずるは無論であるが、其間にありて兩者の間に紛議を生ずることなく、常に康福なる状態を維持し得るは、何人と雖も絶對的に翹望する所である。

假令理想的には、希望の如くならざるにもせよ、公正なる判断によりて、紛議の決定を爲し得るを望むは、何人も同様であらねばならぬ。而かもこれは政治の本源であるのである。孔子も教を垂れた如く、民は由らしむべく知らしむべからざるは、勿論の事で、統治者は、自ら其模範を示し、民をして由らしむべきもので、民をして詳細に其進むべき道を知らしむが如きは、絶對に不可能なことである。果して然らば、人類の康福と平和は、其間に介立して之を處理する、第三者の存在を要するは勿論なるが故に、凡そ人類をして康福を享有して進ましめんがためには、眼前の必要に應じて之を處理する、統治者の常在を念願すべきは勿論、若しも人類にして統治者其人を求めんとせば、此點に對し如何なる要求を充たすを條件となすべきやの問題を查覈するの必要あるは、勿論であるが、この問題としては、智恵の優れた統治者を得る事は必要である。體力の優れたる統治者を得る事も必要である。學識の優れたることも必要である。富力も資力も亦考慮の裡に加ふべきは勿論である。乍併、是等の要素は、必ずしも個人的に人類の第一人者たるを要せざるも、是等の諸力を超越し、相互の間に争擾の患なくして、其言に隨從せしむべき高德の人たるを要するは勿論、もしも是等の諸要素を對比しても、争端の發生を覺えずとすれば、是實

に其間に於ける主裁者として、衆人憧憬の的となるべきは争なき所であるが、扱て是等の諸要素を具備したる人格者を得て、統治の任を托するとは謂へ其位置の安定せざる爲、動もすれば、公正を缺き、其判断に公私の迷ありて、錯誤を生ずるが如きことあらば、これ決して信賴すべき資格なきものと、斷定せざるを得ぬのである。例へば共和政治國の大統領の如きは、如何に公平に、如何に清純にして德行高き君子人なりとは謂へ、我より進て自己の黨利を擁護せざる時は、一任期と雖、其位地を維持するに由なく、又如何に高德なる帝王と雖、其帝室若くは王室を庇護する臣僚の幸殃を無視するときは、一日も其位地を維持することが出来ぬので、絶對的に公平の態度を取りて事を處することは出来ぬのである。然るに、若しも大統一系にして、萬世滄らざる假令國家に如何なる事變あるにもせよ、絶對的に其の基礎の動搖を感ぜざる靈位ありて統治者となり、如何に俊秀にして聲望ある重臣ありて、久しくこれを補佐し、時に或は部分的に冠履倒置の嫌ありて生ずることあるにもせよ、決して其靈位を動かさんとするの野望に捉はるゝを允さず、又幾百千萬の國民ありて、聚合するにもせよ、固くこの絶對的な靈位を守護するの眞情を捨てず、絶對的に萬世滄らざるの靈位として、其存在を確守するときは、茲に靈位其物に何等の動搖なく、嚴然として常住不滅なる實を彰はすことが出来得るのである。而かも是等の資格を完備するは、實に難事中之至難事で、人力のよくする所にあらざるは勿論、必ずや、人力外の自



然る趨勢たる人類の歴史に準據して之を求むるの外はないのである。然るに、今や實際に此意義に従ひ、萬世一系にして變ぜざるの統治者を求めて之を仰がんとするも事實上此資格を有するものなくば、後來如何に之を求むるにもせよ、終に其目的を遂行すること絶對的に不可能なるは無論である。假令試に之に類似するの靈位あり、後來或は是を維持するに有望なりと暫定し得るにもせよ、不生不滅の靈位としてこれを仰ぐこと、斷じて不可能である。例へば秦の始皇帝をして、如何なる大英傑たらしめたるにもせよ、歴史上既に亡びて今日なきが如く、假令如何なる大人物ありて今日以後に顯はるゝにもせよ、乍遺憾、絶對的に永續の望なきこと極めて明白である。果して然らば王者、帝者として永遠に存続すべきは、我 御皇室の外これを世界に求むるに由なく、又これを萬世の歴史に求め難きは勿論である。従て永遠不易なるべき統治者はこれを求むるに由なしとして、斷念すべきや、或はまた時に應じて善處的に統治者を變ずるは、其場合に於て既往の歴史を繰り返すものにして、革命は事實上不得已として之を認むるの外なく、人類に萬世不易の理想的統治制を望むが如きは、絶對的に不可能なり、我日本の如きは、如何に目出度御國體とは謂へ、萬世稀有の特例にして決して、要望すべからずと斷念すべきであらうか。

右の如きは、これ實に既往の歴史を繰り返す所以にして、吾等の康福に何等の進境をも與る能はずして、人類の存在を終るものとして斷念するの悲境を與るものと謂ふの外なき次第ではない

か。それともまた、一時的善處法により、一時の平和と、康福に満足すべきであらうか。如此きは、少くとも、吾等の満足する能はざる所である。況んや、皇祖以來萬世一系の皇統を奉戴し、一回の革命だもなかりし、世界各國に類例なき、皇道を仰ぐの至幸を現存して變らざる、我日本帝國の統治様式と、其實際の歴史とを奉戴する、我同胞國民は、此幸榮ある我國體を遺れて、歐亞諸國の悲惨なる境遇を繰返すの不幸なる状態に没落すべき史例を経験するが如き悲運を享けて、平然たるを得べきであらう歟。是實に、斷然死を決して、此の亡國と革命の經驗を排斥すべきは勿論、吾等の同胞人類をして、舊來世界各民族と、各國民の經驗したる、悲哀すべき史例を捨て（亡國二千餘年の歴史を有する猶太民族の如き、悲惨なる事實の如きは、後來決してこれなからんことを望むので、同胞として彼等を見るもの、到底看るに忍びざるところである。）我國の如き萬世一系の皇統を戴くの幸福を享けて變らざるを得さしむ事は、是實に吾等祖先の、至仁至慈なる鴻恩なると同時に、吾等人類の同胞子孫に對する無比の慈仁にして、又無上の重責なりと確信せざるを得ぬのである。

右の觀念は、有史以來、吾等日本國民の精神上、痛快に内含して離脱し得ざる處なりしに關せず、如何に一時的の謬見に過ぎざりしとは謂へ、甚しき迷想に捉えられ、勤王思想の誘起を要するの闇黒界を我史上に現はし、幾多忠臣の奮起を待ちて、辛ふじて、世界唯一の美しき國體を保



全し得たるが如きは、實に我等日本國民の大恥辱なりと謂はざるを得ぬのであるが、明治維新の際一時佐幕の名を附せられたる、一部國民の如きも、唯々反幕諸藩を敵とし、内亂的國難に忠戦せるのみ。一人として反皇室の微感びかんだもなかりしは勿論であるので、此一事の如きは、寧ろ、我等同胞日本國民の、世界人類に對する誇りとも稱すべきである。

亞細亞にも、歐羅巴にも、其他世界の各方面の人類にも、各時代を通じ、史上歴々たる統治者ありしは明白なる事實ではあるが、天運の循環と、君徳の衰頹すゐたいに伴ひ、野心家の策動さくどうを促がし、幾度かの革命ありて生じたる爲、不幸にも、其時代に遭遇したる父祖等が、悲惨なる歴史を操り返したるの事實を今日に於ける子孫に残せる實際の状態じやうたいを顧みれば、何とも言ひ知れぬ悲哀ひあいを感ぜざるを得ぬのである。而かも、今茲に一々革命の歴史を列ねて、之を證するが如きは、餘りにも悲惨なるを感ずるので、之を史上に於ける諸君の探究たんきやうに譲り、僅に必要な大體を掲ぐるに止るのであるが、世界の歴史、殊に歐州及亞細亞の舊史の如きは、事實上連續せる革命史といふても差支ない位の、悲惨ひさんであるのは、争ひ難きことである。

そこで吾輩は、自分ながら、我意を得たりと信じ、幾度もこれも引用するのであるが吾輩の舊著に、(補修帝國々防史論)

(前略)これにても、主人なき世界が、魑魅罔兩の巢窟さうくつとなりてあるといふことが分るのであ

る。従て主人公たるべき靈位れいゐありて主裁するに至らば、人に一點の情量妄念なきが如く、世界は極めて平穩なる體裁となるべし。さりながら、絶對の意義は其の及ぼす處の大なるに従ひ、愈々明晰めいせきならざるべからず。例へば父兄は天成の父兄にして、子弟を以て之に代ること能はず。父は子に對して絶對的に父である。腕力も富力も智力も如何なる靈力も、子を以て父に易ることは出来ぬ。此絶對なる天來の資格しきかくあればこそ一家の平和は維持さるるのである。もしも腕力家に行はれ、或は富力、智力の優劣いゆうれつを以て、家長を定むるが如きことあらば一家の争亂さうらんは到底免れ得べき道理がない。語を換へて之を言へば有徳王となるの主義は、大徳庸徳の争を生じ、強者王となるの主義は、強弱相喰ひの争を生じ、富者王となるの主義は、貧富相争ふの結果となり、智者王となるの主義は智を弄して相賊するの結果となるべく、如斯かく競争の意義を含める主權者は、到底永遠に王たること能はず。従て篡奪の跡竟つひに絶ることなきは明白なる事實である。之に反し、是等の争端さうたんを絶したる主裁者は、常に神聖しんせいにして永久平和の保護者たるべく、世界の平和を永遠に維持し得べき靈位は、此の俊徳しゆんとくを有するにあらざれば占むること能はざるは、何等の疑を挿むべき餘地がないのである。然かも、此無上崇敬なる靈位は、「ナポレオン」及「シーザー」者流の汚すべき座にあらざるは勿論、釋迦しやくか、孔子こうし、耶蘇やその如き、堯、舜禹、湯、文、武の如き聖人の踐むべき所にもあらず。富にもあらず、兵にもあらず、徳にもあ



らず、智にもあらず、此諸力を絶し、一種靈妙なる作用を有する大靈徳にあらざれば、之を占むること能はざるは勿論である。天威の君王統を萬世に垂れ、所謂「開闢以來君臣之分定矣。以臣爲君未之有也」天之日嗣立皇緒」底の、神聖にあらざれば、此俊徳の宿るべき靈位ではないのである。吾輩は國家學に於て造詣する處、極めて淺薄である。さりながら君主國に於ては、君位を覬覦するもの、比較的少く國家は自ら靜穩なる發達をなし得べしとは、疑もなき事實である。況して君位を覬覦すること絶無にして、天來の靈徳、教として監臨主裁するの國家は極めて幸福である。理想上の國家は茲に至り、初めて成立せるものと謂ふべし。世の民主國を以て理想とするもの、即所謂禪讓主義を以て其元首を替ゆるものは、其理想の如何に關せず、統治者の資格として必要な、第一意義が皆無である。神聖の意義が絶然である。要するに、主裁者上位にあらずして下位にあり、世を舉て下流の國民に媚び、害毒これが爲に起り、弛て國家の全體に及ぼし、終にはこれを腐敗せしめざれば止まざるに至るのである。上天まことに下民を佑け、罪人黜伏すと云ふが如きは、自然の結果である。兎に角、民主國は、大統領を始め悉く選舉を以て組成するが故に、人望の二字は彼等の生命である。さればこそ、人望を得んとするの一念は、候補者は勿論、選舉人をも腐敗せしめ、阿諛、諂佞、讒構、收賄、欺誑、其他人道の賊たる、凡その行爲、一として行はれざるなき有様となるのである。もしも不幸に

して上統治者より、下班の官吏、公吏及議員に至る迄、蕩々相率て惡道に進み、權謀術數を以て生命とするに至らば、國家は最早存在すべき資格を失ふのである。(下略)としてある。

更に進で後來の事實を想起すれば、名實共に日本國民となりたる、一部の幸福なる人類は勿論、苟も不生不滅の皇統を最高統治者と仰ぎ、萬一國亂の發生とも謂ふべき事端を惹起する場合に於ては、不生不滅の大意義を有せらるゝ、我 天皇陛下の御決裁を受けて、平和を回復すべき、統治系統の社會國家となりて存在すべき、大道を進んだならば、世界の理想的平和は、人類の自省と共に確立せられ、皇風の光被に連れて此意義は擴充せられ、世界の人類を舉げて、永久平和の幸福を享くるに至るであらう。

右の意見は、皇道の振興を望むの外には、これを求むるに由なきは勿論ながら、何となく一たびは己を得ず、我帝國の武力を振作して其威を藉り、我 天皇陛下の御統治の下に、全世界を征服し、之を一括して日本國統治の下に、置かんとするの野望を抱くが如く、感ずるものもあるであらうが、又我等日本として之を稽るも、独自の慾望を本とし、公正ならざる満足を強要するが如き感想なきにしもあらざるべしとは謂へ、若しも右の如き野望を存するものとせば、是實に世界人類の敵にして、決して認容すべきにあらざるのみならず、反て無始以來、不生不滅の皇統



を戴きて泰平を享有すべき大幸を遺るゝものにして、これ恐らくは、亡國の大原因を醸成すべき所以の大愚策とも考へらるゝのである。吾輩の意見は、萬世一系の靈位を戴き我世界全般を通じ、理想的統治の聯邦制度を開始し、是を無疆に傳えんとするに外ならぬので、決して此世界全般を日本帝國として威張らんと欲するものにあらず。萬國に於ける同胞をして、國民的革命の悲惨に遭遇することなく、萬世一系の理想的統治者を戴き、永遠の平和を康福とを享有せしめんと欲するもので、吾輩の釋迦如來を絶讃して疑はざるも全く此理想を闡明して、後世に傳えたるに よるので、世界の各方面に簇集し、而かも人類の種族に異同ありとの偏見に執着するが如き陋隘なる意見の所有者は、決して理想的進化の途に就きたる優秀民族にあらずと確信するのである。白色人種を以て、特優人種なりと稱賛し、人種及民族間に優劣觀を齎して、これを強調し而かも其品性の物質文明に墜落し、人道の本義は感恩の念の有無にあり、との根本義を忘るゝの實情を知らざるが如きは、疑もなく一種の迷想にして、憐むべき境遇に呻吟して自ら知らざるものである。世界統治の原理を、理想的に、而かも徹底的に稽查するを怠り、此大切なる感恩問題を、善處判斷に委するが如き分裁にては、到底世界人類の康福を推進し、之を無究に傳ふるに努力するものとは稱し難いのである。

## 第二章 全世界人類の精神的進路の啓開

理想上より觀察したる我日本國民の立場は、既に第一章に論ずる處によりて明白であるが、是より、更に進て、吾等日本民族として是非とも、世界人類の精神的進路を啓開し、且之を統一すべき大天職あるを自覺し、假令幾十年の星霜を費すとも、此目的に向て邁進すべきは、實に世界唯一の存在たる吾等日本民族の大責任であると信するのである。

吾輩が、此問題に觸れ始めたる折、獨り自ら感じたる處は、吾等の大日本帝國は、天祖天照太御神の仰られた如く、豊葦原の瑞穂之國は、皇孫の知ろし召し賜ふべく、御定め遊ばされた、世界唯一の尊き御國で、萬世一系の理想的基礎を定めさせられたのであるが、其後の國民は、假令皇國に對する一種の特異なる靈感あり、儼存して變せざりしにもせよ、而してまた、皇祖神武天皇の大詔ありて萬世に輝き、六合一都、八紘一宇の大義を明示し給ふたにもせよ、歳を累ること久しきに及び、自ら日本國民の大天職と大責任とを遺れ、大日本文明の大本たる眞味をも意識せず、唯々、物質文明に魅せられ、偏理的なる科學文明の優劣觀に捉はれ、外國文明を尊敬し過ぐるの風を馴致し、天來の自性を忘却するの弊を生ずるに至つたのである。さりながら、これ實に人生自然の弱點とも稱すべく、東垂の小島國にして、進んで西隣の大陸を指導するが如きは、夢



想だも及び難きは勿論、況して世界全體の人類を指導するの天職我にありと自信するが如きは、其時代に於ける何人も、思寄らざる所であつたのであらう。

従て吾等日本民族は、常に外人に師事し、何等輕侮の意なく反てこれを淨化し、換骨脱胎して日本文明の進歩を促し、三千年の歴史を迎へたのであるが、其間天意策動の結果不知不識可驚大進歩をなし、遂に今日の如き事實を見るに至つたのは、吾等國民の等しく驚く所であるが是實に、明かに精神文明に於て、世界に冠絶する以上は、物質的文明の大進歩を期成するに容易なりとの、天來の大訓上、明白なる所で、これを世界の實歴史に徴するも、精神文明は、數百千年來、殆んど何等の進歩をも認めざるに關せず、數十年前の物質文明の、今日既に隔世の感ある大進歩をなせる、世界的事實によつても明白であるので、我等日本人程此意義を證明し、特種の文明的進歩をなしたる活歴史を有するものはないのである。

我日本歴史の傳ふる所によれば、

天照太神は、御生れながらにして、光華明彩、天地四海を照徹し給ふ程の御氣高さと、御美しさを御備へ遊ばさせられ、宛然日輪の如くましますので、伊弉諾、伊弉冉の二神は、いたくこれを御歡びになり、吾が子多くはあれど、たかくも貴き子はあらずとて、御名も大日靈貴尊（オホヒルメムチの尊）と申上げ高天原を治しめさせ給ふと傳えられて居るのである。かくの

如くにして、天照太神は、高天原を治らすことゝなつたのであるが、八百萬の神は、大神の御齡若く在はし、且は御女性なるを侮り、大神の御心に逆ふ振舞多く、遂に危激兇暴の行さへ度重なるので、太神は、是れ我誠意の足らぬが故なりと、御自身を責めさせられて、石窟の中に、御閉ぢ籠りになつたのである。是に於て、荒ぶる神々達は、彌々誰れ憚ることなく、悪行の限りを盡さるので、高天原は、全く暗黒の世と變り果てたのであつたと、傳へられて居るのである。

高天原が暗の世となつたことが、心ある神々を慄はせたばかりでなく、荒ぶる神々も漸く犯せる罪を悔るやうになつたところから、（當時の制度として、實施せられたる天の安河の會合が召集せられ、八百萬の神が、集合せられた。）遂に、太神の御籠りになつた石窟の前に集り、太神に御詫申上げて、元の如く高天原を治し給ふことを願ふたので、太神はいたく御悅になり、石窟の外に御出でになつた。其時の御姿の神々しさは、恰も東の岫に、旭日の上るが如く、山川も、野も、森も一時に照り輝きて、さしも暗黒の高天原は、忽ち光明の世界に立ち還つたのも、であつたとも、傳えられて居るのである。斯くして、高天原は、平和に立還り、凡ゆる神々も、太神の御制に副ふやうになつたのである。

右は我日本帝國の肇國史とも云ふべき、古代史に記載するところであるが、我日本は、天祖の



御子孫たる、萬世不渝の御皇統を戴き奉り、而かも、天皇は、神代の始より、慈眼を以て民意を憐れられ、世界諸國に類例なき、民意尊重の範を垂れさせられたのであるが、其後政治の變遷により、殆んど専制の状態となつたのであるが、歴代天皇の思召は、常に國民の幸福を重んぜられ、大君の大御意を本幹とし、恩賜の皇恩として、民意尊重の大御心に立たせられたのである。明治天皇御宣下の憲法の如きも、國民要請の憲法にあらざりて、恩賜の憲法であつたのである。他の些細の點は兎も角、此點に就ては、我日本國民一般の、決して忘るべからざる所である。

明治天皇御下賜の、五ヶ條の御誓文の内にも、廣く會議を起し、萬機公論に決すべきを宣せられたので、これを曲解するものは、公論萬機を決するの天意なりとし、公論を主體として、萬機を行ふの義とするが如きは、誠に以て畏れ多きこと、信ずるので、天皇御親政の意義は、決して變ずることなく、御親政を公論に依て決せらるゝの處置を示されたので、公論の二字を振り廻して、天皇親政の本義を、少しにても動搖を來すが如きは謬見である。天皇の親政は、公論を顧みて御決裁遊ばさるゝので、萬機公論に決するの聖意義を曲解して、公論を以て萬機を決する意義と考へてはならぬ。五ヶ條の御誓文には、萬機公論に決すと仰出されたので、決して公論萬機を決すとは、仰出されぬのである。

要之、以上のことは、國民の深く感銘すべき所で、我日本民族は、如何なる君民關係を有する民族なりや、日本民族の如き特異の國教を拜戴する國民は、果して世界のいづこにありや。我日本民族の如き、特異の教訓を拜戴するのみならず、數千年の星霜を踰えて養成したる、而かも、理想的に正確なる、特異の國體を奉持する國民は、果して世界の何所に之を發見し得るであらうか。如何に世界の諸方面を精索するも、國民として、日本民族の如き特異の資格を有するものなきは、近世は勿論、古代と雖、果して世界の何處に現存したることありや。吾輩は斷乎として、其絶無なるを確信するものである。

兎にも角にも、普通一般の見地よりこれを見れば、國家の資格上、當然の結論として、我日本の如き、常住不滅なる國家の存在したる事實は、望み得られないのであらう。併しながら、國家的には現存せざるにもせよ、民族的に、強盛なる特異の勢力を利用し、理義によらず、人道に據らず、たゞ／＼利害の關係より善處し、寧ろ國家の分在を否認し、八紘一宇の原理を主張し、一民族を以て、全世界を統一して君臨せんとするの野望を抱けるものは歴史に必ずしもこれなきにあらずとせば、寧ろ民族的存在として、珍らしきことにあらざるを明知し得べきである。去りながら、民族的世界統一の存在は、未だ此世界に現實したることなく、如何に特種の民族と雖も、民族的に世界の統制を行ひ、事實的に世界の平和を確保し難しとの所信の如きは、吾等人類の確信する所で、假令へば白色人種中にも、民族を異にするものあり、黄色人種中にも、赤色及黒色



人種中にも數種の區別を要する異民族ありて、若しも一民族が、優越的見地に立ち、全世界の總民族を統一して、國家の體制を滅却し、一民族統治の下に、世界統一の業を擧ぐるが如きことあらば、是實に道義を滅却して自己民族の專横を企圖する所以にして、何人と雖夢想だも及ばざる所である。是れまで實在したる、國家に於ける革命の意味を將來する外なく、從て一民族が積年の苦闘の結果として、各方面に擧げたる成功を基礎とし、一民族統制の下にあらざれば統治的權能を有すること能はずとの假想を現實し、これを世界全體に擴延し、我日本帝國が、萬世一系の統治者を仰ぎ、歴史的に實現したる如き事實を、世界的に實現するに至らしめんとするが如きは、到底思も寄らざる所である。もしも、民族の如何を論ぜず、世界に君臨すべき靈位を奉戴し、これを仰ぎ、これを佑けて大成を期し、これに依りて、世界人類の康福を確定すべき基礎を樹立し、理想的統治の實を擧げ得べき望あるに至つたならば、そこで始めて、世界人類の康福を認め得べき望もあるであらう。

吾輩が、此問題に觸れそめた頃、世界民族創生に關する疑問にも考慮を加へたのであるが、吾輩が自己の職務上、海軍戰略と戰術とを研究せんとするの結果として、戰略と戰術とを別途に考究するの不可なるを感じ、此兩者は常に密接に、相交又して考察すべしとの結論を得たのであつたが、一日郊外散歩の際、無意識に、「輪交」の紋章を附したる某紳士の姿影を見、卒然として

世界民族の問題に着想し、我等人類の原住地とも謂ふべきは、東西歴史の交叉界たる、中部亞細亞地方なるべし。而かも其一例としては、世界の歴史上、最も關心すべき「ノア」の洪水と禹の洪水の如きも、或は同一事の異傳なるやも知るべからず。人類の祖先として、西洋歴史に傳ふる「アダム」「エバ」の如きも、或は印度地方の傳説と一致するにあらずやなど、想像するに至つたのであるが、若しも「ノア」の「ハルク」の停止したる「アララット」山を、英將「ウォルター・ラレイ」の意見の如く、小亞細亞地方にあらずして、大夏の一高山にして、「インダス」河と、「オキサス」河の水源地方なりと假定し、禹の大夏の人なると、舜の僞姓と類似する（支那にては、「オキサス」河を媯水と稱す。）傳説にして、萬が一にも虚偽にあらずと假定せば、「ノア」の洪水と、禹の洪水との間には、一縷の脈絡なきにあらずと假想し得るやの疑すらも自ら生じたのであつた。

そこで吾輩は、試に右の如き假想を是認するの勇氣を缺くも、發意的に假想したる此見地に立ち、人類の原住地を盲索したる結果、何となく古代中央及西部「アジア」の方面に、關心せざるを得ざる結果となつたので、これを當時の歴史家の權威者として有名なる、吾輩の親友故筆作元八博士に語り、歴史と地理との聯系より、考察したる意見を求めたのであつたが、同博士の誠實なる忠言により、其史觀を公表するの早きに過ぐるを感じて、差控へたのであるが、其後大正十



二年に起れる關東震災の際、其論據の中心ともなるべき史例の記録を失ひ、其内にも、英國の「エリサベス」朝の時代に發刊したる、「ウォルター、ラレイ」の世界歴史を焼失したる今日としては、再びこれを參考とするに由なきが故に、臆氣ながら、記憶のまゝ、當時他の史料を併せて研究したる概要を記述しようと思ふのである。但し歴史的事實として之を證言するは吾志にあらず、唯興味ある一事例としてこれを引證するのみである。

一、我日本民族は、「バビロン」創立以前の古き歴史を有し、「スメラ」(Sumara)「アハヂ」(Ag-hadi, Accad, Agadi)「スサ」(Susa)及高天原に何かの關係あらずやとの疑を有する「アマラ」地方(「アマラ」の名ヲ有スル「アマラ」河ありて、南北に貫流す。(Amara))などあり。日の神あり。月と海の神を兼ねたる神を「スメラ」の市たる「ウル」(Ur)にあり。また文學の神、法律の神と傳えたる「スサノ」(Susano)の神あり。「アハヂ」及「スメラ」と「アマラ」河地方を隔て、存在するなど、何となく引きつけらるゝ如き心地せざるを得ぬのである。

二、右の古代史によれば、我等日本民族の母國は「スメラアカッド」(Sumara, Accad)にして、「スサ」と「アマラ」河を隔たる「アマラ」と同地方にありとすることを得べく、古代史上一種の味ある如く感ぜらるゝので、萬更根據のないこともなき様に感ぜらるゝのである。

三、右の如き、歴史上不確實なる事談は、左迄に重ずるに足らざるべきも、「バビロン」民族の埃及より歸來する以前に於ける史蹟を重視し、我日本民族は亡國の事實を傳ることなくして東遷したる民族にして、一は北方と西方より、一は南方より迂回して、我日本に入れりとなし、「アハヂ」族は北方(西方)、「スメラ」族は南方より來れりすれば必ずしも首肯し得ざるにもあらずと考慮せば、全然假空の談として、輕蔑し去ること能はずとも、考へらるゝのである。

吾輩は、右の二觀察に一種の興味を覺へ、先第一に「バビロン」民族の有する思想と我古代日本民族の思想的系統とを對比し「バビロン」人の同族として知られたる、猶太民族の精神的文明の根本の特異なるに、疑を起さざるを得ないが、尙猶太民族の餘りに無慙なる亡國の怨と、上代に於ける、埃及關係を考慮し、故國には一種特異の民族となりて歸れるもので、今日に於ける猶太人の不動にして執拗なる民族性は、同情すべき價值あり、而かも如此思想を以て、世界の人類を指導せば、相互間に於ける嫉惡争鬭を催進するは勿論、舊來の世界歴史と、何等の擇ぶところなかるべきを痛感したのである。

更に試に其の真相を吟味し、猶太の宗教と、基督教と、回教と、婆羅門教と、佛教とを顧み、歐洲に於ける、希臘及羅馬の哲學と、東洋哲學(儒教及諸子百家の哲學)と、我國固有の神道と



の間に存する特異性を吟味するを、決して徒爾とは考へられぬのであるが、既に右にも述べたる如く、我日本民族と、猶太民族との精神的關係に一考を加ふれば、我日本の如き古き、正確なる統治様式を有する獨立帝國も、更に古き時代の事實を精査すれば、前にも述べたる如く、古「バビロン」が其故國なりとの奇説をすら、考られぬではない。既に猶太の事に關し、深き研究を有する現今の歴史家にして、現地の討査をすら實行したる篤學者の内にも、日本人と猶太人とは其祖先に何等かの關係を有するやも知れずとすら、考ふるものもあるとの事である。然るに退て、現在の猶太人は、其性格より見るも、其の風貌より見るも、世界的關係より見るも、また轉じて文明の種類より察するも、日本民族とは同一性を有するとは見へぬので、先第一に、我日本は立派なる獨立國として御皇統を戴き、三千年來不變不動の而かも一回の革命もなき統治の下に存する、世界唯一の君主獨立國であるのに、猶太人は、殆んど同年間、亡國の民として悲哀なる歴史を累ね、或は不合理なる壓迫に泣き、或は悲むべき境遇を怨みつゝあつたのである。而かも猶太民族は、其悲むべき二千年以上の亡國歴史を累ねたる結果、其國民性の優秀なるに關せず、民族性に一種の僻を生じたのは、實際免れぬ所である。何に致せ、二千年以上の亡國の歴史を累ねたる結果、國民的に深き僻を生じ、極端に惡擦の多き擦枯となるも、無理ない事で、我日本民族の如き、坊様育ちとは同様に考えられるのである。而かも實際の對應策としては、是非もないこと事

はあるが、他民族の猶太民族に對する態度は慘烈を極め、全然仇敵に對するもの、如く、猶太民族もこれが對策として、悲痛なる決心をなし、個人的若くは民族的の成功を以て、世間の智的方面と、經濟方面と科學的方面の雋才を自己民族に收め得たるにもせよ、依然として國家的勢力を有せざる以上は、更に轉向して國民の一人として策動する場合にあらざれば、民族的勢力を公現するに由なく、況して國家の武力を、自民族に收むるが如きは、絶對的に不可能であるので、武力其物の世界的價值を減ぜんが爲、國際聯盟と軍備制限の議論を以て、世界を動かし、猶太系の名士嚮を並べて登場し、而かもそれに先立ち事實上世界を主宰せんが爲には、主として金力による外なしと悟り、此目的に向ひ、全力的に奮勵努力したのである。今茲に參考として掲ぐべきは、日本國古來の事實として、國民間に士農工商の四班あり、私慾を捨て、公益に全力を盡すべきを、士班の本分となすも、猶太人は金力を以て動かし得べき一方面をのみ目標とするので、全體に於ける自然科學を對象とする、商業の方面に於て、世界的優越の資格を占有するに努め、感嘆すべき決心を以て其成功を勗めたのは、實に猶太人の特色であつたのである。此點より我等日本人の立場を考察すれば、日本民族の、根本的に、士族的訓練を主として養成せられたるは勿論なるも、利害方面に對して養成せられたるは、天來の利福を其儘に發揚すべき農漁の方面に、天來の長所を發揮して天然の富源を開き、此天然の富源に人力を加へて、更に其價值を増進すべき



工業に於て、物質文明に立ち遅れ、久しきに渉りて世界的優位を占むるの望なかりしにもせよ、近來西洋文明を取入れたる結果として、驚くべき工業的進境を示し、天然的には、世界の爲に何等の寄與する所なく、唯々甲より乙に其成品を移動し、其間に自己の便益と、利益とを贏得すべき商業主催の人をして、猶太人の占むる所と、同様なる結果を見んとするに至つたのである。

仁義道德を以て世界を統制せず、利福を以てこれを行はんとするが如きは、是實に武力的暴行を以つて、天下を統一せんとするに同じく、武力に代るに金力を以てするに過ぎざる、有史以來に於ける世界的常弊であるので、道義を本とせずして、永久に人類間の康福を進めんとするが如きは、斷じてよき結果を見る所以ではないのである。然るに萬が一にも人類道徳心の奥底に嚴存する一視同仁の觀念に基く、坦々たる王道を捨て、可憐の境遇にある猶太人に對し、差別待遇を行はんとするが如きは、以ての外である。要するに、猶太人の取りたる方針は、既往に於ては兎も角、後來世界の人類の康福の爲には、一時相敵間に想起する善處法と謂ふに過ぎざるものである。如何なる方法を講ずるも、本來の大理想に基き、世界の各民族を一括して、之を同遇し、公平なる道義的思想に基きて、其幸福を求め、公正なる統治の下に、其福祉を進むるにあらざれば、幾千年を累ぬるも、常に既往と同一なる戦亂の歴史を繰返すに過ぎざること明なりと信ずるのである。

こゝで吾輩は、道義的に優秀なる、世界統一の大法を求め、猶太民族の猛省を期し、二千餘年を通じて、悲惨なる境遇を繰返したる事實あるに關せず、毫もこれが爲に麻痺むことなく、以て今日に至りたるの偉業を成就せしめ、完全に世界統治に關する同志の實を擧ぐると同時に、猶太人をして人道を全うせしむるの資格あるは、日本の國體に覺省して悟る所あらしむるに外ならざるを信じて、これが實行を促さんと欲するのである。

何は兎もあれ、世界民族の精神とする處は、理想的統治者を發見し、これを推戴して、世界人類の康福を確保し、萬世不變ならしめんとするに外ならざること勿論なりとは謂へ、一時的に是れが存在を發見するも、統治者其人にして、如何に優秀なる智徳を有するにもせよ、欺瞞的慾心にして含有せる以上は、所謂野心深き一種の梟雄に過ぎない。必竟するに自家の榮福を進めんとするに専念するの臭味を脱すること能はざるは勿論、假令、一二の聖賢に此鄙心を抱かざるものありとするも、其人にして死殘を免れざるときは、世界人類の受くる結果は同一にして、古來の歴史を繰返すに過ぎること、勿論なるが故に、永久存在の意義を、國民か、民族かに求むるに外なきは勿論である。語を換へて之を言へば、一優秀民族が、民族單位を以て、永久に世界に君臨するか、一優秀國が國家單位を以て其位地を占むるか、二者其一の外永久に之を望むによしなく、これを多數者は優越なりとの觀察と混同し、其正否を決するときは、依然として舊來の弊害



を避くること能はざるは勿論、假令へば「ラテン」民族は優秀なるが故に、同民族多數者の意見に委せて、全世界人類の幸福を進むべしと云ふが如き、不合理なる方法を強行せざれば、已まざるに至らんこと、また蓋し明である。これは決して稱用すべき方法にあらざるは勿論、また假令へば他の民族が、優秀民族となるも、其の民族が世界に君臨するに至らば、民族を基根とする革命の世界となり、また終に從來の事實と、大差なきを見んこと明かである。然るに、もしこゝに一國あり、歴史上革命の事實なく、其の民生を常に同系統の君主を戴き、絶對的に何等の異心なく之に臣事すること、我日本の如き神國ありとせば、世界の民族相協同し、其君主を奉戴して一國となり、今日に於けるが如く、世界各方面に於て特異の關係ありて必ずしも相一致し難き所あるにもせよ、一君主の親裁の下に、自治の様式を取るに満足するに至らば、茲に始めて、八紘一宇の大基礎を樹立することが出来るので、つまり今日の一國の裡に、自治制度の行はるが如く、其の自治の内容及これを統治する中央政府の關係なども、考慮の上に置くの必要あり、最も幸福なる状況に於て、人類問題を解決すべきである、吾輩は深く信ずるのである。何に致せ此問題に對し最も力ある答案は、今日に至りて之を論ずるは、餘にも迂濶なるが如きも、封建制度の如き自治の様式を世界に試み、以て世界各國をして、各自の存在も、人類の幸福を保ちつゝ、而かも相侵さず、世界唯一の統治者を奉戴して、世界の平和を維持するにありとは吾輩の堅く信ずる處である。

更に眼を轉じ鑷て考ふれば、凡そ人生の大局より察するに、國家といひ、社會といひ、國民といひ民族といふも、要するに個人の幸福を得んが爲の集團である。果して然らば、國家社會の爲に、個人の幸福を奪ふは、逆さま事ではないか。従て國家社會の爲に個人を犠牲にするは、根本義に反するものであるなどと唱ふるものもあらふ。乍併此個人主義は必竟するに個人の幸福を生ずる所以ではなく、個人々々が自己本位に立て他人を顧みぬ状態に於ては、獨り孤獨の生活を餘儀なくせらるゝのみならず、必ずや悲むべき孤獨生活を營むの外なき状態となるであらう。そこで共存の意義を全うする爲に、人道なるものが自ら現出し、此人道を守らぬものは、自ら衆人の壓迫を受くることとなり、この人道の批判が理性と情操との試練の上に、父母、兄弟、姉妹間の自然的情義の上に進められて來たのであるが、而かも其内に優勝劣敗の利害的歸趨も自ら加味せられて、正道に踏み迷ひ、優越者の自制力が敗れて放縱となり、阿諛とか憎惡とか種々の混淆したる相互關係を生じ、遂に今日の墜落状態となり、不可救結果ともなつたのである。果して然らば、今更個人尊重を根本義なりとするが如きは、人類の原始思想の悪化にして、何等の鍛鍊と自省とを経ざる境遇に復歸せるものであるので、現代に於ける西洋思想の、個人主義とか、自由主義とか、民衆主義とか稱するのは、此時代を好機とし、幾百年を経ても此の意義に關する修養を努めねばならぬ。現代に於ける世界人類の自省は、此點が何よりも大切であると信ずる。



## 第三章 平和の欲求に基く軍備と國際關係

元來世界人類の等く望む處は、前にも述べたる如く、世界の平和と人類の幸福とにあるは勿論なるも、是程の重大なる問題を根本的に查察せず、世界各國及民族間に、目前の利害に捉はれ其根本義を重視することを遺れ、主として善處的判斷に據て實行せられたる結果、國際聯盟若くは協約を結ぶことにのみ狂奔し、其力によりて一時的國際安定を圖ると同時に、自國、自家及自己の利害を主としてこれを考察して、私慾的要求に應じて發生したる國際的事實其物を構成したのであるが、これ決して時代の進歩と要求とに伴ふて理想的に發生したる次第ではない。乃ち其目的とする所も、古今を通じて大要左の二點に含まれて居るのであるが、今茲に吾輩の舊稿に基づきこれを論ずれば、

## (一) 國家及國民共同の危険を防ぐ爲

## (二) 國家及國民共同の利益を保護する爲

であるが、古代の事例としては、「エジプト」、「バビロニア」、「アッシリヤ」等諸大國の繁榮に伴ひて生じたる外壓に對し、其中間に介在する「ユダヤ」、「フェーニキヤ」及「シリヤ」等の小國は、已むを得ず、相協同して大國に當つたのであるが、右の如き事實は、西洋歴史の示す所に從

ひ明白で、支那戰國の時代に於て、蘇張の雄辯の産物たる合從連衡の語あるも、亦同様であらう。何に致せ、太古時代の事例としては、「ベルシヤ」の大軍が、大規模の「ギリシヤ」遠征を試み、「ギリシヤ」に於ては、「スバルタ」を盟主とする聯盟を作つて、之を撃退したるを始めとし、近くは「ナポレオン」に對する歐洲同盟が構成せられ、英國が主なる活動者として、史上に光彩を放つたなども其一例である。世界戦争の事實も亦之に同じく、同盟といふも、協約といふも、其實質に於ては同様であるが、幸にして協約側が聯盟の目的を果し得たのである。而かも同盟といひ協約といふも、皆是れ自己の利益に基く協約を本とするので、決して精神的結合ではない。従て、其離合の利害と相伴ふは論ずるを待たぬのである。又從て利害關係に異同を生ずるに至れば、殆んど何の會釋もなく、手の掌を反すが如き態度をとり、弊履の如く、昨日の友邦を捨て去るはまだしも、反て鋒を逆まにして、其胸に擬することすら尠からぬのである。要するに、是迄の國際的結合は、其凝聚力極めて弱く、「同盟條約とは、締結諸國の目的及危険の共通なることを表明するに過ぎず。」と「ビスマルク」は言ふたさうであるが、實際國際政策なるものは、是も「ビスマルク」の道破したる如く、「宛かも流動體の如く、或る事情の爲に固定することあるにもせよ、周圍の大氣の變化に従ひ、元の状態に還る。」ので、決して其眞價を過重視することなきを要するは勿論、國家の利益を犠牲に供してまでも、國際的契約を遵奉するの義務なしと



は、一般に信ぜられつゝ解釋せらるゝ所である。

右の議論は、故實作文學博士と共に、戦史の研究中、常に相論し、相語つた所であつたが、古來外交當局者が或は條約を以て「紙の一片に過ぎず」と傲語し、或は「印章や封臘は索よりも強くはない。」などと放言したのも尠からぬと云ふことである。併しながら、是等の暴言は、暴言として之を見るべく、決して士君子の遵守すべき金言ではない。「錦旗は西陣にあり」との暴言と、相擇ぶ所がないのである。何は兎もあれ、國際關係は、正義正道を本とすべきもので、一時の利害に執着して、百年の大計を誤ることなきに務めねばならぬ。

「フレデリック」大王が、「不謹慎に約束したる場合と雖、個人としては之を嚴守せねばならぬ。併し個人の言質は單に一個人の關係ではあるが、君主の言質は、全國民の幸殃に關するのである。萬が一にも國家に不利益なる條約を固守する爲め、一國が滅亡に瀕する場合に於て、條約其物と一國の運命と孰れが大切なりやと問はゞ、如何なる人も、何の猶豫もなく、明かに條約破棄の適當なるを答ふるならん。」と自ら反問し、自ら明答を與へたのであるが、何に致せ國際條約は、其國に利益ある場合にのみ實行せられ、利害の觀念に獨立に、道德的に、死生を侶にするが如きことは、今日は勿論、古來殆んど見ざる所である。殊に歴史上、明白に臭氣鼻を打つが如く感ずるのは英蘭佛三國關係に於ける、佛王「ルイ」十四世の小才子的な對外態度である。而かも如此小

策は、終局に於て失敗に終るの事實を遺れてはならぬ。

文化大に進みたりと稱する近代に於ても、同盟の義を破りたる顯著なる實例尠からざるは、遺憾ながら明白である。千九百一十一年、二年の「バルガン」戦争も其一例で、近き世界戦争に於ても、同盟の恃むに足らざりし最も顯著なる實例を遺したのである。而かも、是れ實に、實際已を得ざるの結果で、寧ろ同盟を過信するのが過失であると感ずる位である。(日英同盟の如きも、英國の對露關係上、必要であつたのであるが、露國の衰運と、英米關係上の利益が、英國をして之が繼續を努めざりし所以である。)されど、猥りに同盟の約束を破棄するは、其信用を失ふ所以で、決して賢明なる態度ではない。覇者其人は兎も角、王道を進むべき國家は、歴史上右の如き醜行爲を遺すこと決してこれなきを努めねばならぬ。要するに國際聯盟及協約は、利用すべきものにして、忘れても利用さるべきものではない。併しながら、前にも述べたる如く、賢明なる外交は、決して背約を伴ふべきものではないので、七年戦役に於ける「フレデリック」對英國の場合の如き、英相「ピット」は、佛國の力を海上に注ぐの結果、其の海上的地位の危からんことを恐れ、「フレデリック」を輔けつゝ之を利用し、佛國の背後を突かしめ、是により佛王をして、已を得ずして、海上の發展を斷念せしめ、又自國の費用を以て、「ハノーバー」軍を組織し、力を「フレデリック」に協せしめ、巧に海上の威力を利用して、専ら印度及「アメリカ」に於ける、



佛の殖民地を獲得したのであつたが、「ビット」辭職するに及び、之に代りて局に當れる「ビュート」は大觀的頭腦に乏く、財政界の一時的救済の爲め、俄に普王との約束を破毀し、突然軍資の供給を中止し、「フレデリック」をして甚き窮境に陥らしめたのであるが、其後「ビュート」は失脚し、小「ビット」立つに及び、英獨の關係を回復せんとしたのであるが、「フレデリック」は、酷く英國の不信を怒り、他の諸國に對しても、亦同様に信用を墜したので、「プロシヤ」及「ロシヤ」の猜疑心は、三國同盟の成功を妨ぐる結果となり、合衆國獨立の當時の如きも、彼の有名なる武装中立同盟が成形し、英國をして大なる困難に陥らしめたのである。

何は兎もあれ、同盟と曰ひ、聯盟と曰ひ、協約といふも、主として利害の關係より締結の必要を生ずるので、其國に不利なる場合に於ても、尙且他國を強て、約束を重んぜしむることは、實際上不可能であらねばならぬ。されど若し、締盟對手國を畏敬せしむるだけの實力を備へて居たならば、必ずしも條約破毀の要なくして、自國の意思を貫徹せしめ得るであらう。但尙此場合に於て、一言を費すの必要あるは、軍備のことである。試に歴史に依て之が解決を求めんには、英國の「クロンウエル」時代に依るを最上とするのである。何となれば、英國の今日あるは、實に同時代を基礎とするからである。乃ち「クロンウエル」が、英蘭合同の大計畫を立てた際、蘭國は實際世界第一の海軍國で、英國は之に比すべき資格がない位であつたが、それにも關せず、共

同艦隊の編成の折には、英國の負擔を大にし、英國と蘭國との分け前を、三對二位に止めやうとする方針が是認せられ、英六十隻、蘭四十隻といふ、全然不均衡なる艦隊が編成せらるゝことゝなつたのであるが、尙、其後は蘭國に對し、兩國受持の比率を改め、蘭三英五としたので、蘭國は寧ろ其負擔の輕さを欣んだであらうが、是より後、蘭國は終に英國と相比肩すること、事實上不可能になつたのである。

以上の關係より推斷すれば、「國際同盟には必ずや、實力の、之に伴ふを要す。」の一言が明白となるので「クロンウエル」の計畫は、現時に於ける五大強國海上武力の比率を定めたと同一考慮によるの外、實際の判斷が出来ぬのである。

要するに、聯盟協商等の形式によりて世界の平和を求めんとするは、古來欲求の自然的結果なるも、其效力の如何は、相互に、相畏敬するだけの實力を有すると否によるので、此點より考ふれば、實力なしの聯盟加入は、友國に向ひ何等權利の主張をなすに由なくして、反て義務の遂行を迫られ、竟には友邦の爲に走狗となるに了るであらう。古來同盟艦隊が、互に難局を避け、競て容易なる位地に就て成果を求め、其甚きに至ては、勝敗の大局を忘れ、反て友隊の損害の大なるを快とするに至ることすらあるは、史上明に證して疑を容れざる所である、但し此際注意すべきは實力の二字は、疑ひなく、單に兵力のみを以て測り得べきにあらず、之を動かすべき經濟



力と、之を有効に使用すべき外交をも指すので、固より兵力のみを以て之を成すべきにあらざること無論であるが、併し其結局に於て、兵力に歸することも亦明白である。

既に前文にも述べたる如く、英蘭兩國が新教國聯盟を企てたる際の如きは、兩國海軍の義務的割當艦數を限定し、第一に蘭二英三とし、繼で蘭三英五と改めたのであるが、蘭國は軍資を惜み、此義務をすら果さんのであつたが、此一事の如きは、明かに英國の永へに盛大に、蘭國の日を追ふて衰頽に歸すべき主なる原因で、是を、華府會議に於て協定したる英米兩國の比率に照し、又是を我國と英米との限定に對し、一種の感なきを得ぬので、それと同時に、何となく英國は當面の經濟的苦痛に致されて、蘭國に類する立場を取り、米國は積極的に英國の立場を取りたると同時に、海軍力の限定比率の世界的に、何事かを語るが如く覺ゆるのである。されど國家の實力は、其實兵力のみではなく、其根本たる國民の道徳力であるので、是を忘れたる世界的聯盟及協約は、反て終に面白からざる結果を生ずるに至らんことを恐るゝのである。我等正義の國にして、苟も世界の平和を求むる以上は、此點に關する正しき結論を得て之を嚴守せねばならぬ。西洋歴史の大家として命名ある、箕作元八博士は、國際聯盟を論じ、

凡そ一國の存亡盛衰は、一に繫りて其國民の覺悟の如何に存せり。自ら實力を備へざるものは孤立自守の力なく、同盟に據る時は、單に同盟國に利用せられて自ら之を利用すること能は

ざるべし。故に苟も國際の間に國を建つるものは、須らく先づ其實力を養成し自ら他國の畏敬を起さしめ、他の實力ある國と同盟し、忠實に之を援助すると共に、對手をして亦能く我に對して忠實なる援助を與へしめんことを努めざるべからず。

と論斷したのは、よくよく歴史上の事例に鑑みての事であらう。

右に述る所によりて察するも、國際上第一に注意すべきは、國民精神の剛健なるや否やにあつて存するは勿論であるが、事實上の要素としては、第一に國家の實力を充實するにあるは疑もない事である。而かも、其究極に於て、軍備の整否を第一義として考ふべきは、是亦疑を容れぬのである。然るに近代に至り、國家の武力を呪詛するの風、一部思想家の間に行はれ、其甚きに至ては、國軍の指揮に任ずる將校を評して、惡魔の權化なりとすら呼ぶものがあるが如き状態となつたのである。是實に、時代思想の變態的奔騰を示すものではあるが、國家なき民族の世界政策として、軍備を呪詛するは、如何にも首肯せらるゝのである。猶太民族の企劃なりとして聞く所を述べた、舊著「新日本への道」の一節に、

武力的戦争は、吾黨の思ふ壺に入り、經濟問題に移轉し來りつゝあるのである。金力の點に於ては、吾黨が優勢である。従て、戦争の場合、交戦國は結局吾人の援助を仰ぎ、其結果吾人の思ふまゝに操縦せられざるを得ざるに至るであらう。果して然らば、吾黨は狹隘なる國法を破



棄し廣大なる國際的國法を設け、全世界を統一支配するに至るであらう。(中略)吾黨は、吾黨の壓倒的實力を有する出版物の力に依り、日夕科學に對する絕對的服従を鼓吹すればよいのである。彼等の知識階級者は、いくらでも其智識を誇るがよい。吾黨の諜者の構成したる學問は、いくらでも應用せしめて宜しい。吾黨の組成したる「ダーウイン」「マルクス」及「ニールチエ」の學説は、果して如何に成功したかを見るが宜しい。是等學説の及ぼす破壊的價値と、腐蝕的能力とは頗る明瞭である。(猶太人ノ言)

又猶太人の努力に關して述べたる、同書の一節を紹介すれば、

歐洲の歴史を繙くときは、古來、幾多の國家の興亡を看るので、其間には悲慘なる事實を傳へ、注意すべき價値あるもの頗る多いのであるが、亡國に伴ふ民族の運命として、最も注意すべきは猶太民族である。同民族は、上世に其國を失ひ、已むを得ずして四方に流浪し、到る所輕侮せられ、虐待せられたのである。此の如き民族は、自然の結果として、一種の偏曲なる性情を有すると同時に、金力によつて其位地を保つより外、何の樂みもないので、二千幾百年の辛苦を経て、今や立派に世界の富を握るに至つたのである。特に、彼等の爲に幸なるは、歐洲の物質的文明が、彼等に好機を與へたことで、表面上は兎も角、其實際に於て、段々と其勢力を高めて來たのであるが、顧みて其境遇を思へば、亡國の民たる悲痛の情、自ら心腔に燃え、

他の國家の隆運を呪ひ、其倒壞を欣ぶは自然の結果であらねばならぬ。而して此報復の念は、秘密裡に於ける幾多の暗中行動となつて行はれ、其表面に於ては、立派なる聲言となりて人心を動かし、一步一步に、他の諸國を危険なる状態に導きつゝあるといふことである。今試に、彼等の目的なりと傳ふるところを擧ぐれば、

- 一、全世界の經濟界を掌握し、逐次に、主權其物をも自家の手中に收むること。
- 二、現在の國家組織を破壊し、民主的となし、進んで國家以上の統治機關を樹立し、國家の權力を奪ひ、殊に君主國を破壊するに努力すること。
- 三、人類の享樂氣分を盛にし、養澤心を増長せしめ、其の倒壞を促すこと。
- 四、打算的氣分を養ひ、平和熱を鼓吹し、青年の意志を薄弱ならしむること。
- 五、印刷及教育の機關を自己の掌裡に收め、現在の社會的秩序を破壊するに努むること。
- 六、階級打破の思想を養ひ、其間に存する爭鬭心を助長すること。
- 七、國民性を打破し、愛國心を滅退せしむること。
- 八、法政統治の契を助長すること。

の八ヶ條を數え得るのである。

右は、吾等日本民族の、よく／＼注意すべき所で、要するに、平和論と曰ひ、軍備撤廢乃至削



滅論といひ、其期する所主として國家の權威を概ひ、進で國家以上の統治機關を樹立し、事實上國家を無能力ならしめんとするにあるとも見ゆるのである。然るに、十九世紀の中葉頃より、歐洲諸國の勞働者が、(猶太系統の宣傳の結果なると否とを問はず)事實上、國內の他階級者と其利害關係を異にするに着意し、之に藉口し、勞働者相團結して、自己の屬する階級の利益を増進せんが爲にも、而してまた、今日に於ける支配階級の羈絆を脱せんが爲にも、寧ろ國內關係を去て、世界的舞臺に移るに如かずとの意見に動かされ、「オーウエン」、「フリーエール」、「カール・マルクス」及「フリードリヒ・エンゲルス」等、先輩の訓練を受け、千八百四十七年に至り、世界的なる勞働者同盟大會の成立を見るに至つたのである。而かも此大會は有名なる共產黨宣言を發し、其目的を表明したのであるが、要するに同同盟は、非國家主義なる世界主義者の團體で、當時非國民としての非難が高かつたので、其宣言に於ては、無産階級の要務は、努力して、政治的に、優越なる地歩を占めんとするにあり、其所見の、資産階級の主張に異なる所あるは已を得ざるに出るのである。而して國內に於ける階級間に、反抗心の消滅するが如く、各國民間に於ても、亦同様なるべきは勿論なりと雖、決して是が爲、「國民」としての存在に變化を生ずることなく、萬一他者の侵略し來るが如きことあらば、所屬國家を防衛するの權利を主張しつゝ、國事に盡瘁すべし。との意味を宣したと言ふことであるが、兎にも角にも、勞働者乃至無産階級の間に、世

界的運動が開始せられ、引繼て勞働者團體の非戰論が高唱せられ、

吾等は、強奪によりて征服したる人民、及野蠻なる戦争によりて荒廢せしめたる邦國を、我々の儘に分配する帝王には斷じて服従せず。

とさへ、唱ふるものあるに至つたのである。(是にても、歐洲諸國の國體が、全然我帝國と其成立を異にするに證し得るのである)而して後、各國社會主義者は、右の世界的運動と共に、世界的提携を企てたので、其運動は、主として國家の行動を妨害せんとするの事實となり、普佛戦争前後の非戰論ともなつたのである。そこで今、社會主義者の唱ふる非戰論なるものを拉し來りて、之に輕觸を試みれば、先づ大要左の如くである。

社會主義者の唱ふる世界的平和論は、決して非戰論の全部ではない。學者及人道家は人道上より非戰論を唱へ、「アナキスト」も「サンヂカリスト」(無政府主義者、職工組合革命主義者)も、自己の利害より非戰論を唱へ、宗教家も博愛主義より戦争に反對するのであるが、社會主義者の非戰論は、其概念を所謂階級戰鬥に發するので、國際戦争は、多數勞働者の敵たる資本家大地主の福利の爲に開始し、進行せらるゝもので、勞働者階級としては、慘禍を受くるのみで利益がないといふに基因するので、之に伴ふ結果として、軍備に反對するのである。要するに、戦争は軍備ありて後に起るものなりとの謬見に基き、軍備なるものは國家の安寧と秩序とを維持する爲に必



要なりと號し、一般國民をして其の經費を負担せしむるので、實際之を行使する政府當局は、多くは有産者階級の爲に利益あるを目的とし、動もすれば、戟を逆にして納稅者たる無産階級に簿くする事すらあるので、不得已して之に反對すると云ふ事である。況して植民地の爭奪の如きは、全然資本家の爲にするので、政府は國家の名に於て國家の公器を用ひ、有産階級の爲に其利益を増進するに過ぎず、勞働者、無産者階級に於ては、殆んど何等の利害的交渉だもないと云ふのである。加之、戰爭の害毒としては、人類相互の殺戮、復讐心の誘發等に藉口して之を論ずるのであるが、右の害毒即戰爭に對應する手段として、武斷主義の勃興となり、跋扈となり、遂には一般民衆の不幸となるのであると迄論ずるのである。

社會主義者と、無政府主義者と、共產主義者とは、共に軍備に反對するのであるが、其態度に於ては、若干の相違點を見出すのである。即ち無政府主義者及共產主義者は、軍備の有害にして無用なるを説き其絶滅を祈るのであるが、國家社會主義者は少しく其主張を異にし、要するに軍隊改良論である。今試に其説く所を聞くに、現今の軍隊には、奴隸氣分を含むが故に不賛成なるも、其服役年限を短縮して負擔義務を軽減し内は内地の公安維持に任じ、外は國際的警察の任に當らしむるに至ては、毫も異議あるにあらずと云ふものもあるのである。而かも、是實に世界大戰に際し、彼等社會主義者の歩武の整ざりし所以であると云ふことである。但し、露國勞農黨の

如きは、決して軍備を撤廢せんとするものにあらず、反て、其主義を世界に廣めんが爲、有力なる軍備を要すとの結論上に立脚しつゝあるのである。

之を要するに、彼等の議論は、爲にする所ありて方便的に發するので、軍備其物に對する正しき判断によるのではない。「戰爭は軍備あればこそ起る。」など、速斷するが如きは、「戸締りをするから盜賊がある。」と云ふに同じく、滑稽至極の痴言である。國家的位地の向上は、資本家にのみ有利にして、無産階級には没交渉なりと判するが如きも、一種の「ヒガミ」根性に捉はれたる謬見である。國家的位地の向上は資本家よりも寧ろ無産者に必要である。日本の勞働者及無産者は、米國の移民排斥に遇ふて入國することが出来ぬが資本家としては平氣に對等の交渉をなしつゝある、併し、此沒道徳なる米國の態度に反省を求むるには、國家的位地より生ずる國際的威力を要する今日の場合に於ては、無産者一同、相約して政府を督勵し、日夜刻苦して國家的威力の増進に努め、平生より萬一の準備を整へねばならぬ。此場合に於て、反て皮相の見に捉はれ、積極的に軍備反對の氣勢を示すが如きは、何といふ錯誤であらうか。

されど世界の思想的趨勢は、誤謬の經路を辿り、「平和の福音」なる好辭に釣られ、國際協約に基く平和の促進に向ひ、所謂猫も、杓子も、異口同音に、贊同の聲を揚げつゝあるが如き状態である。従て、國際聯盟に關し、若干の智識を有せずして、國防軍備の問題を論ずるは、事實上



何となく權威がない。果して然らば、平和を目的とする國際聯盟なるものは、果して如何なるものであらうか。

平和問題と國際聯盟問題とに關しては「新日本への道」第四章及第五章に於て其大要を論じたので同意義の叙述に就ては成るべく再説を避くるのであるが國家本位と世界本位の關係と世界組織を目的とする國際的問題に關しては本書に於ても之を略論しようと思ふ。

國際聯盟若くは之に類似したる世界組織に關し「ド・スーリール」「サンビエール」其他「カント」等世界的大家の説く所、一にして足らず、後人をして、餘りに多端にして架空なるに驚かしむるとは謂へ、而して又、米國大統領「ウイルソン」に依て提議せられたる、如何にも大膽に、而かも芝居懸りなる國際聯盟は、提出國自身により、殆んど自殺の状態に陥れられたるは、國際聯盟其物の價値に關し、如何にも皮肉の感を免れぬのであるが、兎にも角にも、近來平和の欲求に向て進むべき、世界組織の實行に於て（其效果は兎も角）一步を進めたるは、明白なる事實ではある。されど此一步の進出は、果して是か非か、果して祥か不祥かを判別するは、決して容易のことではない。少くとも、國家主義と、世界主義との關係を、よく注意して研究せねばならぬ。

從來の國法學者の國際聯合に左袒するものは、口を揃えて其の決して國家の主權に牴觸せざる

を説明せんとして努力するのは事實であるが、其努力を要するは、他の半面に於て牴觸を證するのではなからふか。何に致せ、公式に國家的行爲の掣肘を意味する發言權を、國家以外の或者に與へんとするの一事に至ては極めて明瞭である。

仲裁々判により、武力を用ゐずして、國際間の紛議を解決することは、國家の主權を拘束するや否やの問題に關しては、自己の發意によるが故に、國家の最高獨立性を異するものにあらずと説明するが如き、根本に觸れざる皮相論や、申譯の如き一面論は無用である。即問題の分る、所は現在の世界が、永久に現在の國家を基礎として存在するや否やの點にあるのである。併しながら、進化の見地より觀察するときは、人類は早晚統一されたる世界に集るべきもので、如此して而して後、更に幸福を増進し得べしとの議論は、首肯すべき價値ありと信するのであるが、此理想を現實化するのには、多大の努力と年月とを要すること勿論であるので、差し當りて必要なる問題を解決するに際し、此理想を加ふるが如きは、思はざるの甚きものである。換言すれば、此理想を現實化する以前に於て、國家觀念の堅實ならざる時代を生ずるが如きことありては、紀律なき烏合の世界となりて、統一の實を擧げ難きこと必然である。十六億の統一なき大衆をして、其所を得せしむるよりも、教養し統理せられたる五十六十の國家を併合統一するの容易にして、正しき順路を進むものたるは明白である。即、鞏固なる國家其儘の簡體を以て統一時代に入るが



正道であらねばならぬ。堅實なる家族を有せざる國家の不堅實なるが如く、雜然たる十六億の民衆は、到底之を纏むるの道なきは明白で、世界の各國は、真正なる統一以前に於て、現今の聯邦組織の如き體制を経べきは、自然の趨勢であらうと思はるゝのである。一部の論者が、遠からざる將來に於て國家觀念は減少し、世界國體の思考が増進すべしと論ずるが如きは、不知不識、閥系學界の先輩に誘拐せられ、現在の國家組織を破壊し、民主的となし、進んで國家以上の統治機關を樹立し、國家の權力を奪はんとする、所謂「シオン」者流の意見と冀望とを代表するものはなからうか。「ウイルソン」の如きは、「民主主義にあらざれば永遠の平和を齎すこと能はず、今回の世界戦争は、帝國主義に對する民主主義の勝利なり。」と放言したのは、猶太系の議論と偶合したのであらうか、抑もまた其目的と思想とを同する爲であらうか。

要するに、彼等の唱ふる世界的統一事業の如きは、遠き將來の想像に過ぎぬのであるが、現在及近き將來に於ては國家の力を弱むる如き如何なる言論と雖ども、決定的に排斥せねばならぬ。若し、今日に於て、政府に類似する一種の世界的機關を設け、之により各國の意思を拘束せんとするの方針を是認し、而かも、此意義の實行せらるゝこと久きに互つたならば、事實上、國家主權より轉じて世界主權に移るが如き思想となるも、亦測られぬのである。然れども、既に前にも述たる如く、現在の國際聯盟成立以前に於ても、世界組織の研究の發表せられたること決して尠

からぬので、即其一是、一國家組織の如く、世界を一統治の下に置かんとするもの、其二是、聯邦組織の國家の如き様式を取らんとするもの、其三是前二説を非認し、將來の世界は、各國家の提携に止るものであるとの説である。「オッペンハイム」の言として傳る所によれば、

聯邦世界は空想である。世界は自然の發達に待たねばならぬ。各國々民が、自ら主人たらんと欲する間は、決して世界國の一部たることを欲しない。従て超國家的中央政治權は空想である。云々

といふことである。併しながら、同氏は又、「物事には程度があるので、聯盟仲裁々判に依頼する義務は、必ずしも國家の獨立を侵害するものではない。若し假りに、國家の獨立を害するものとしても、人道の爲めには是非もない。」と論じつゝ、暗々裡に、半ばは獨立の侵害を是認して居るのであるが、氏の如きは、國家論に於て、未だ徹悟せざる所あり、所謂彼等の今日の國家なるものを基準として居るので、理想的國家を有する我等日本人として之を見れば、一種の戯論に過ぎぬのである。況んや、事實上、議論は兎もあれ、是が爲め國家の威嚴に幾分の減退を看ること明かなるをや。若し自然の結果として、更に進で國家の統治機關を経ずして、或る情願を仲裁々判に訴へ得る如き捷徑をも開かるゝに至つたならば、國家の威嚴の、更に減退するは無論である。加之聯盟の事務を管理する中央機關及國際裁判所の構成は、到底公平を支持するに由なく、



苟も辭柄の執るべきあれば、終局に於ては強國の利に終るのは勿論、戦争によらずして利益を得せんが爲め、強者に利用せられて至らざるなきに至るは、事實上免れ難き所であらう。果して然らば、今日に於て、國際的常置組織を置くが如きは、所謂御多分に漏れざる御附合として、時に媚るに過ぎずと外、考へられぬのである。されど、世界的統治組織の得失は、將來の問題として重視すべき價值あり、尙ほ軍備と世界組織との間には、頗る密接なる關係を有するが故に、此點のみより之を察するも、之を考究すること極めて重要である。

#### 第四章 軍備制限の概観

今試に、世界的問題として、國際聯盟及之に類する諸問題に關し、世界各國の觀る所を概論すれば、英國としては諸國民聯盟の團隊を組織し、戦争豫防策として、國際會議、國際裁判、世界強制方法の實施を望むので、別に注目すべき嶄新の理想あるのではないやうである。世界的強制方法としても、唯單に、共同して必要な行動を執るといふに過ぎぬので、國際聯盟國の一國が、或る國家より攻撃を受たる場合には、他の國際聯盟各國が、外交上に、經濟上に、或は軍事上に援助を與ふる位のことである。又平和強制裁判としても、國際聯盟の一國が、國際裁判若くは仲裁會議に附せずして、戦争行動を開始したる場合には、聯盟國は、共同して經濟的及武力的に其國を攻撃しやうといふ位の程度である。又戦争豫防案としては、仲裁平和會議を設け、聯盟國間に、軍備制限若くは戦争防止に必要な提議をなさしむるので、戦争行爲開始の前提として相當の期間を公定し、其以内に於て開戦するを禁じてあるのである。(此約束の如きは、強國を益するのみ、弱國の爲めに大不利なるは明白である。)而かも、若し一國が、紛争事件を仲裁々判所にも、仲裁會議にも提出せず、或は公定期間内に於て、戦争行爲を始めたる場合に於ては、他の聯盟國相共同して、經濟上、軍事上の強制を加ふることを約束するのであるが、是は一種の好辭令



に過ぎず、事實上一種の夢想と外考へられぬのである。又國際裁判判決の強制法としては、先第一に、某國が違反行爲をなしたる場合に賠償を命ずることの權能を附與することとし、もしこれに服従せざるときは、全聯盟國或は一部聯盟國は、違反國との國交を斷絶し、其船舶を扼留し、其入港を禁止し、輸出入の關係を絶ち、違反國の國家、國民及會社等に資本の貸與を停止し、違反國會社の公債、社債、株券、手形等の取引及之が發行を禁止し、違反國の臣民、會社及政府に對する負債をも支拂ふことを止め、通信及旅客交通の禁止を行ひ、違反國に對する既約の輸出品に對しては特別の輸出税を課し、聯盟國は、更に進て違反國の港灣或は海岸を封鎖する爲軍艦を分派し、もし違反國にして海戰を宣し、敵對の行爲を開始し、領土を侵害し、船舶を攻撃する等の行爲を始めたならば、他の聯盟國は共同し、海陸の力を合せて之に當る等、凡そ法律家が根據り、穴掘り、遺漏なきを期するが如き條項を聯ねて居るのであるが、一個の學說としては兎も角、事實に於ては、到底實行不可能に終るべきことが多いのである。而して又、獨逸の提案なるものを見るに、先第一に、國際聯盟は、武力によらずして國際の紛争を解決するを目的とし、これが爲めには、各聯盟國は互に其領土を保障し、内政不干渉主義をとるといふのであるが、此主意によれば、今日の大國は、永久に大國の威力を振ひ、小國は、永久に小國の寂寥を感じねばならぬ。是實に、野蠻時代の階級制度を、國家と國家の間に試んとするに同じく、第一時代錯誤の甚

きものである。從て、之を實行する結果として、民族的進歩と盛衰とを度外視したる麻痺状態に、此世界を陥れ、歴史上の一時期に過ぎざる今日の状態を、永遠に持續せんとするが如き横暴は、疑もなく強者の暴言である。而かも之を許さざる以上は、如何にするも平和は保たれぬので此點は國際聯盟乃至軍備節減を一貫する前提的錯誤である。而して尙、獨人の主張する所によれば、國際聯盟の特別の目的としては、國際紛争の豫防、軍備の撤廢、交通の自由、經濟的平等の確保、小民族の保護、國際勞働法の成立、殖民地問題の整理、國際的機關の統一、世界議會の創設等であるが、一見、如何にも、結構なるが如くにして、而かも其間に夢想にあらざれば陰謀、陰謀にあらざれば街魅的なる辭令を含むので、此點に於ては、獨逸國の立按も、他の提案も、結局同様である。其他獨人の主張する所は、詳細に涉つて居るのであるが、軍備制限問題に關しては、左の如き主張に立て居るのである。

- 一、陸軍及空軍は、其國の安全を保つ程度迄縮少するを要すること。
- 二、海軍は、其沿岸を守る限度まで縮少するを要すること。
- 三、軍事費及軍隊の數、軍器及軍艦に關する説明は、毎年聯盟事務局に提出し、事務局は之を公表すること。
- 四、軍備制限の實行に關する特別の協定をなすこと。



右の主張の如きは、要するに、殆んど実行の不可能なるを自證するもので、獨逸國に對しては、殊更に其然るを認めねばならぬ。乃ち此意義より見るも、決して、眞率なる態度の發露として、之を看る譯には行かぬのである。併し右の議論の如きは、此世界が、慈悲謝恩の文明に徹底したる後に於て、初めて実行の曙光を認むべき、金玉の論なるを失はぬのは明瞭である。

少しく唐突の嫌はあるが、今此所に少く説明を加ふの要ありと信ずるのは、軍備縮少若くは制限論の歴史的考察である。現在一般に、軍備縮少とか軍備制限とか或は又軍備撤廢とか稱するものは、大體無用意に混同して利用せられつゝあるのであるが、要するに、皆是世間に於ける不眞率なる流用に原因するものと外考へられぬのである。此の如きは、一時世界を風靡しつゝ、「デモクラシー」が濫用せられたると殆んど同一義なりと稱すべきであらうが、兎にも角にも第一に用ゐられたのは軍備撤廢の語である。此撤廢の意味も、事實上曖昧を極め、軍備を國家の安全を支持するだけの最低限度に達する迄、撤廢を行ふべき意味に用ゐられたので、「無腰」になれといふのではないのである。而かも、此軍備撤廢の實行道程として、現在の規模を超過せざるの意味に於て制限の語を用ひ、現在の軍備を縮少する意味に縮少の語を用ひたのであるが或は之を區別し、或は之を混用し、殆んど無條件に放置されて居るので、此一事より察するも、軍備と平和との關係の、如何に不眞率に考究せられつゝあるやを察することが出来る。されど其眞意は兎も

角、其聲言する所に依て判斷するときは、右に述べたる意見の根本的主張は、悉く皆成るべくは戦争の機會を減少せんとするに外ならぬので、其手段としては、或は築城の制限又は其破壊を希望し、戦闘行為を困難若くは不可能ならしむる爲、特定の地域を中立とし、又は武装を撤廢せしむる等の手段を講ぜんとするのであるが、各國とも強力に強いらるゝ時の外、自己に不利なる條件に従はぬので、事實に於ては、唯單に優勝國が劣敗國に對し、再び敵對すること能はざらしめんが爲めの強壓に對し、已を得ずして之に従ふの外、事實上殆んど何等の結果をも見ること能はずして終るであらう。

築城及局地防禦の制限としては、三十年戦争の後（千六百四十八年）、「ウエストリア」條約の結果による（舊築城を破壊し、新築城を禁止す）もの、及其後間もなく起つた佛西戦争（千六百五十九年）の結果は、「ナンシイ」築城の破壊となり、「ユトレヒト」條約の結果、佛國は「ニユーファウンドランド」、「ノヴァスコシヤ」、「セントキッツ」島及「バドソン」灣の領地等を失ひ、「ダンキルク」城の破壊となり、其結果として、佛國は北米殖民地と海峡の要扼たる根據地を失ひ、海上發展の意味に於て大なる損害を受け、終に英國に凌駕さるゝに至つたのであるが、要するに、之が爲め、事實上遺憾ながら、戦争の豫防とはならなかつたのである。其他近世に至りては英西條約（千七百十五年）に依る「リエージュ」築城の破壊、巴里條約（千七百六十三年）



の結果として軍事上の設備をなさざるの保證を有する佛領「サンビエール」島の英國に對する讓與外數件があつたが、是等の事に關しては、先づ是れ位にして記述を止めやうと思ふ。但し局地的地域及水面の中立に關しても、相當の前例があるのであるが、要するに強國の弱國に對して行ふ強制的行爲に屬するもの多く、中立化されたる地域に對し、一強國が永久的築城をなしたる近き前例さへもあるので、米國の「パナマ」築城の如きは即其一例である。而かも中立地帯として一地方を見るの必要ある場合に、獨立國が餘儀なく其所有の城塞を破壊せられたる如き反對のこともあるので、此例としては白耳義を數ふことが出来るのである。又新興獨立國に對する制限としては、世界戦争の結果として現はれたる「チエツコスロヴァキヤ」國は「ダニユーブ」河の左岸に軍事設備をなさざることを條件とされたといふことである。而して又、海洋を連絡する海峡及運河の中立化問題の如きも、要するに、強國の專横を證するに過ぎぬので、戰敗國獨逸は、軍事上の目的として自國の國境内に開鑿したる「キール」運河すらも、獨逸と平和状態にある國籍を有する商船及軍艦の自由航行を強行せられたるに關せず、「ジブラルター」海峡の如きは、其對岸「モロッコ」地方の築城を嚴禁しつゝも、「ジブラルター」には世界有數の大要塞があるのである。「パナマ」運河の如きも立派なる中立地帯たるに關せず、「運河の取締」の名に於て、米國の築城を見るに至つたのである。

凡そ右の如き事實は、世界的問題としては、所謂道義なるもの、無力なるを證すると同時に、明かに強大國の横暴を示すもので、苟も辭柄の執るべきものあれば、如何なることをもなし得て餘りあるを證するものにして、其理由としては、夫々對手を納得せしめたる結果なるにもせよ、決して公平なる處置なりとして首肯することが出来ぬのである。華府會議の結果に就て之を察するも、彼際、我南洋諸島は從來武裝せざる如く約定せられたのであるが、此間にも大なる矛盾あるを遺れてはならぬ。即太平洋に於ける日本國固有の領土に於ける防備を禁止するに對し、國際聯盟會議の主張者たる米國すらも、布哇は米國の一部なりとの詭辯の下に、無制限の防備を施し得るの權利を保留したるが如き、凡そ國際間の交渉は、未來は知らず、今日に於ては、如何に巧妙に立論せられたる場合と雖、決して眞意より單純なる道德的立脚地に住せんとするものにあらざるを明識し得るのである。從て、國際的武力たる海軍の縮少若くは制限に關しては、其利害の關係極めて大なるに留意し、詭辯的結論に逢着すること、更に著きものあつて存するを遺れてはならぬ。果して然らば、醜怪の極とも稱すべき現在の世界状態にして、果して右の如き分際を出でざるものとせば、今日に於て永久の平和を口にするが如きは、寧ろ其分を知らざるの滑稽事とも謂ふべきであらう。

海軍の軍備問題は、事實上、決して世界戦争を待て創意せられたるものにあらずとは謂へ、一



局地に對する特別なる規約として」は暫く措き、世界の強國が、一般的の意味合に於て、軍備の節減を約したのは、世界大戦争後の國際聯盟會議と、華府會議とを以て、事實上の嚆矢としても差支なからうと思ふ。但し、局地的軍備制限としては、嘗て英米間に締結せられたる、「グレイト・レーキ」の海軍縮少もあり。露土戦争後に於て、英佛澳の三國が露國の弱味に附け込み、露國の黒海に於ける優越なる地位を覆へす目的を以て、黒海に於ける海軍制限の議を起し、露國をして已むを得ずして土耳其と共に之に従はしめたこともあるのであるが、要するに、古來雄國の提唱に係る一般的軍備縮少の問題は、一見如何にも人道的行爲の如き態度を以て提唱せらるゝのであるが、其實皮相なる時代觀を利用し、一種の利己的慾望の伏在裡に、方便的に構成せられたる、一種の權策に過ぎぬものが多いので、其實公正なる道義によりて支配せられざるのみならず、決して合理的なりとも稱し難き結論に終り、古來其儘の状態を示しつゝ、繁冗なる世界の歴史に、更に繁冗なる頁數を加へたるに過ぎぬのである。今試に、軍備制限の問題は、如何なる必要より起るやと借問し來らば、萬口一致、必ずや平和の爲めといふであらう。而してまた、一國の軍備は、何の必要あつて生ずるやの質疑に對しては、國家の安全を望むが爲なりと答ふるであらう。平和を願はず、國家の存在を望まずといはゞ、軍備は最早存在を認むるの必要がないのであるが、既に軍備にして存在するのみならず、軍備撤廢の文字は、國家の保安に必要なる以上の

軍備を撤廢するの意にして、國家の保安を捨て、も、軍備の撤廢を主張するにあらずと稱するが如き状態に於ては、軍備撤廢の四字は、防守自衛の目的の絶對に放棄すべからざるを反證するものとも思考し得らるゝので、畢竟國家の安定は、必要不必要の議論を超越したる、必要價値を有することを明證して餘りあるのである。乃ち此意味に於ては、軍備撤廢論と雖も、一毫も變ずる能はず、一指をも染むること能はざるは、國家の安定を保證すべき國防其物である。従て、經濟問題も、道德問題も、亡國の二字に對しては何等の權威をも有せぬのである。然るに、米國の提議に係る軍備縮少問題の討議中、故らに、此第一の必要條件たる、「國家の安定」に關する論争を避け、強壓的なる態度を以て、軍備の縮少と制限とを企て、五、五、三の比率を以て第三國たる日本國を強要したるの形跡あり、其結果として五海軍國間に於ける主力艦比率の決定となり、終に左の如き事實を生じ、結局に於て米國一國のみの海軍擴張となつたのであるとさへ信ぜらるゝのである。

- 一、日英米三國間には、國家安定を論據とするを避けたる爲め、國防問題の根本的解決をなすこと能はずして終りたること。
- 二、主力艦比率限定の結果、軍費を要すること少くして、自己の國際的主張を貫徹し易からしむるの事實を、大比率國に與へたること。



三、從來海軍國として何等の威望なかりし米國海軍は、近年の異數なる擴張に伴ひ、英海軍に次ぐ第二位の實力を有する新興海軍國となりしが、世界戦争と華府會議との結果、更に其位地を進め、英國と同一の比率に上りたるは、とりもなほさず、同會議に於て海軍の大擴張をなしたると同一の結果となり、全然軍備縮少の精神を裏切りたる形勢となりたること。

四、五大海軍國比率の限定は、假定期限を附したる協約なるにもせよ、事實上佛伊兩國をして、英米兩國に對し、海上に於て何等の強固なる主張をもなし得ざる境遇とならしめたること。

五、五大海軍國比率の限定は、日本國をして防守自衛に必要な程度以内の比率にあらしめ、萬一の場合に於て、物質的に不利なる對勢に於て、英（米）國の強壓に對するの苦境に入らざるを得ざらしめたること。

六、軍備制限の問題に於て、現存艦船の取捨に公平を缺き、英國に在ては、千九百十二年竣成の新艦をも之を棄却したるに對し、米國は同十年のものも之を加算し、（計畫及製造中のものを棄てたること、比較的に多かりしにもせよ。）日本國としては、千九百三十年に於て、艦齡二十年に達すべき、千九百十一年以後竣成のものを加へたる原案を、米國より提出したる結果、強壓的に五、五、三の比率を決定するに至りたるものにして、軍備制限と縮少との二者を混淆して其中間を行き、而かも兩者の意義を湊合活用し、事實上米國海軍の擴張を見るに至りたるものにして、要するに公平らしき主張を不公平に實顯せしめる結果となりたること。

七、軍備標準の大なれば大なる程、國民の負擔の大にして、戦時の慘害も亦大なるを示すものなりと雖、唯單に平和維持の點より察すれば、軍備の程度大なれば大なるに従ひ、平和維持の效も亦從て増加すべし。何となれば小規模の軍隊を動かすの容易なるに比し、大規模の作戦に要する軍費及國民の拂ふべき犠牲大なるを以て、よく必要に迫りたる場合の外、國交の斷絶を避くるが故なり。然るに、華府會議の影響を受けたる世人は、軍備の縮小を以て平和を將來するの手續なりとの錯覺を起し、反て後來の戦争を容易ならしむるの傾なきにあらざること。

海軍勢力の比率を限定するに當り、國家の安定を重要問題として取扱ふを避けたりと傳ふること、果して信なりとせば、華府會議の結果の、國防上何等の威嚴なく、其終局に於て弱者の屈服に依頼するの外、何等世界的平和に貢獻する所なきは無論である。されど、兵力の優劣と勝敗との關係を明かにし、少くとも華府會議の比率協定の、果して適當なりや、或は又、強者の横暴を實證するの外なきや否や、而して更に此の限定の如何なる程度迄、國家の運命を左右するやを判定するは、國防軍備の研究上、最必要なる問題であらねばならぬとは、吾輩の信じて疑はざる所



である。

吾輩の研究したる結果によれば、戦の勝敗は必ずしも兵力の優劣に因らずして、其時代に於ける、國民的志氣の張弛と、戦の勝敗に關する觀念的惰力とによること、殆んど明白である。歴史の示す所に依れば、英蘭戦争の初期に於ては、主として物質的の優劣によりてのみ、戦の勝敗が決定せられたのであるが、蘭將「デ、ロイテル」は此惰力を打ち破り、劣を以て優に勝つの端を開いたのである。其後の趨勢に至ては、混沌として捕捉し雖く、常に一勝一敗の間に徘徊しつつも、尙劣者の勝つこと比較的に多き傾向を示したのであるが、其後決戦に對する勇斷的氣分自ら衰へ、上下將卒を通して士氣の沈退著しきものあり、自ら遠戦を愛するの風潮を成し、戦術上の利害關係と、彼我布陣の得失をのみ念とするの弊風を生じ、冒險的の動作を斥けて、理詰めの行動をのみ稱用するに至つたので、十八世紀の中葉に於ては、殆んど一も決戦的戦闘を見ず、從て其結果の顯著なるもの至て少なき状態となつたのであるが、佛將「スフラン」以來は、海戦の性質に大なる變化を起して激烈となり、英將「ホーク」、「ジャーウイス」、及「ネルソン」等の勇將踵を接して現はるゝに及び、十八世紀終末の頃より、英艦隊に連勝の惰力を與へ、劣勢を以て大勝を博するもの相繼ぐに至つたのである。今試に、右期間、即十七世紀の中葉より以後の實例につき、海戦の勝敗と、艦隊の勢力比とに關する問題を調査するときは、半數にも充たざる劣勢

を以て戦ひたる前例五回を算するも、其僅に小勝を得たるもの一回あるのみ、而かも三分一に達せざる如き場合に於ては、常に敗戦の憂目に逢ふたのであるが。半數内外に於ける敵我の關係に於ては、少く其面目を改め、一勝一敗の間にあるを見るべく、其五割五分以上七割の間に於ける前例は、豫想外に少く、僅に四回を算するに過ぎぬのであるが、其成績は比較的に宜しく、劣者の大敗に陥りたるもの一回あるのみ、其他の三回は勝利となり、其二回は大勝利を以て終つたのである。而して海戦に關する先例中、其回数著く多きは、七割以上八割の間で、其數二十三回に及ぶのであるが、其成績としては、勝敗の不明なるもの十一回を算し、四回の敗戦（内二回大敗）と、八回の戦利（内三回大勝）を見たのである。八割以上に至ては、勝敗と物質的優劣との關係極めて微少にして、其二十一例中、勝敗不明のもの十一回あり、敗四勝五の比を爲し、大勝大敗各一回を算するのみである。

右の戦例を其儘に觀察すれば、五十五回の海戦中、劣勢艦隊の勝利の十八回に對し、優勢艦隊の勝ちたるもの十四回を算するに過ぎず、其他の二十三回に至ては、主として十八世紀の中葉に當れる遠戦時代に懸り、其勝敗明瞭ならず、其成績の看るに足るべきものなきを證するのである。何は兎もあれ、史上の統計は必ずしも精確なりとは斷言し難きも、暫く恕して之に従ふときは、戦の勝敗は物質的勢力の小差に關係なく、寧ろ劣者の勝利を見ること多きと同時に、三分の



一内外の勢力は勿論、半数未滿にては、殆んど勝算なきを覺らざるを得ぬのである。敢て必ずしも、此史例に照して、華府會議の比率を批評せんとするにはあらざるも、我日本國海軍が、英米に對し少くとも七割以上を占むるの必要あるを證するのである。而かも之と同時に、五對三を以てしても、必ずしも勝算なしとして落膽するには及ばず、我海軍の常勝したる歴史的惰力を背景とし、拮据勉勵して内力の充實を圖りたらんには、決して立派なる勝利を得べき望なきにあらざること勿論である。されど、佛伊兩國に至りては、其勝算の絶無なる歴史的所證に合するを憶へば、米國の提案及決定比率（五對一、七）の他國の國安を無視するの甚きに驚かざるを得ぬのである。而かも皆是、假令一時的なるにもせよ、其海軍を國安維持の必要程度に保持するを怠りたるの結果にして、吳々も戒愼すべき所である。特に佛國海軍の如きは、僅か二十餘年前迄は、世界的に第二位を占め、一時は大海軍として世界に雄飛したる時代をも有するので、今昔の感特に深きを覺ゆるのである。

由來、國際的協商の、遺憾ながら正義に立たずして利害に従ふは、史上に明かなる所で、此の如き不純なる意思の發動裡に、世界の平和と幸福とを求めんとするが如きは、果して如何のものであらうか。従て、此點に對する世界的觀念に關しては、常に深密なる注意を拂はねばならぬ。之を要するに、歴史的事實の觀察上、勝敗は必ずしも物質的武力の大小によらずして、寧ろ劣勢

艦隊の勝利に歸したる實例の反て多きを見るは、既に述べたる如く、其理由とする所は、劣を以て優に對して辭せざるもの、志氣と抱負の、反て優者よりも盛なりし事實を語るもので、戰の勝敗の時代觀念に制せらるゝこと多きを思はねばならぬ。例へば、英佛海戰史の示す所によれば、兩國艦隊の勝敗は、明かに物質的優劣によらずして英艦隊の勝利に歸したので、當時佛艦隊の英艦隊を見るや、未だ戰はずして既に敗戦に對する鬼胎を抱いたのである。是に反し、英艦隊將士の敵を發見するや、必勝の抱負と期待とを以て之を迎へたのである。要するに、今日も負けはせぬか」の鬼胎と、「今日も大勝利か」との觀念の士氣に及ぼす影響極めて大にして、明かに勝敗を決するの第一因となるは疑もなきことである。佛將「ウエルニューヴ」の書簡の一節に、

今回は、幸にも不運に出逢はざりしも、若し予をして英艦隊に會せしめたらんには、其勢力の優劣に關せず必ずや遁避するの道なくして撃破せられしならん。

とあるが如き、而して又英將「ジャーヴィス」が、敵をして五十艘を有せしむるも、予は必ず之を突貫すべし。

と揚言しつゝ、僅か二十七艦を以て、大優勢なる佛西聯合艦隊を撃破したる史例は、明かに同時代に於ける常勝軍の榮冠を英海軍に與へ、常敗の汚名を佛海軍に與へざるを得ざりしを證するものであらうが、兎にも角にも、劣勢を以て敵に對するには、相當の自信と覺悟とを要するので、



物質的優劣の影響以上に、人力的優劣の影響を現はすべき意氣込の旺盛なりし爲、寧ろ劣者の勝利の反て多きを致したのであらうと信ずる。要するに、大體の觀察上、敢行的にして、「敵を見れば必ず戦ふ。」の主義を取つた英海軍の常勝し、待機的にして、「必勝を期せざれば戦はず。」の主義をとりたる佛艦隊の常敗したる、而してまた、冒險的の性質に富みたる米艦隊の勝ち、「已を得ざるにあらざれば戦ふ勿れ」主義の西艦隊の常に英米に破られたるは、(理論は兎も角)實際上、大に考慮すべき所である。されど國防計畫の見地より之を見れば、人的影響を加味して物的要求を減ずるは、決して正しき道ではない。人的影響は、勝利の確實性を望むの範圍内に於てのみ之を考ふべきものにして、決して國防計畫の算數内に加味すべきものではない。されどもし、已を得ず、之を加味するの必要あり、實戦に於ける勝利の確實性を失ふにもせよ、兎にも角にも、勝利の見込なきにあらずと云ふが如き程度に、満足せざるを得ざる一時的環境に在りとするれば、其最低標準を定むるに際し、右に述べたる歴史上の訓戒に留意するの要あるは、已を得ざるの結果なりと謂はねばならぬ。世の所謂平和論者と雖、國安の維持上必要なる軍備をも非認するが如きこと、決してこれなきは勿論、最低標準の軍備を論ずるに際し、戦の勝敗に関する史訓を加味し、之が削減を當然なりとし、其削減したる程度に於て、之が充實を圖るをすら難説するが如きこと、決してこれなきを信ずるのである。そこで吾輩は軍備に関する議論は暫く之を已め、猶太

人問題に關し、可成簡單に吾輩の必要と認むる件に就き、讀者諸君の一覽を請はんと欲するのである。兎にも角にも世界の平和と人類の康福とを期するは、吾輩等の必要條件で、此問題に關する猶太人の位置は、決して等閑に附してはならぬのである。



## 第五章 猶太人世界統治の根本思想

猶太人問題は、日本史上に於て、近年始めて考査せらるゝ所であるが、猶太民族からは有名な世界的大偉人と、大學者を多數に出したので、彼等の自負する如く、如何にも神の選民と稱する丈の價値は、ないでもなからうと思はるのであるが、如何せん、國家なき民族の憫れさは世界の至る所に壓迫を受くるので發狂者、犯罪者、比較的によく、別して貧民の多きは、争はれぬ事であるといふことで、これは決して猶太人の素質の劣等なるにはあらずして、國家なき民族の、自然の趨勢として然らしむる所で、如何にも同情すべきことを信ずるのである。由來一視同仁なるべき筈なる神の下に、亡國の民あるが如きは、考も及ばぬことであるので、而かも尙、國家の存在の如何に大切なるかを知らざるが如きは、國家なき特種民族の爲にする所ありて宣傳する邪説に迷はされたるにあらずば、極めて迂愚なるものと稱するの外なく、世間には猶太人の世界征服の野心を、神の攝理に基づく豫定行爲なるが如くに誇稱するものもないが、是實に事體の眞狀を誤認するもので、一視同仁の神として人道の誤りを敢行する猶太民族を特に寵遇すると信ずるが如きは、斷然あり得ざる迷想なりと謂はねばならぬ。

假令、猶太人に關する特別の智識もなく、また其の世界的活動の實狀にも通ぜざる人々でも講和會議と軍備縮少問題に對する猶太人の活動と、其結果とを認識したる以上は、一人と雖も、猶太人の勢力を感じざるなく、また其事實に於て、之を機會として二千六百年の宿望たる、「パレステナ」に猶太國を建設し、併せて國際聯盟を成立して、世界全體の武力的影響を低めて對猶力を弱め、且其幹部を占領し、東西諸國に於ける猶太人の特別待遇を全廢せしめ、同民族に對等の地位を得せしめ、戰爭以前より占有したる全世界の金權を其儘に掌握裡に收めたのは、非常に意味深きこと、謂はねばならぬ。しかもこの一事は、猶太人をして自ら省みて其操行を慎み、神の選民たるに耻ぢざるの事實を顯はし、利害觀念を捨てた道義に立つべき楔機とならねばならぬの事實は全然これに反し、何等の自省する所なくして終り、利害關係の觀念は彌々深刻となつたのである。而かも、此重大なる意義を存する講和會議に參列したる委員の大部分は、「アングロサクソン」民族で、其背後に於ける實力は猶太人なりとの感想を深からしめたのは、事實であるので、今後世界を支配するものは、英米人たる猶太民族なりとの暗示を與へたるは、無理もないことである。

そこで、今日に必要な次の問題は、世界に分在する猶太人を、如何に取扱ふべきかの點にあるのであるが、經濟上の問題に關しては、吾輩は全然門外漢であるが、聞く所によれば、猶太人の經濟的成功を何等の陰影なく露骨に代表し得るのは米國で、米國は猶太人の盡力の下に始めて



世界に紹介せられたる新世界國であるに止らず、米國には始めより世界の通習たる猶太人排斥の聲がなかつたのである。そこで猶太人は、米國で成功し、繁殖し、僅か五ヶ年にして、二萬人より三百五十萬人以上に増加したいといふことで、一所に結集したる猶太人としては、今の紐育が世界第一といふことで、其數も百八十萬に達し、「ニューヨーク」と言はずして、「ジュイヨーク」と稱する戲稱すらも出来て居るといふことである。

米國に於て猶太人の勢力範圍内に屬する、産業の種類は頗る多く、活動寫眞業、砂糖業、煙草業及獸肉罐詰業の半數以上を初め、靴業の六割、出来合服裁縫販賣業、樂器類販賣、寶石類商、穀物の賣買、棉花販賣業、雜誌原稿、新聞通信、其他金融業者は勿論、主として猶太人の勢力範圍に置かれて居るので、殆んど總ての經濟的活動は、猶太人によつて占領せられざるなき境遇にあるので、唯獨り農業のみは、多くは失敗の歴史を累ねて居るといふことであるが、要するに、猶太人は體力の勞働を避け、是と同時に投機の氣分が旺盛であるので、それが結果として、農業は不成功に終るといふことであるが、兎にも角にも、猶太人には立派な農學者、農業者がなく、投機慾が盛であるので、農業的に成功せぬが、尤もな道理と謂うことである。しかもこれが結果として、立派な軍人も出来ないのも當然のことで、學者としても學問の種類により此傾きを有するやも知れぬのである。

政治上に於ては、猶太人は、成功したる筈であるが、其境遇上の結果として、何といふても無經驗たるを免れなかつたので、彼の自由主義が盛に行はれた英國ですら、九十年前迄は、猶太民族は公然と議會に列することを許されぬのであつたが、其猶太人其人が、「ビスマーク」を失脚させ、「カイゼル」を廢帝たらしめ、露西亞皇帝にかの如き運命を與へたのは、注意に値することである。而かも、米國に於ては、猶太民族が完全に大統領選舉を左右した事實は、世人の多く知る所である。歐洲戰爭爆發の三、四年前の頃、露國から米國に移住した猶太人は、可驚多數に上つたのであるが、其移住した猶太人は、合法的の最短期間に米國に歸化し、其公民資格を得るや否や、露國に歸り、米國人として大威張に、露國經濟界を攪き廻したので、露國も是には閉口したとさへ、傳へられて居るのであるが、此一事を以ても猶太人の如何に狡慧なるやを察することが出来るのである。

兎にも角にも、猶太人は猶太人としては成功したので、世界の金權は、歐洲大戰の爲に、名實共に猶太人の掌裡に歸したるのみならず、本國の復興に關する念願も、主として英國の同情裡に成功の曙光を認め、二千六百年の苦戦は、茲に酬ひられ、東歐諸國にあつて、差別的待遇に泣かされた同民族は、完全に解放され、超國際的なる國際聯盟は成立し、露西亞帝國を亡した蘇聯は其志の如く成功したので、此上の目的としては世界統一の事業を全くし、猶太民族をして、世界



に君臨せしむるにあるであらうとは、一般に認識せらるゝところで、猶太人問題に興味を有する某學者の言によれば、

久しく裏面の勢力として、手先の役者を、舞臺に躍らせて居た猶太人は、歐洲大戰と共に、自ら表面に乗り出して放れ業を演ずるに至つた。交戦國の首相の取り巻きが、猶太人であつた事、講和會議の顧問の大部分が猶太人であつたこと、「ヴェルサイユ」條約の主要項目が猶太人の利益に關するのであつたことは、知れ渡つた事實であるが、戦後に於ける、世界共通の事實は孰れかといへば、猶太人に對する各國政府の非常なる警戒は、固より守勢的であり、無音的であるが、病「ヨッフエ」の寢床の前に恥を忍んで喰された一杯の外、一物をも得ざりし政治家の國は、固より例外に屬するが、歐米諸國の政府は、何れも猶太的戰術の苦味に經驗があるのである。飾つて言へば、和戰兩様、露骨に言へば、轉んでも只は起さず、此双股主義は、猶太的戰術の本領である。猶太的戰術は、先づ第一に傲語して、威勢を見せる敵手を戰慄させて、我意のままに振舞ふのだ。此傲語的攻勢が失敗に終つた時の二の手は悲鳴である。「排猶太主義の再發の悲鳴」であり、「弱者虐め少數者壓迫」の泣き聲を立て、第三者の心胸に訴ゐるのが慣用手段だといふことである。要するに猶太戰術の奥義は、復讐である。猶太人は復讐を忘れない。恩義を忘るゝことは平氣でも、怨みは決して忘れない。

右の言は、注意するの價値あると思ふ。露人「ニイチエ」の言に、

歐洲人が、猶太人を追放し盡すでなかつたならば、猶太人は歐羅巴を征服するであらう。と諷したのは誠に尤もなことである。そこで、世界に於ける猶太民族の勢力に關して、更に之を論究すれば、往々にして重複する問題もあらうが、先第一に介意すべき重點は、聖書に基づく豫言に關することであるが、つまり聖書の豫言の如く、猶太人が今後どういふ具合に發展するか、其發展に對し、若しも是が事實であるならば、我等日本民族は如何なる措置を取て之に對すべきかを考究するのが、最も大切な問題であらう。

世界は誠に廣い様にも考へらるゝ。併し國が亡んでから、二千六百年も屈せないで、諸所方々流浪して參つた猶太人から見れば、元來世界といふものは、自分達の爲めに造られたもので、廣いからといふて、何も驚くことはないといふ精神を持つのも、尤もなことである。所謂島國根性とは違ふともいはれるのである。そこで猶太人は、世界の各方面にあつて、巧に宣傳をやるので、世界全體に千五百萬人しか居らぬと言ふことであるが其自然の結果として、猶太人の爲に宣傳の勞に服するものは、殆んど無數ともいはれて居るのである。殊に猶太人は、世界各國の最高級から、最下級に至るまでの人々に、自分の思ふことをなさしめて居るので、歐米諸國の主權者を始めとして、苦力に至る迄、一々其主張の如くに、行はせて居るのであると言ふことである。前にもい



ふた如く、元來猶太人は、其所在も明白ならず、二千六百年も以前に、自分の祖國を失ふた亡國の民である。然るに豈圖らん哉、歐洲の多くの國は、既に其掌中に歸し、他の諸國も、殆んど風前の燈火ともいふべき状態となり、米國に於ても、其政策が猶太人の心のまゝに動くやうになり、露國も亡び、支那も亦終には滅されて仕舞ふ様な危険な状態に陥り、彼等の毒手は、今正に我日本に迄及ぼさんとするの状態となつたのであるとさへ言はれて居るのである。

元來、猶太人は國もなく、何處に參つても無籍者に相違ないのに、神の選民などと自稱して居るではないか。加之他の民族を賤稱して、「ゴイ」（即ち豚）と曰ふのである。彼等は自分の國語をも忘れながら、其民族性を頑強に守り、自分は賤民とし、奴隸として虐使を受けながら、其民族性は微塵も侵さるゝことなく、最も強く、一種の色彩を發揮し、亡國二千六百年の悲むべき歴史を持ちながら、其聖書と稱する舊約全書にある如く、「猶太人は遂に世界を支配すべし。」との、所謂神の豫言なるものを確信し、これを固持して居るといふことである。今日世界の各國民は、其の歳旦の祝賀には、酒に酔ひ、享樂に耽つて居る其最中に、猶太人は神詣を怠らず、神前にぬかづき、涙を絞り、

神よ、國を滅した我等の祖先を許し給へ。

といふて哀訴して居るといふことで、而かも、此場合の彼等の眞面目は、實に感服の外ないといふことである。世間の人は、猶太人といへば高利貸の如く、不人情で残酷なりと思ふが、それは必ずしもそうではない。彼等は、我等は神の選民なりと自稱するの自覺に醒め、子孫の内に必ずや世界を統一せねばならぬといふ立派な信仰を持って居るのである。言を換て是を言へば、彼等は此世界に理想的の君主國を造らんが爲には、現在の王國や帝國は、悉くこれを壊さなければならぬと信するのである。猶太人以外のもの、腦裏から、忠君愛國の精神を奪ひ取らねばならぬ。而かも一度は、方便として是を民主化せねばならぬ。「リンカーン」が民本の正道を擬變して、民主主義を主張したのも、これが爲ではなからうか。

兎にも角にも、猶太民族の素願は、猶太思想に精通したる人士の言によれば、忠君愛國の思想は之れを、非猶太民族より奪ひ、「デモクラシー」思想に代らしめ、全世界の君主國を滅ぼし、猶太王國を建て、これに代はらんとするにあり、今は着々と、其目的に進みつゝあるのである、其證據として、佛蘭西革命は實施せられ、露國帝政は壊滅せられ、支那帝國と、獨逸帝國と、土耳其帝國は世界より影を沒したのである。

世界の狀勢が、實に右の如くなる以上は、猶太人が如何なる苦を忍んでも、世界統一の目的を果さんとするは必ずしも一條の笑話とは謂へない。事實上、既に數十萬の犠牲を出しても屈せぬので、眞に命懸けにして居るのである。此猶太人の決心の結果、或は英、佛、獨、伊、土、米



の如く、世界の大国に手を廻して、とうとう世界の大战を惹起せしめたので、世界戦争は、つまり世界の各國が猶太人の主張を聽かなければならぬ如く、秘密裡に飛躍して、成功したる結果であるといふことである。

聞く所によれば、猶太民族の最も有力なる集團は、「シオン」團其物で、つまりは、全世界を統治する猶太王國の建直しを以て、最後の目的とするものであると謂ふことであるが、極東方面に於て、如何なる働きをして居るかと言へば、北は滿洲、南は中支方面に於て、秘密裡に例の猶太運動が行はるゝと言ふことで、その裡に日本に對する運動も含まれて居ると云ふことである。或る猶太通の言によれば、猶太人は、如何にもづるゝ民族である。一體づるゝ人間は、皆然りであるが、何事も決して自分ではやらぬ。萬事他人にやらせて、もしも罪惡に觸るれば、これを其人の罪とし、功名は吾れ之をとるといふやり方であるので、これは日本人の夢にも考へられぬことであるが、實際猶太人はこんなことを、何とも思はぬといふことである。元來は、さういふ様な惡辣な民族といふ譯でもなからうが、既に前にも述べた如き悲惨なる經歷から見れば、萬々是非もないので、二千六百年程も亡國の民として、他の民族より蔑視せられ、奴隸の如き生活を餘儀なくされた民族である、加之、歴史上傳る所によれば、彼等には、非常に大切なる使命を果すべき役目があると自覺するので、固より徹底したる修養の結果とはいはれぬ範圍に屬するのである。

が、猶太人本來の目的は決して悪くはない。が、この目的を果す爲には、不得已善處法を考へ、人も殺し、泥棒もするといふ譯であらう。傳る所によれば亞米利加の前大統領「ルーズベルト」が、愈々歐羅巴に向けて出發する時に亡くなつたのも、新聞紙には出ぬが、猶太人の行爲であるといふことであるといふことである。これは猶太人を考る場合に、考へ漏してはならぬとさへ謂はれて居るので、殊に又、「シオン」運動の決議として、米國「ウキルソン」大統領を踊らせた平和會議の十四ヶ條の如きも、「シオン」の決議が其儘に採用されたといはれて居るなどは如何にも奇妙な策動の結果でなからうか。傳ふる所によれば、英國の「ロイドジョウヂ」が、二の足を踏むと秘書役が之れを矯むるのであつた。しかもこの秘書役は、猶太人であつたといふことである。加之、統一黨の首領も自由黨の總理も、皆猶太人であつたといふことである、そこで英國は猶太人でないものも、英國の運命の爲に、猶太人に道を開くの必要に迫り、不得已してそうやつたとさへ言はれて居るのである。それからまた、愛蘭や、印度に騒動を起さして、英國の政治に大なる虚構をつくつたのも猶太人で、猶太人は、自分の目的を達する爲には、敵も味方も關係せずに行行するので、當初の目的に反し、露西亞で共產主義を實行したなども、其一例であらうといふことである。眞偽は固より吾輩の知らぬことではあるが、元來猶太人の關係する、共產主義は、主義にあらずして方便であり、其主義としては根柢より其趣を異にするので、共產黨は



勿論、虚無黨も、無政府黨も、過激派の如きも、猶太人の關係する所であるが、それ等は猶太人の精神でもなければ、希望でもなく、是を利用して根本的に猶太民族の繁榮を期し、寧ろ亟かに露西亞帝國を亡さんが爲であつたといふことである。猶太人としては純然たる王國主義であるけれども、これを實顯する迄の手段としては、民主主義でも、社會主義でも、無政府主義でも何でもよいので、つまり自分さへ飲まなければ、他人には如何なる毒藥を飲ましてもかまわぬので、畢竟他人を毒殺して自ら生きんとするのであるといふことである。これは少しく亂暴ではあるが、それも考へられぬでもない、といふことである。

「シオン」團は聖書に基いたものであるが、亡國の民たる悲惨な境遇から判断すれば、人として許し難き惡事をも致すので、此點は、如何にも同情に値するのである、これを要するに猶太人は全世界を統一するのが、目的であるので、而かも今や神意により世界を統一せんとする中樞國とも稱すべき地中海の東部を占有し得たので、一部の猶太人は、事實上全世界を統一するの運命を有することゝ信じつゝあるのであらう。少くとも、二千六百年來未曾有の快夢を見つゝあるであらう。今日の全世界は、「シオン」の旗の下に統轄せられ、我日本の如きも、他の諸國と共に、猶太人の前に膝を屈するに至るであらうと、彼等は迷想しつゝあるであらうか、或はまた我日本の歴史に、明示する如く、神武天皇の御東征に際し、賊將長髓彦が、饒速日命の降天の事跡を訴

へ、天皇は是を認容し給へる結果となると考ふるであらうか。上代のことは、明白なる事實と雖これを證言するに難く未來の事は固より豫め明言し難しとは謂へ或はこれに類する事實となるであらう。而かも茲に斷言し得べきは、猶太人は世界の歴史に傳ふる如く、又現在に於ける歐洲諸國の革命的、民主的、社會的統治法を是認して、其儘に是を實行せんとする以上は、世界の人類をして康福ならしむべき大道に合せざること勿論なるが故に、決して我等人類の遵奉すべき大道にあらず又決して理想的統治法にあらずと信ずるであらうか。從て猶太人は從來の所信を捨て、二千六百年の苦衷を満足せしめんが爲めには、我皇道に適合する日本の大道を悟り、相匡正して人類の康福に躍進するの外なしと悟り得るであらうか。



## 第六章 猶太民族の世界的運動

七六

何に致せ、現在に於ける猶太の名士は、決して自ら王位を占めんと欲せぬであらう。帝王それ自身は、世界開闢以來の民祖「アブラハム」の純血を受けた萬世一系の人でなければ、我等人類に君臨すべき資格がないといふ如き信念を持ち、堯、舜、禹、湯、文、武、秦の始皇の如き、善處的な、而してまた一時的な、王位の持主では不合格である。一生懸命に之を信じて疑はざるを誇りとするのである。要するに、「シオン」王國の統治者になる人は、雲の上の神靈の力によつて始めて、得らるゝので、早く其靈位を天降らしめ給へと、熱心に禱つて居るのであらうが、今一步研究を進めて見れば、「シオン」帝國といふものは、これを日本語に譯すれば、「日の國」と云ふ意味で、日本人が我日本國を神國と稱する如く、猶太人の理想としても、「旭日の輝く國」を意味するのであると謂ふことである。

以上述べる所の如く、猶太人の理想も、日本人の所信も同一で、其實行方針に於て様式を異にするが如く見ゆるのであるが、今更らに露骨に之を精査すれば、猶太人の從來主張する所は、我々日本人の現實に、事實的證明として教ゆる所に戻り、我々の日本文明は、人類の美點を啓誘開發して之を大成せんとするに反し、人類の弱點を考察し、之を利用して其の成功を期せんと

するにあるが如きは、如何なる理由によるであらうか、今茲に其要領を述べれば、

- 一、世界の人類を誘導制御せんとするには、先第一に利害關係を重視し、世界の經濟界を、猶太人の手中に占取せざるべからず。
- 二、社會的に成功せんが爲には、印刷の權能を掌握すべし。これにより、非猶太人を墮落せしめ、馬鹿者たらしめ、更に騒亂を喚起するに容易ならしむべし。
- 三、自由思想と懷疑説とを鼓吹し、宗教を破壊する目的を以て、破戒的觀念を非猶太人に注射すべし。
- 四、非猶太人の家族主義を破壊すべし。
- 五、王座の守護及愛國心を養成しつゝある、陸海軍を廢滅すべし。
- 六、各國民間に軍備反對の念を起さしむべし。
- 七、手工的及家族的工業を、大資本を擁する製造工業に換へざるべからず。
- 八、猶太人の爲に、文武官の職を襲くの道を開拓し、國家の立法權を制定するの地位に加はらしめざるべからず。
- 九、猶太人が往昔より仇敵となせる、基督教徒の財産、健康及生命を吾人の藥籠中に收めんが爲、醫師及辯護士の職に就かざるべからず。

七七



- 十、非猶太人中に、勞働階級の發達を圖らざるべからず。
- 十一、非猶太人中に、懷抱する不平及革命に對しては、是等を援助すべし。其理由は、吾人の資産を増大し、吾人の目的を貫徹するに近き道なればなり。
- 十二、全世界に波浪の如く動搖しつゝある、社會運動を指導し、且猶太人の踏襲し來たる主義を堅く保持すべし。

右の條項は、其一部に過ぎぬのであるが、誠に以關心すべきことではなからうか。而かも尙ほ、左の如き條項も、猶太人の信條として示されて居るとさへ謂はれてゐるといふことである。

- 一、若も希來人が、此處に開かれたる、猶太人會に於て決議せる條項を遵奉せんか、數百年の後、我等の子孫は我同盟創立者の墓前に至り、希來の民に與へられたる誓約は、既に實行せられ、彼等は全世界の貴族王侯たることを得たりと報告するや、必然である。
- 二、他の國民は、漸次希來人の奴隸たること毫も疑なし。
- 三、各國民衆の、盲目空虛にして、徒に音調の高き雄辯を喜べる性癖は、吾人の最も容易なる獲物たり。而して吾人の人氣及信用は、實に彼等を信頼せしむるに足る兩刀の武器なり。
- 四、吾人の目的を達成せんが爲め、勞働階級を、可能的程度に於て之を保護せざる可からず。斯の如き行動は、吾人の希望するが如く、民衆を挑發するに適せり。

五、吾人は革命及王位顛覆の爲に必要な武器として、民衆を操縦し、是等の災害を最も長足に運ばしめんが爲、吾人の事業は成功に近づき、全地上に於ける統御の目的は、迅速に貫徹せらるべきなり。

右の如き畏るべき陰謀的條項は、一八六〇年の、全世界猶太人同盟會議に於て、決議したる條項の内容であるといふことであるが、其後七十餘年を経過したる今日より之を見れば、氣味の惡ひ程實行されて居り、其後一八九七年八月に、瑞西の「バーゼル」に開かれたる第一「シオン」會議なるもの、議定書には、尙更恐るべきことが記載されて居るといふことである。此議定書は最高秘密結社員たる「シオン」代表に依て署名され、佛蘭西の「シオン」本部に保管されて居るといふことであるが、其内容は無論秘密に附せられて居るが、大要左の二項に分類されて居ると傳へらるゝのである。

一、非猶太人を世界的に征服する方法。

二、「シオン」血統、猶太人の專制君主を奉戴する、全世界的猶太團の未來に於ける建設。

茲に少く注意すべきは、猶太民族の二國に分裂したる往時、猶太人中の聖賢等はこれを悲み、紀元前九百二十九年に平和的勝利を得べき政策を創作し、猶太人の標象として平和的に世界の征服を決議したと傳えられてあるのであるが、其標象とする蛇體は亡國以來其中心の所在地を變轉



しつゝあるといふので、(其頭部は猶太の聖人等の樹立した政策を委任せらるゝ猶太人政府で、其胴體は、猶太人全體を示すのであるといふことであるが、此政府なるものは、猶太人間にも、其真相を知ること不可能なるが如くに出来て居るといふことである。)此蛇の匍匐すべき道筋は、悉く基督教國の胸部を貫き、凡ての非猶太人の國力を失墜せしめんとするので、蛇の頭は、歐洲の到る處に、經濟界の崩壞、精神界の墮落、道德界の敗退、思想界の混亂を實現せしめ、炯々たる兩眼は、諸國民を睥睨し、紅蓮の焰を吐く舌は、何物にも觸れて居るが、其目的を貫徹した後、初めて昔時の猶太國に其頭を復歸せしめんとする謎の様な話を、實行せんと努力しつゝあるといふのであるが、先づ

第一の宿营地としては、紀元前四百年頃の希臘で、「ペリクレス」の勢力と、尊嚴とを咬み初めたのである。

第二の宿营地としては、紀元の少く以前で、羅馬文學の、黄金時代たる、「アウグスツス」時代の羅馬であり、

第三の宿营地は、十六世紀の前半紀に於ける、西國の首府「マドリッド」で、

第四の宿营地は、十八世紀の始めより、佛國革命の終る頃までの「パリ」で、

第五の宿营地は、一八一四年より、大「ナポレオン」の没落時代迄の「ロンドン」で、

第六は、一八七〇年より普佛戦争の終る迄の「ベルリン」で、

第七には、一八七一年より、露國の「ペトルブルグ」に移つた。

と傳ふる人もあるのであるが、獨逸の如き軍閥官僚主義であつた國家でも、其根柢を社會主義の爲に動かされ、政府は、財政紊亂に苦心したのは事實であるといふことである。英國は、經濟的立場から、害毒を受けなかつたが、猶太人が、露國に其勢力を集中した結果は勿論、世界戦争後の英國や、米國の近情などを見ては、心を動かさずには居られぬのである。

それからまた、猶太人の陰謀的事業としては、平和的征服の實現やら、叛逆的争闘と、猶太式戦術の關係等であるが、猶太自由主義者及猶太系統の諸新聞が、宣傳材料として、常に自由、平等、同胞一般投票、君主政體の顛覆、共和及世界主義の實行、良心の自由、死刑廢止等を主眼として、異民族を煽動したのは事實である。而かも、猶太人は、彼等の寄生する國家に對し、何等かの利益を保護せられん爲、爲政者及統治者を買収しつゝ、政治の腐敗を促しつゝあるも事實であるといふことである。加之、非猶太人の叛逆者が陰謀を企て、秘密の計畫を行ふ以前に、非猶太人の善良なる性格者に對し、不善の本能を挑發せしむることは、猶太人の目的を進捗せしむる所以なりとして、之を努めたこともあるのであるが、是等の陰謀事項は、印刷界の占有によつて著しく發達したのであるといふことである。



要するに、良心からは信ぜられぬ如き「シオン」の議定書は、非猶太人の各方面に渉り、欺惑墮落の方法、言論界の紛糾破壊、思想の喚起等をなさしむべき、的確にして明瞭なる説明を興るものにして彼等の傳ふる所によれば、(餘りに惡疎にして信じ難きが如きも傳ふる儘に述ぶれば)

一、誘拐の方法としては、

我等猶太人は、自由主義の鼓吹、苞苴、賄賂の誘惑に依り、非猶太人の放縱、貪慾、破壊的思想の挑發、一般社會の打撃と、下層階級の不滿の誘發、上流階級の自我的本能の増長に力めたのである。而して吾人の提供せる、自由、平等、同胞なる美言は、今や地球上到る所に唱導せられ、之を口にするものは、懽然として集まり、狂喜迎合せざるものなし。斯くして非猶太人の國家は、其基礎を崩され、國民の法律に服従する責任觀念と、安寧秩序を保有すべき思想を消滅せしめたり。是即ち平和手段に依り、世界を征服せんとする、猶太人の所爲ではないか。

二、買収の方法としては、

非猶太人と雖、吾人の爲に必要な者は、常に其關係を密接ならしめ、是等の被買収者を活動せしめ、其指導の下に、非猶太人中に放縱の念を湧起せしむると共に物質的要求に、貪慾飽くなきに至らしめたり。是れ彼等の弱點、缺陷を現實に曝露せるものにして、善良なる起

首を撲殺するに、最も好都合なりき。此の一事、亦以て吾人の勝利を容易ならしめたり。

三、利用の手段としては、

盲目者たる非猶太人の力は、吾人民族を建設する柱石なり。されば吾人は、是等盲目者を指揮し、其力を利用し、以て吾人の目的とする方向に集中せしめざるべからず。吾人の代表者は、歐洲全國民中に侵入し、尙是等國民の力を借り、他の諸大陸に及ぼさしめ、動搖、爭亂紛糾と憤怒とを具體化せざるべからず。

四、自由主義の鼓吹手段としては、

吾人は自由主義を標榜せる、凡ての黨派を獨占し、之に講演者を巡遣せり。

五、迷路に入らしむる手段としては、

非猶太人が、迷園に彷徨せざる間は、社會の各方面より出來得る限り、反論を主張し、輿論をして歸納せしめず、非猶太人をして全く迷路に立たしむるの要あり。これ各人の意見の相違は、何物よりも誤解及怨恨を惹起するが故なり。吾人は此手段を用ひ、各黨派に軋轢の種を蒔き、吾人に服従するを好まざる公衆の力を紛碎し、又た吾人の事業に對し、假令些少なりとも妨害を興ふる、個人的起首をして、無氣力、無能力とならしめたり。

六、個人的起首を絶つ手段としては、



吾人に對し、個人的起首より危険なるものはなし。個人的起首にして、天才的ならんか、吾人の蔭ける軋轢の種子により、活動する百萬人の事業よりも、更に其事業を營むものなり。故に非猶太人をして、個人的起首たらしめざる如く、教育指導せざるべからず。

七、陰謀の手段としては、

吾人は、非猶太人の君主及野心家をして、專制獨裁の政治を行はしめ、政權上の亂行を敢てせしめ、非猶太人の自由思想を挑發し、治者被治者の權力を對峙せしめたり。吾人は、政權を掌握するを以て、功名心を満足せしむる目標となし、各國をして、暴動及騷亂の技を演ずる競技場となせり。而して現代の凡ての施設、制度を破壊せんが爲に、不規律なる生活及經濟上の破産を以て、其歩を進めつゝあり。

八、惡謀の手段としては、

吾人の用る暗號は、力及驕飾にして、強要を原則とし、狡智、驕飾を法則とせざるべからず。此原則たるや、驕飾は素より不善なるも、此不善を惡用し、吾人の目的を貫徹し得る手段なりとせば、贈財、詐僞、瞞着、變節等の行動あるも、敢て躊躇すべきにあらず。又官憲を懷柔する爲に、他人の不法行爲の惡用を遲疑するに足らず。

九、平和征服の手段としては、

平和征服の下に行進しつゝある吾人の政治は、恐怖すべき戰亂の愚を演出せず、便宜にして全く見ること能はざる特權を有せり。即ち非猶太人をして、無能盲從せしむる特權を掌れり。

十、過激思想手段としては、

我が過激派の主義は、恐怖すべきものなりと雖、自由、平等を愛する米國人は、過激思想を以て父の如く愛し、此主義を標榜せる爲政を以て、賢明なる行政なりと嘆賞するが如く、非猶太人の窺知すること全然不可能なり。

十一、輿論喚起の手段としては、

吾人は輿論の力に依り、非猶太人の諸政府を互に交争せしめんとし、再三其功を奏せり。是れ秘密裡に行ひたる、輿論計畫の遂行せられたる證左なり。

十二、新聞雜誌の利用としては、

現代に於ける諸國に、國民思想を動搖せしむる偉大の力あり。新聞紙、雜誌類の如きは是なり。十三、猶太人は、不利を避けて特有に進む、然れども、吾人の外、如何なる人種と雖とも、利益上より打算し、此偉力を收むること能はざるべし。

十四、黄金の掌握による手段としては、



吾人は此の偉力を用ひ、吾人民族の勢を集め、而して非猶太人の血及涙の一滴づゝより黄金を掌握せり。

等の諸項によるも、大要如何なるものであるかを推察することが出来るのである。而かも其唱ふる所は、

- 一、非猶太人中、伶俐なる智識階級も、自由、平等の意を解する能はざりき。自由、平等は此世に存するものにあらず。之れ人類は、智能、性格、力量等が自然に賦與さるゝ原則を知らざるに基因せり。
- 二、吾人は、自由と稱する致命的毒藥を用ひたる結果、諸國の政治組織は變化し、各國民は毒藥の爲に死病に罹り、全く絶命せんとするに至れり。
- 三、吾人は假令、非猶太人に自由主義を宣傳するも、我國民族は、卒直、從順ならざるべからず。即卒直、從順なるが故に秩序あり。秩序あるが故に、平和幸福を得るものにして、吾人は非猶太人に對し、全く反對説を鼓吹せり。而して其結果、非猶太人は如何なる歴史を綴りたるかは、獨り猶太人のみに了解し得るにあらざるなり。
- 四、非猶太人の道德、思想、宗教、經濟等を壞亂する爲に、印刷物を使用せるは、非猶太人に對し、熾烈なる燃焼物なるを以てなり。然れども印刷物は無思想、不正、虚偽なるものなり。

非猶太人の多數は、印刷物は實際上如何に利用すべきやを了解せざるなり。吾人は吾人の帝國を建設したる後、新聞紙、雜誌其他印刷物の發刊を一切禁止せざるべからず。

五、思想の武器たる、印刷物は、吾人の教育上、常に變化流轉の憂ありて、國民の思想として一方進歩の恩恵に浴せしむるも、他方空想に耽り、徒に思索せしむる弊害を生ずるものなり。國民思想の進歩と云ふも、其思想に關係等の制限なく、漫然空想思索を逞するに過ぎず。而して國民思想の進歩の道程は、人と人との關係と、人と政權との關係をして、無政府的に歩ましむるものなり。即ち自由と云ひ、平等と稱するも、國民は之を要求、強請するの傾向ありて、自己の欲するまゝに彼等の思想及諸事業をして、無政府的混亂状態に陥らしむるの愚を演出せり。

などといふので其惡辣さが推し測られるのである。要するに、猶太人の惡辣が、實際右の如くであるや否やは、吾輩の確知せざる處であるが、假りに其通りに相違ないとすれば、相當に注意を要するであらう。それから又、政體に關する彼等の意見としては、民主主義の如きは絶對に是認せずして、飽く迄も專制政治を主張し、徹頭徹尾、一頭政治を固守しつゝあるといふことで、立憲及共和の政體の如きは、絶對に非難し、全く彼等の夢想にだも思はざる所であるといふことである。所謂「シオン」聖賢の制定せる原則として、一頭專政政治を嚴守しつゝあるので、



「シオン」議定書として、吾輩の耳にする處の中にも、

一、自己の権利義務のみを認識する民衆は、全く我儘者にして、政權に參與し、位官を獲得せんとする、黨派的軋轢を惹起し、其結果、是等民衆の相互間に混亂を生じ、國家をして自然的に壊滅せしむるに至る。

二、民衆多數なるを以て、是等の多數によりて企圖することは、凡て一定の目標を失し易く、爲に種々見解を異にし、實行困難に陥るべし。

三、然れども、唯一人のみにて計畫せる事柄は、順序整然とし、而かも明確宏大となすに足れり。故に行政上の制度も、一人の頭腦によりて案出せざるべからず。即ち衆愚の無智識をして、此の制度に干渉せしめんか、如何なる計畫も失敗に終らんのみ。

四、統治者を除き、何人と雖も、政治上に參與せしむるが如きことあらんか、遂に施設制度上の連絡を缺き、相齟齬するや必然なり。

五、凡そ如何なる計畫と雖も、強固にして都合よく考察せられざるべからず、故に豫め之を民衆に告知するの必要なく、例へば、民衆の力大なりとするも、強ち民衆の議論に委ぬるの要なきなり。

六、凡そ文化は、專制なくして絶對的に存在するものにあらず。即ち民衆に依りて文化を指導

するにあらず。民衆の指導者に依りて之を指導するものなり。

七、民衆は暗愚なり。民衆は、如何にして自由を獲得せんかを苦心せり。而して、彼等は臆て自由と暗愚の無政府を組織するに至るものなり。

八、專政の原則、既に斯の如しとせば、國家、内閣、農家、製造所及び家族は、協力一致して統一的一个の智識と、一人の首領を奉戴せざるべからざるは勿論、如何なる場合と雖、民衆の自由のために破壊すべきにあらざるなり。古來大事業なるものは、一人の創造に外ならざるなり。

「シオン」議定書に於ける、專制政治の萬能論は、右の通りであるといふことであるが、是を今日に於ける各國の政情に照して考察すれば、一種の妙味の、自ら湧出するを禁ずることは出来ぬ。吾輩は茲に斷言せんとするものである。猶太人の氣分を、十分に味識し得るは、我等日本人のみであらふ。併し、吾人の目に照して之を見れば、猶太人の意見も、要するに有徳作王の分際で、歐洲立憲國の立憲精神を批判するに過ぎず。未だ世の中には、遙かに彼等よりも高尚にして完全なる、理想的政治ありて存するを知らぬのである。

それからまた、猶太人の立憲共和政治の缺陷に對する所見は、要するに猶太人は、政治上の投票權を以て、非猶太國の人民を壓服すべき武器として選んだ、猶太人の術中に陥りたる結果とし



て、これを見るのであるが、

一、社會の一般を通じ、如何なる下層階級と雖も、投票權を保有せしめ、吾人の到る所に集合、若くは團體を組織し、投票權を武器とし、効果を收め、特に其任務を全ふせるが故に、着々として議定書の基礎を強固にせざるべからず。

二、然れども、此基礎を確實ならしむる以前に於ては、非猶太人の有識、資産階級より大多數の味方を得るは困難なるを以て、絶對的に多數の味方を得る政策として、智識、資産の區別なく、社會の一般を通じ、投票權即選舉權を獲得せしめざるべからず。

といふのは、即ちこれである。之を要するに猶太人の政策は、普通選舉權の思想を、各國民に鼓吹し、民衆の投票權を獲得せるに乘じ、衆愚を煽動し來つた事實を明知することが出来るのであるが、要するに猶太人は、飽くまでも專制政治を固守するので、衷心より、立憲共和の政治を忌憚してゐるのは明かである。即ち其理由としては、

一、專制政治に代りて生まれたる立憲政治は、吾人の鼓吹せる自由主義より生れたるものなり。憲法を以て金科玉條と爲すも、此憲法は、果して如何なる美果を收め得たるか、思ふに、憲法を制定せるため、黨派的軋轢、争鬭、不和を起し、低級政治家の煽動によりて、國民間の融和を缺くに至れり。されば、憲法は國家の活動力を殺ぎたるに過ぎず。

二、憲法は民衆の爲に實際的にあらざる權利を賦與し、而かも此の權利は實施せんと欲するも、

一の理想に過ぎず。

三、饒舌家は無駄口を叩く權利を有し、記者は愚鈍のことを記述するの權利あるが如く、賤民及労働者は、糊口を凌ぐ權利を有するのみなり。之を要するに、下層階級は、猶太人の命令書、及代理人等の爲に贈答せらるゝ物品にして、吾人の机上より投ずる紙片より利益を得るのみにして、決して憲法上より、何等の利益を享有せざるものなり。

四、共和政治と稱するも、労働者にとりては苦き皮肉あるのみ。彼等は、日々労働せざるべからず。彼等は、共和政治より賦與せられたる權利に關し、實際的に利用する能はざるのみならず、即ち同業者及傭主の爲に各自の勞銀を左右せられ、恒久不斷の保證を奪はれつゝあるにあらずや。吾人は、是等の同業者、及傭主のために、暗々裡に吾人の要求を執行せしめ、且必要の程度に應じ、日常問題より、彼等の考案を外に向はしめつゝあり。

といふて居るのであるが、立憲共和政治は、猶太人としては斷然たる禁物である。而して労働者は、現在人生の壓迫に對抗する戰に依て幸福を得、自己の解放に成功しつゝあるを思つてゐるが、併し、労働者に依つて征服されたる政權も、くだらぬものとして議定書は明言して居るのである。實際労働者は、猶太人ではないから、彼等非猶太人は、既に猶太人の網中に捕はれてゐる



のである。併し猶太人は、實際労働階級の社會に有すべき地位に就き多大の注意を拂ひ、労働階級の勢力扶植に力を盡して居るので、其反對に、中流以上の階級を打ち破り、労働階級を以て、各階級の一大勢力圏内に收めんとして居る。併し實際彼等は労働階級の味方ではない。また掩護者でもないことの確である以上、彼等が労働階級の勢力を大ならしむべく活動するのは、決して最後の目的にあらずして、ほんの一時的手段に過ぎないことは明瞭であるといふことである。猶太人の惡辣さ加減は、以上述る處によるも、既に明白であらうが、猶太人の天才的長所とも稱すべきは、左の事實によつても、明かに證據立てられると傳へられて居るのであるが、猶太人は、世界主義、人道主義を非猶太人に傳道するにも拘らず、彼等民族に對しては、飽く迄「シオン」帝國の愛國心を鼓吹し、猶太民族の自己崇拜の念を高めて居るのであるが、彼等は深く猶太式天才を尊敬し、非猶太人を智識的に文化し難き民族と認めて居る。彼等が猶太的天才と稱するは、非猶太人の云ふが如く、眞とか、善とか、美とかに對する觀念ではなく、彼等の所謂天才とは巧妙なる權謀とか、欺瞞とか、或はまた虚偽と云ふが如き、寧ろ人道に反するもので、彼等は暗黒世界の是等のことに就ては、全く天才的である。併し彼等と雖も、強ち其本性より惡魔同様のものではあるまいが、「シオン」帝國建設の爲には、手段を擇ばないといふ決心のもとに陰忍するのであらう。此點から考へて見れば、至極同情すべきで、一掬の涙がないでもない。而かも自信の

強きこと驚くの外なく、自ら其智識力、觀察力及研究の深さを信じ、其先見の明、發明の力の他の民族に冠絶するを自認し、

吾人の天性は、他の民族を指導し、世界統御の大任を負へることを知るべし。

と確信しつゝあるのである。加之、

非猶太人の智識階級は、倫理的斷定を試みずして、徒に淺薄なる智識を誇り、科學より得たる智識を以て、萬事を實踐躬行せんとす。安ぞ知らんや、其智識は吾人の謀者が、吾人の非猶太人の誘惑上必要なを以て、彼等の智識涵養の目的を論じたるに過ぎず。

とさへ自認し、尙ほ

吾人は理想及理論を以て、非猶太人を指導し、非猶太人の獨想の閃きを消滅せしめ、永久に吾人の方針上有利なる方面に指導すべし。

とさへ論進し、剩へ、

夢想家の存在は、吾人の利益にして、彼等が實際上の理論と遠ざかり、其智識を幻想的理論に走らしめ、以て進歩的なりとせるは、一般的傾向である。元來、眞理は一にして、二にあらず。若し其理論が眞理なりとせば、到底進歩の不可能なるは明なり。然るに非猶太人にして、此真相を發見したるもの、一人と雖これなし。



と論じ、

吾人は諸印刷物を通じ、技藝遊戯及發明の競技を提出し、遂に非猶太人の智識をして、彼等の研究せる諸問題より除去するの傾向を生ぜしめたり。

と評し、又更に、

非猶太人は、國政に關して輕薄なり。彼等の大官は、平然收賄せり。彼等は經濟事情に通ぜざる爲め、遂に諸問題をして、吾人の解決を俟たざるべからざることゝなせり。

と論じ、

非猶太人は、吾人に對し、精神上、物質上大なる負債あるも、彼等は無頓着に、多額の利子付の借金をなしつゝあり。彼等は吾人に支拂ふときは、彼等の懷中より、無算當に金錢を握み出せり。從て彼等が同人種より負債するは、却て吾人に尨大なる利子を支拂ひつゝあるを知らざるなり。之を以て視るも、非猶太人の頭腦の全然動物的に劣等にして、考慮の念なきを知るべし。

然れども、此半面に於て、吾人は天稟的才能あることを證明するに餘りあり。吾人は此天稟的才能により、非猶太人に對し、精神上物質上に債權を有すものである。

と放言しつゝあるとさへ、傳えられて居るのである。

## 第七章 猶太人決意の梗概

以上第六章に掲げたる驚くべきことは、「シオン」の議定書中に記載しあるといふ事で、猶太人の、如何に道徳に懸念なく、狂暴限りなきやを自白して居るものとも見えるが、彼等の帝國を建設する爲には、如何に警戒と勇氣に充ちて居るかを了解することも出来るといふことであるが、猶太人の今日に至る成績を見れば、事の正、不正は云ふ迄もないが、着々と成功しつゝあるのは明白である。これと云ふも、彼等が「エホバ」の神に對する絶對の信仰によるので、それとはなしに、精神的統一が行はれ、羨むべき状態に於て、一致の行動をとりつゝあるのであると吾輩は思ふのである。

今猶太精神の眞髓たる、猶太の聖書「タルムート」中に現はれたる諸點を列擧すれば、實に惡魔其物の所言で、如何に彼等が吾等人類を呪咀するかを證すると同時に、もし彼等をしも恕すならば、神徳などは言ふに足らぬとも考へらるゝのである。

「タルムート」の一部を抜萃すれば、

- 一、神より生まれたるは、唯だ猶太人のみ、其他の人類は惡魔の子なり。
- 二、人間は萬物の長なるが如く、猶太人は人間界の長なり。若し此世に猶太人なかりせば、如



何なる幸福も、赫々たる太陽の光線も、皓々たる太陽の光線も、風雨もなく、人類は到底生存し能はざるなり。

- 三、永久に生存する価値あるものは、獨り猶太人のみにて、他の人類は驢馬に如かず。
- 四、猶太人は、人類と名つくる権利あるも、惡魔の子たる非猶太人は、豚と命名せんのみ。
- 五、「エホバ」は、非猶太人を憎み賜ふも、驢馬や犬の如きものを憎み給はず。
- 六、非猶太人が、善事を行ひ、慈善を施さば之を罪と認め、彼等を呪ふべし。是れ彼等は、誇らんが爲めに、斯る行を爲すが故なり。
- 七、我等は、如何なる援助も、非猶太人に乞ふべからず。我等の利益の爲には、彼等に害を與ふべし。非猶太人は、地上にある幸福を占むる権利なし。何故なれば、彼等は唯だ動物なればなり。(中略)

八、非猶太人の生命は我等の掌中にあり、特に彼等の黄金は我等の所有物なり。

九、故意に猶太人を殺害せる非猶太人は殆ど全世界を滅亡せしめたる罪の如し。

等とあり、右の外に、猶太聖書に書かれたものは、悉く非猶太人を愚弄し、嘲笑したもので、單に猶太人の猜疑心や、呪咀心と見做せば、兎も角彼等が如何に非猶太人に對し、反感を抱き、其反感は、戰慄に堪ざる残忍性を有するもののみであるやを考へざるを得ぬのである。

要するに、猶太人は厭ふべき民族であると謂はれて居るが、吾輩の彼等に感服する所は、民族的團結の強きこと、二千六百年を通じ漂浪のまゝ寸毫も其志を變ぜず、日夜専心世界の富と、言論界を獨占し、其内の一部の人は、一足飛びに國家の段階を踰えて、世界統一の目的を果さんとして、勇進しつゝある事實であるが、其志望に寸毫の弛緩もなく、「エホバ」の膝下に集合し、全身の信仰を捧げて餘念なき一事は感服の外なきことである。吾輩の尊敬する猶太通の言に據れば、

(前略) 近來も、「ウンゲルン」といふ反過激派に屬する露國將軍の爲に、蒙古の庫倫で、一日に千二百名の、老若男女の猶太人が虐殺されたと云ふことであるが、其時なども、猶太人は群起して、其不正義を世界に愾へたのである。併し彼等猶太人が、其元は如何であつたかといふに昔し波斯の「エリコ」といふ市街を攻め取つた時などは、甚しき虐殺を行ひ、又「アルタクセルクセス」王が、「エステル」といふ猶太美姬を王妃として居りましたが、其猶太人たる王妃の進言により、一日に七萬五千人の猶太反對者を虐殺して居るのである。凡そ是等の事が、猶太人と他民族との間に融和すべからざる溝渠を造つてしまつたので、一方では、それを怨に思ふて、猶太人には斷じて同等の權利を與へないといふことにすると、今度は猶太人の反抗心を高め、それに報ゆる爲、革命であるとか、或は潜水的陰謀を巧らみて、其國礎を引つくり返すと



か云ふ風になつて來たので、これは互に今日まで、連綿として續出して、現在の状態になつたのである。

此點に就て、吾輩は考るのである。神は公正であらねばならぬ。猶太人とか「イスラエル」民族に限り、それを選民として之れに特惠を興る譯はない。神は公明正大である。吾等他民族も、悉く神の恩恵を受けて、人として立つて行くべきである。それを猶太民族だけに右の如き恩恵を興へて、他の民族を「ゴイ」と呼んで虐待するが如きは、甚しき誤りである。彼等が他の民族より憎まれたのは、不得已ことである。其後に至つては猶太人があまりに金を儲けるとか、種々の事があり、要するに宗教的にも、大なる反感を生じ、聖書にもさう書てあるからといふので、それを信仰するの餘り、さういふことになつたのであらう。

吾輩は思ふのである。彼等と他の民族との間には、怨み重なる事實があるが、我等の日本は決してさうではないから、敵視しやうとは思ふまいなど、推測するのは早計である。猶太人の行爲が、道に協はざる以上は、到底其間に面倒の起さることは絶対にないとは、いひ得ぬであらう。

猶太人が、宗教に熱心であるといふ事は、次の話によつても明白である。試に例を擧ぐると、毎年一月の一日二日のことである。吾等の風習によれば、御屠蘇と號して酒に酔ひ、山高帽子

も落ちさうな格好に、千鳥足になつて歩くものもあるが、猶太人は定刻を期して寺に集まるのである。さうして朝の九時頃から、午後の二時頃までひつきりなしに、御經を讀み、神を讚美し、非常に熱心に祈禱するのである。そこになると、全員眞面目になり、殊に女性を最初に、歔歔、泣涕、慟哭状態に陥り、「神の恩寵に渥する」とか、或は猶太民族が壓迫を受けるとか、いふ風な、文句に成ると、全會衆悉く慟哭状態に陥るのであるが、吾輩はさうも感ぜぬので、甚手持無沙汰で困るのであるが、彼等の熱情には感ぜざるを得ぬので、未だ嘗て宗教的集會で、斯の如く眞面目なる集會を見たことがない。また人生生活中、最も眞面目であるべき結婚式を見ると、結婚式は、矢張三々九度の様に、酒を盃に注いで、飲み交すのであるが、第一杯は「目出度事だ、夫婦仲よく」といふ譯で飲むのであるが、第二杯目は盃に酒を満したま、飲ませない。「チョット」御預けといふ風に、それから御祈禱が始まり、三分か五分か懸る。其御祈禱の意味は、約めて言へば、此盃は今度「エルサレム」を恢復して、彼の地に於て目出度飲みませうといふので、それからお婿さんが、盃を取て地に抛て踏み碎く。つまり「エルサレム」を恢復する迄は、此盃は飲まぬ、是非とも民族の結束を堅くして、再び「エルサレム」を復活せなければならぬといふ教訓になるので、これが即ち結婚の當夜の盃である。

それであるから、夫婦の間に出來た子供は、段々と他民族を仇敵の様に思ひ、猶太民族の結



束を固めなければならぬといふ氣分が、深くなつて行くのである。又舊約全書「イザエ」書の六十章に、

諸國の王冠は、悉く爾の前に落とさる。

とか、又

諸國の金庫は汝の足許に集められる。

とか云ふて居るのである。之を要するに、彼等猶太人は決して子孫の爲に美田を買ふつもりでもなければ、それを以て贅澤三昧をしやうといふのではない。悉く彼等はこれを建國と民族解放の爲に使用せんと思ふて溜めるのである。つまり諸國の金庫は、汝の足許に集められると信じて居るのである。又戦争をして、色々な騒動を起しても、皆金が猶太人の所に集まつて來るが、それは、民族の爲に使用するのであると考へて居るので、日本の、誤れる成金や、誤れる資本家のやうに、たゞ無闇に金を溜めやうといふのとは、全く意味を異にして居るのであらうが、此點は感服の外なく、よく／＼熟慮すべきことと思ふのである。それであるから、一方には「モルガン」「ウァンダリツプ」といふやうな資本家があり、一方には全く極左黨の、「トロツキー」とか「リーヴグネヒト」のやうな過激派をもつて居りながら、其間に氣脈を通じて、同じく民族の目的達成の爲に盡力して居るのであるといふことである。言を換へて言へば、一

方では、金を蒐めて居り、——「ロスタチャイルド」の集めて居る金でも——一方では、悉く民族の爲に使つて居るのである。(後略)

又友人の話として、茲に述べやうと思ふのは、

(前略)猶太人の實狀右の如くなりとせば、我等の日本では、果してどういふ風に考へたならば、よいであらうかといふ問題になるのであるが、これは、唯一言、「王道坦々として進め」といふのが、吾輩の結論である。これより外はないのである。歐洲の基督教國の様に、猶太人を目の敵にして壓迫する必要は日本には毫釐もない。我日本民族は、今まで猶太人には少しも縁も由かりもなかつたのであるから、基督教國の轍を履む必要は少しもない。それは、我等は充分寛大なる宏量を以て、彼等を濟度すれば宜しい。たゞ併し、一緒に行つて見ても、其道連が鳥渡一足遣り過して、背後から「ピストル」を撃つとか、脇差で拔打を喰はするやも知れぬから、それに對しては、十分なる警戒を加て行かなければならぬ。(下略)

猶太民族に關することは殆んど限りないので其内には又々之を附掲するの必要を感じることもあるかも知れぬが、先づ大體これ位の程度で留めようと思ふが、何に致せ世界人類中、最も注意すべきは猶太人である。彼等は既に殆んど世界の金權と、出版事業とを完全に握有して居るのみならず、殆んど凡ての方面の道路上に兩手を擴げて立て居るのである。彼等はまた廣大なる國家



をこそ有せざるも、他の大國と同様、世界に重視せらるゝ爲には、國家の價値を減ずるより善き方法がないので、國際聯盟の如き、軍備節減の如き、平和に關する不戰條約其他の如き、或は世界的威力を有する機關の中樞要人の位地の如き、皆是を猶太人の手中に收め、國家以上の活動をなすに不便を感じぬ如く働いて居るので、世界學界に於ける大學者を續出するが如きも、深く注意を拂ふべき必要ありと信ずるのである。

彼等はまた、國家と稱する大機關を有せざる結果として、裁判所を持たぬが、これもまた後來に望を屬しつゝ、國際裁判所設置の主張をなし、これが實顯を見たのであるが、彼等の最も恐るゝ所は、少しも兵力を有せぬことであるので、今日は既に露國を傀儡として手中に監制するの勢力を有し、露國陸海軍は、即ちこれ猶太陸海軍なりと考へても差支ない位になつたとも、考へられるのであるが、何に致せ、國家なき悲しさは、堂々として、猶太國の陸海軍を有する譯には行かぬのであるが、兎にも角にも、後來の爲を計れば、世界に於ける軍備其物の力を減少し、若くは限定せんとするには、其程度を低くするの必要あるは無論である。猶太人はこの底意を持ち、米國を利用し、軍備縮少と制限とを提議し、殆んど何等の關係もなく否、寧ろ反對の結果となる世界平和の要求に結びつけたるが如き、巧慧さは、驚く外はないのである。世間一般では、軍備の縮少を平和の誘因となると速解するものもあるが、それは大なる間違で、全く反對な結果となるは明瞭である。

茲に此章の最後として、猶太人に對する吾輩の所感の未だ述ざる所の一端を略記して見れば、概ね左の通りであるが、其中には無論累ねてこれを述べた所もあり、未だ充分に意中を悉さぬ所もあるので、つまりこれまで氣がつかずに居たことを附掲すると云ふのが、一番適當であらうと思ふのである。

既に前にも述べた如く、猶太人は世界全體に千五百萬人内外位しか居らぬ、少數民族に過ぎぬけれども、其の手先に使はれ、思ふが儘に彼等の意向通りになつて働くものは、其十倍も二、三十倍もあるので、其實力は決して侮ること能はざるのみならず、つまり油斷のならぬ、而かも一箇所に堅まつて居るのでなく、世界各國の最高級から、最下級に至る迄、猶太人の思ふ儘に働いて居り、殊に歐洲の主權者、及總理大臣を始めとして、諸民族の苦力に至るまで、殆んど猶太人の命令のままに、活動するの結果として、歐洲の諸國は既に彼等の掌中に歸し、米國に於ても、猶太人の期願する所が政策となり、露國も亡び、支那も亦衰死に瀕し、我國にも亦猶太の魅力が及びさうであると謂ふことである。而して、世界統一の運動は其懸聲で、英國の單純なる世界侵略とは其趣を異にし、三千年來動きなき神の命令を實行するにありと謂ふので、而かも其手段としては、猶太人以外の者から、忠君愛國の思想を褫ひ、是を共產化するにありと言ふのである。簡



單に之を言へば、全世界の帝國を潰滅せしめ、猶太王國の下に、萬世一系の統治を建立せんとするるので、佛蘭西、露西亞、支那の諸國を滅したのには、果して猶太の策動の爲ではなかつたのか。獨逸帝國や、土耳其帝國は果してどうであつたか。何に致せ、猶太人は我日本の猶太通の唱ふるが如く、猶太人の共產主義は、是迄吾輩等の思ふた如く、單純なる而かも眞卒に共產主義を是認し、これを信ずるやうなものではない。既に前にも述べた如く、虛無黨も、無政府黨も、過激派の如きも、悉く猶太人の關係する處であるが、それ等は、決して猶太人の精神でも希望でもなく、たゞ從來の露西亞を、根本的に覆滅せしむるの野心から出たので、猶太人の本當の冀望は帝國主義であるけれども、現在の制度を覆滅するには、手段を選ばざる結果としては、何でもよいのである。米國の如きは、全然猶太人の藥籠中のもので、其實際の歴史上、大統領は一人の耶蘇教信者もなく、皆悉く「マツソン」で「マツソン」でなければ、大統領にはなれぬことに、不文律に決定して居るとさへいはれて居るといふことである。此點は眞面目に判断せねばならぬ。

之を要するに、猶太民族は注意すべき民族ではあるが、深く嫉むべき民族とは思はれない。我等日本人の間に、よく猶太人の本質を示し、併せて彼等をして眞摯に我日本國の使命を悟らしめ、彼等本來の目的を實行するには、利害の判断によらずして、人道に依らしむべきを示し、決して下劣なる善處主義に由つて、其目的を貫徹すべきではないといふ、根本義を悟らしめなければならぬ。

ばならぬ。而かも手を握て味方となり、彼等をして眼前に於ける大罪惡を清めしめ、眞實に「メシヤ」其物を發見して自ら悟らしめなければならぬ。我等日本民族も、自ら顧みて、今日の紊亂したる思想や、輕浮の極に達せんとする觀念や、混雜惑亂したる信仰を醇化し、其の純正なる日本魂に復歸せしめ、これを強調しつゝ、二千數百年以前を顧眄しつゝ、勵進する猶太人と共に、相祝福するの機運に立ちて、救世の大業に向て進ませねばならぬ。

或愛國者は、世界の大事に鑑み、我日本國の運命を呪ふ二つの憂ふべき陰謀の東西に擴がりつゝあるを知り、(東には米國、西には共產系歐洲諸國の猶太民族。)東西相應して、極力日本國の運命を咄ひ、畏多くも、理想統治の根柢をさへ、覆さんと企てつゝあると牒知し、此民族が、果して如何なる計畫の下に、我日本の運命を呪ひつゝあるやを調査したといふことであるが、元來米國は、世界の各方面から正義の國と稱せられ、自國躬は、耶蘇教國なりと誇張しても、其實際に於ては、決して耶蘇教國にあらず、また世界の平和と人類の康福とを熱望する邦國にもあらず。而かも彼等は、正義、人道、博愛、自由を唱へながらも、其裏面に於ては、必ずしもそうでないので、其實、理想の判断を土臺とする利益主義に満醉したる國民が、多數であるのである。而かも、耶蘇教の大敵たる猶太教を信じて居るので、必ずしも正道に依て進退する國民とは信ぜられぬ。然らば猶太民族は、何故に日本に對して迄、敵對行爲をなすやと言へば、彼等の統治せ



んとする世界を、唯一帝國にせよとするのが元來の目的である。二、三、四、五の帝國ありては、統一とは謂ひ難い。然るに猶太人は世界の各所に充滿して居るので、誤間化しながらも、世界人類の思想を一歸せしむることは出来るかも知れぬが世界を統一すると同時に、民族の全部を満足せしめつゝ、同一の思想的進路を興る譯には行かぬ。而かも今日の場合、其中央勢力は、米國を利用すれば、極めて都合よき状態となるので、是れは是非とも輕視する譯には行かぬ。露西亞もまた其通りで、極めて有利に之を使役し得るので、既に實行の途に進み、露西亞帝國を亡ぼし、「ソビエツト」國を立てたのである。兎にも角にも、一たびは、共産的世界を造り、人民政府の偽名の下に、世界を統一し、然る後に、幾多の革命の下に、世界の人類を苦め、更に當初の目的に向て進行せんとするので、日本帝國存在の意義を、根本的に了解するに氣附かざるの致す處、今日の如き態度をとると外考へられぬので、如此迷想の下に、僅か千五百萬とは謂へ、猶太民族を昏迷せしむるは、誠に憐むべき次第で、決して賞揚すべきことではないのである。吾輩は、深き關心を以てこれを觀るので、自己の不周到なる詮索をも顧みず、是より改めて、世界の諸方面に於ける迷想を匡して正所を得せしめんが爲め、不順序ながらも、これを概説せんと欲するのであるが、更に其以前に於て猶太思想の根本とも稱すべき事義に關し、今一應吾輩の所見を述べれば、大概ね左の如くである。

## 第八章 人類の道德と感恩思想

既に前にも述べたる如く、猶太民族からは、知名の大偉人を多く出したので、如何にも神の選民と自稱するだけの價值はある様にも思はるのであるが、如何せん、國家なき民族の憫れさは、到る所壓迫を受くるので、發狂者、犯罪者頗る多く、富有者の多きにも關せず、貧民の多いのは争れぬ所である。是れ決して、猶太人の素質の劣等なるにあらずして、繰言ながら、國家なき民族の如何に憫むべきやを證するものであらうと信ずるのである。而かも尙國家の存在の如何に大切なるやを知らぬが如く装ふものあるは、國家なき民族の爲にするところありて宣傳するにして、もしも此邪説に迷はされたるを知らずしてこれを信ずるが如きは、極めて迂愚なるものと外考へられぬのである。

或る猶太問題研究の權威者の言に、

露國の「ドストエフスキー」は、其書翰の一節に、「ビスマーク」、「バイコンスフィールド」、「カレンベッタ」其他は、國家の力として單に一の蜃氣樓に過ぎない。彼等の主人であり、全歐洲の主人であるものは、猶太人と猶太人の銀行丈けである。猶太人が一たび「否」と云へば、「ビスマーク」は刈られた草のやうに「バサリ」と倒れる。猶太人と其の銀行とは、今や全歐洲の主



人である。全歐洲の教育の主人、文化の主人、社會主義、別して社會主義者の主人である。社會主義に依て、基督教を根こぎにし、且其文明を破壊しやうとする。歐洲が、無政府主義となつたとき、猶太人は自ら主人公の地位に就くであらう。何となれば、社會主義の宣傳に依て、自ら統一の實を擧ぐる事が出来るからだ。而して歐洲の一切の富は、分散して、悉く猶太人の銀行に歸するであらう。

と、四十餘年前既に今日を洞觀したと觀ると、驚嘆に値するのであるが、「ヘルデル」の如き、人道主義の熱心家でさへ、十八世紀の終に於て、猶太人の非同化性と、其絶大の金力の効果を認めざるを得なかつたのだ。「歐洲の粗忽な民族は、好で猶太高利貸の奴隷になる。」とは彼れの痛ましい自白である。或獨逸人曰く、單なる金力それ自身は、大なる問題ではない、我等の政府、我等の法律、我等の學問、我等の商業、我等の文學、我等の藝術、我等の生活の殆んど一切の部門は、何程か喜んで猶太人の奴隷となつて居るか、少くとも其一本の足に脚鎖をつけられて居る。同時に猶太人の非同化性は、益々露骨になつて居る。此の非同化性は、百年前に於ては、或は餘り目立たぬ程度であつたかも知れぬが、今や、總ての人の目に餘るものは、實に此特徴である。歐洲人は、理想動機から、友誼的に門戸を開いた。すると、猶太人は殆も敵陣に闖入するの態度に於て、直ちに高地を強襲して自家の旗を翻へした。

猶太人自らの世界征服の豫言は、一たび注意をそれに向けると、殆んど無限に發見される。猶太人の非同化的、革命的、國際的、即ち世界征服的傾向は、獨り之を基督教徒の長い期間の虐待の結果だと、斷言することはできない。猶太人は、所謂異教的羅馬、即ち羅馬が基督教の爲に分解作用を始めなかつた時代に於ても、彼等が羅馬に入り込まなかつた亞細亞的時代に於ても、非同化的、革命的は、其本來の傾向として顯著であつた。米國に於ける猶太人の一指導者は、此革命的傾向の淵源を、左の如く語つたことがあるといふことである。

我等の歴史が「カルチャ」の平原で漸く其曙光を認められた時、我等の祖先「アブラハム」は（其史上の人物であると、傳記の案山子であるとは問題でなく）我等の心胸から、或昔話を問引きした。問引きの過程は、斯くして始められた。「アブラハム」は、其同族の偶像を破壊した。我等が祖先の子々孫々は、熱心に此の間引きの過程を實行した。斯くして偶像破壊は、猶太教の天職となつたのである。（一九一九年六月「ソノラ」雜誌）

所謂問引きの過程とは、偶像破壊のことだ。偶像破壊とは革命のことだけれども、其革命とは、猶太人自らの革命のことではなくて、猶太人自らの多數若くは少數の居住する國々の革命のことだ。言ひ換へると、世界革命のことだ。世界革命は猶太人の、善く言へば、理想であり、露骨に言へば、野心である。……此の猶太人の世界革命の野心を、最も深刻に發表したも



のは、既に世界の大問題となつて居る「プロトコール」である。

猶太賢人會の記録「プロトコール」

既に斷截的に、日本に紹介された「プロトコール」全篇は、單に人の好奇心に訴へるだけの印刷物と見ても、天下の奇書である。人間性の見解から出立して、世界征服の原則と、方法と、輿論の製造から、出版物の管理法、階級と階級との反目、國家と國家との争闘、人種と人種との軋轢、教育、司法、財政、秘密結社、政界の攪亂、人心の墮落誘導、經濟的恐慌促進、財産沒收、金貨吸集、内外公債の事等、苟も人間社會を統制するに足る秘法は、悉く何等かの形に於て、「プロトコール」に影を留めて居る。二十四項の全篇は、長短、錯落、講演の底本のやうな形式である。大正九年以來、「プロトコール」の片鱗は、屢次日本に閃いたが、其の二十四項中、只の一項も、完譯の形で公になつたことはないやうに思ふ。といふことである。

「プロトコール」第一

單なる辭藻を離れて各思想の秘義を講求する。比較と演繹との光に照らして現事情を説明する。余は此の方法を以て、我等が政策の概念を、我等の立場からと奴ッ等（ゴイス）の見地からの双方から、陳述しやうと思ふ。

下等の本能をもつ人間が、高等の本能をもつ者よりも多數である事は、大いに注意を要する。それ故に政治に於ける最上の結果は、學者の推論からでなく、壓迫と威嚇とから得られて居る。總ての人は權力を求め、總ての人は、でき得るなら獨裁者であることを望む。其の個人的慾望の爲めに、共同的善事を犠牲するを欲しない人の數は極めて僅少である。

我等が人間と呼ぶ猛獸を、抑制して來たものは何である乎。其の猛獸を今日まで支配して來たものは何である乎。

社會生活の最初の階程に於て、人間は暴力に服従した。後には法律に服従した。けれど法律も一種の暴力の覆面に過ぎないのだ。余は此の事實から自然の法則に依つて、權利は強力に本づく、と演繹する。

政治的自由は、一の觀念であつて、事實ではない。此の觀念は、一の黨派が、既に權力に處る他の黨派を破らうとするときに、人民を己れの黨派に牽き寄せる爲の手段として、如何に之を適用すべきかを心得る必要がある。若し其の反對黨が、既に其の所謂自由主義に感染して居る場合は、此の事業は寧ろ容易に成就される。其の反對黨は、其の觀念の爲めに、權力の一部を讓るであらう。我等が主張の勝利を得べき理由はこゝだ。撤廢された權力の網は、自然の法則に依つて、直ちに新手の掌握に歸するであらう。何となれば、民衆の盲目力



は、一日と雖も、首領を戴かずに居ないからだ。斯くして新勢力は、自由主義の爲めに弱められた舊政府に代はるだけである。

我等の時代に於て、黄金の権力は、自由主義の支配に取つて代はつた。曾ては信仰の支配した時代もあつた。然も自由の觀念は何人も其の適用範囲を知らないから、實現される機會はない。暫く民衆に自治を許して置け。其の政治は必ずや腐敗する。次いで来る者は、軋轢であり、不和であり、階級的争闘である。其の一結果は、國家の炎上となつて其の権力は灰燼に歸する。

國家は内部の混亂の爲めに絶命に近くか、若くは國內戦の結果として、外敵の前に屈するか、執れにせよ、必ずや絶望的のものとなる。國家は斯くして我等の掌中に歸する。資本の獨裁力は、既に全く我等の權内に在るのだから、我等は其の國家に一筋の藁を差出すことができる。國家はいやいやながらも、其の藁に縋るであらう。何となれば國家はそれでない、奈落の底に陥るからだ。(譯者曰く、一筋の藁を差出すとは政府に金を貸すことである。)

若し自由主義に傾いた人が、此の如き推論を不道德と看做すならば、其の人に對して左の問題を提出したい。若し總ての國家が外敵と内敵との二大敵を持つとすれば、其の外敵に對して如何なる手段を取るも可也とすれば即ち其の防禦と攻撃との計畫を全く外敵に知らしめ

ず<sup>ナ</sup>に置くことも、不意に乗じて夜襲を試むることも、不權衡の大力を以て之に臨むことも、全く不道德でないとするれば、外敵よりも危険な内敵に對して同一の手段を取ることが、何故、不道德である乎。即ち公共の秩序を紊り、社會の安寧を妨ぐる者に對して類似の壓力を用ふることは、何故、不道德である乎。

道理ある説得を以て、群衆を有効に指導することは、健全な論理的精神の能くする所であらう乎。若し其の推論に、反對説を試むるの餘地があつたならば、如何に不法にせよ、其の反對説は、却つて群衆の低級な性情に投じないであらう乎。淺薄な情熱と、迷信と、慣習と、傳統と、主感的な理論とに指導される群衆及び群衆の人間は、容易に黨派的に分裂するものであり、其の説明の調和點が如何に完全な論理的基礎に立脚する場合でも輒く之を無視するものである。暴徒の決議は、總て偶然的か豫定的かの多數に本づくものだ。彼等は政治の秘義に通じて居ないから、其の不法の決議を以て、政治に擾亂の種子を運ぶのである。

政治は道德に、何等の交渉を持たない。道德に支配される統治者は政治家ではないのだから、永く其の王位に處る事はできない。統治の必要條件を成すものは、狡猾と偽善だ。一般人の大なる品性——正直と忠實——は、政治に於ける根本的害惡だ。是等の品性は、最強の敵よりも、有効且つ精確に其の統治者を誤らせる。是等の品性は、之を奴等(ゴイス)の統



治に一任すべきだ。我等猶太人は、決して是等のものに指導されてはならぬ。

我等の権利は暴力に本づく。「権利」は一個の抽象概念だ。此の概念は証明を缺いて居る。此の言葉は、單に左の意味を含むだけである。「我は爾よりも力の強いことが確かだから、我が望むものを我に與へよ。」

権利は何處で始まる乎。権利は何處で終る乎。

其の組織の不完全な政府を持つ國家に於て、其の絶えず増加する自由的権利の集積の爲めに法律と統治者とが其の意義を喪失して其の尊嚴を損傷する國家に於て、余は新なる一権利の成立を見る。即ち一切の現存の組織と制度とを破壊する力の権利、其の法律を自家の手裡に收むる力の権利、其の自由主義の爲めに自ら好むで其の権利を我等に譲渡した者を支配する力の権利はそれである。

總ての統治力の現在の動搖と共に、我等の権力は益々不可抗のものとなるであらう。何となれば、我等の権力は、如何なる詭計も之を覆へすことのできぬやうな強大な根據を据えたるまで、決して表面に現はれないからだ。

我等が、今、採用せざるを得ない一時的の不正手段から、確乎たる政府の成立と云ふ善事を生ずるであらう。此の政府は現に自由主義の爲めに動搖して居る人民の生存機關を正式に

恢復するであらう。目的は手段を是認させる。

我等の企業の遂行の爲めに、注意を要することは、善事でも道義でもなくて、必要と實用だ。我等の眼前には、其の戰略の順序を示した一定の圖取りがある。若し此の順序を誤つたならば、我等の事業は、數世紀の努力を無効にするかも知れない。

群衆の卑陋性と、優柔性と、氣紛れ性とは、我等の企畫の遂行の爲めに、特に考慮する必要がある。群衆は、其の生存と其の安寧との條件を承認し尊敬する能力を缺いて居る。群衆の能力は、盲目的、非道理的、無分別的、或時は右に、或時は左に傾くものだ。此の事實は深く牢記を要する。

盲者が盲者を指導する結果は、彼等が奈落の底に陥るだけのことだ。されば、群衆の各員、人民中の成り上り者が如何に非凡の能力を具へて居ればとて、政治の理會を持たないから、群衆の首領として、全國民を誤らずに、前面に進むことはできない。其の幼時から支配者としての教育を受けた人物だけが、政治の字を以て綴られた章句を解することができる。

民衆を其の好むが儘に一任せよ、即ち民衆の間からの成り上がり者の指導に民衆を一任せよ。彼等は對名譽と對權力との競争の爲めに、且つ其の競争からの混亂の爲めに發生する黨派内の不和に依つて、必ず自ら破滅するに至る。靜肅に、軋轢をせず、公平に一國の政務を



批判して、個人の利害と絶縁するが如き態度に、之を處置することは、果して民衆の能くする所であらう乎。彼等は外敵に對して自らを守ることが出来るであらう乎。其の不可能は、言ふまでもない。何となれば、其の面の如く異つた彼等の心は固より一定の計畫に纏らう筈がないからだ。

單に獨裁者の計畫だけが、政務の機關の各部を適當な按排あんぱいを施すを得る。此の點から左の結論が可能となる。曰く、一國民の爲めに最も有効な政府は、責任ある一人の手に集中せらるべきである、と。群衆は統治力を缺いて居る。統治の任に膺る者は、其の何人であるに拘らず、必ず首領であるのだから、絶對的専制を離れて文明は成立しない。野蠻的群衆は、如何なる場合にも、其の野蠻性やばんせいを發揮する。群衆が自由を得た瞬間は、直ちに無政府状態の成立となるが、其の無政府状態は、即ち是れ野蠻の最高點でないか。

暴飲の自由を許されて居るが爲めにアルコールに浸り、ワインに酩酊めいていする。あの動物等を見よ。我等は、到底、我等の人民を此の状態に置くことはできない。奴等ゴイスは強度の酒に浸つて居る。其の少年子弟は、古典古語の過度の勉強の爲めに、發狂を強ひられて居る。其の上、彼等は我等の手代——富豪の家に勤めて居る家庭教師、従者、保姆其他に依つて、及び奴等ゴイスの享樂場に居る我が婦人の爲めに、早くから惡習に誘はれる。

余は此の婦人の中に、自ら好むで淫蕩放縱いんたうほうじゆうの生活を送つて居る、所謂「社交婦人」をも數へる。

權力と偽善とは、我等の標語である。獨り權力だけ、能く政治に於て勝利を得る。此の權力が政治家に必要な能力に潜むとき殊に勝利を得る。其の權力把持はぢの爲めに、暴行脅迫は、根本原則でなくてはならず、偽善と惡竦あくしゆくは、目的の善に到達する唯一の手段でなくてはならぬ。此の理由に於て、賄賂、詐欺、裏切りなどは、我等の目的を資くる場合に於て、之を怠るべきでない。政治の世界に於て、無遠慮に他人の財産を掠奪することが、服従を強要して權力を把持するに適するならば、努めて之を爲すべきである。

平和的征服の線路に沿うて進行する我等の政府は、戰爭の慘禍さいなに代ふるにそれ程目につかず、それよりも有効な實行を以てするの権利を持つ。此の方法は、人民を戰慄させて盲従を誘ふに必要である。暴力と偽善との順序書に依ることは、利得上の必要許りでなく、一個の義務でもあり、勝利の條件でもある。

打算に立脚する一教理は、其の教理の手段と同じく有効である。我等は其の手段に依つて及び其の教理の苛刻かつかくに依つて、勝利を博するであらう。而して我等は我等の超政府の下に、一切の政府を從屬させるに至るであらう。



昔に於てさへ、我等は「自由、平等、友愛」の言葉を、人民の間に聲高く叫びだ。此等の言葉は、此の餌に釣られて四方から群つた無意識の鸚鵡共に依つて、それ以來、幾度となく繰り返へされた。その爲めに以前は暴徒の壓迫から十分に保障されて居た世界の繁榮と個人の眞の自由とは消滅した。外見伶俐さうな奴ッ等は是等の言葉のシムボリズムの辨別ができなかつた。彼等は是等の言葉間の關係の撞着を認めなかつた。彼等は、本來、平等の有り得べきでないことに氣がつかなかつた。自然は脳髓と、性格と、才能との不平等を確立して居る。不平等は自由の法則に基いた事實である。群衆の力が盲目であることも、群衆から成り上がつた首領が政治に於て群衆と同様の盲目であることも、彼等は推理しなかつた。之に反して傳授を得た者は、愚なる者も、尙ほ統治の任を果すことができる。傳授を得ない者は、天才者にせよ、政治に於ては門外漢だ。是等の事實は、奴ッ等の爲めに悉く無視されて居る。王朝的政府は、左の事實の上に立つて居た。曰く、父は政務の進行に關する知識を其の子に傳へるが、其の王朝以外の何人も其の知識を持つことはできなく、隨つて何人も其の秘密を被治者たる人民に示すことができなかつた。時代の進行と共に、政務に關する其の知識を一代子相傳的に繼承されると云ふ王朝の意義は喪失した。斯くして我等の主張の成功を資けるのだ。

此の「自由、平等、友愛」の言葉は、世界の各部に於て喜びで我等の旗を翻へす所の我等が盲目の代理人に依つて、全軍勢を我等の味方に引き入れて呉れた。同時に是等の言葉は、奴ッ等の社會の繁榮と團結とを破壊して、其の政府の根柢を覆へす所のシャクトリ虫の作用を見せた。此の事實が遂に我等の勝利を助くるに至ることは、諸君の理會に上るであらう。何となれば此の事實も亦他の多くの事實と共に、特權の廢止と云ふトランプの切札を我等に掴むの機會を偶然にも與へたからだ。而もこの特權は、我等に對する、諸國民の唯一の保障たる、奴ッ等の貴族政治の眞の基礎であつたのだ。

奴ッ等の自然的で世襲的な、貴族政治の廢墟の上に、我等は我が教育ある階級の貴族政治即黄金の貴族政治を、建立した。我等は此の新貴族政治を、我等を支配する財富の資格の上に及び、我等の學者の指導する學問の資格の上に確立した。

我等は、我等と分離であつた人民との結合に依て、人の最敏の琴線たる、物質的諸慾求に觸れて來たのだから、勝利は比較的容易であつた。是等の人間の弱點は、一つ一つに觀れば、各々人民の發起力を減殺した其意思を、其活動の買主の自由に一任させるものだ。

自由の抽象的概念は、我等の爲に、政府は單に一國の所有主たる人民に對して、其管理の任を果すだけのもの、其管理人は、一對の古手袋を同じく自由に取換へるに足る者として、



群衆を納得させることを可能にした。

一國の代表者を取り換えることのできると云ふ事實は、其代表者を我等の目的の爲に造られた物體のやうに、我等の權力を以て自由にさせる。

此第一「プロトコール」は、蓋し根本原則であるので、これが分りさへすれば、其全體は大要察知し得らるので、先これ位にて引用をやめやうと思ふ。誠に可恐悪性を有するものと外考へられない。

之を要するに其結論にも明示する如く、猶太人の陰謀は、今や世界的事實で、此の點に問題はない。問題は猶太人の陰謀が、果して彼等の期待の如く、成功するか否かである。西洋人の性格には、非常な缺陷があり、其生活には多くの弱點がある。猶太人は、實に能く此呼吸に通じて居る。彼等が、西洋人の社會に於て、隨處に成功するのには、多くの理由があると云ふもの、此點も亦少からず與つて居る。此の西洋人の弱點を、模範として仰ぎ、規準として遵奉すること、殆んど其の文明の根本條件と心得て居る。今の日本人、及び近年の日本政府も亦、西洋の社會と同一の危機を孕んで居ると云ふことができる。然しながら、獨り猶太人だけが、神の選民として其特寵を蒙るの資格を持つが、他の民族は犬畜生と同様、そんなものに對しては、仁義道德を顧るの必要がないといふ様な、惡魔的主張に、永久的成功の機會あることは、信じ得られな

い。猶太人の侵略は、金と宣傳とから生ずるのだ。其侵略法に對して、自ら守るの道も、亦左の二つの線路に沿ふべきである。曰く財政上の眞の自由獨立、曰く思想上の眞の自由獨立で猶太人の問題を疎略に附するものは、固より自ら知らざる亂臣賊子の一種であるが、猶太人を、神の選民と號して、其前に懼伏することだけを知るものは、正氣の沙汰でない。其天才の割合に多きに於て、猶太人が神の選民と云へるならば、これと同時に其犯罪者の多いこと、發狂者の多いこと、貧民の多い事に於て、猶太人は社會の賤民とも云へるであらう。何は兎もあれ、國家統治の様式は、是非とも我日本の如くなるのが、最後最善の目的で、今日に於ける歐米の主張たる民主々義其他平等博愛思想の如きは、蓋し一時の善處の方便に過ぎぬは明瞭なことである。

茲に一寸思ひ出せるまゝ、一言加へて置くのであるが、露國皇室は、日露戰爭以降、自然の結果ともいふべき状態に於て、覆没されて仕舞ふたのであるが、其以前より、猶太人に對する壓迫が露骨に實行せられ、「イワン」四世の如きは、甚しく猶太人を虐遇し、「三分一は追放し、三分一は改宗し、三分一は水に投るべし」との宣告を發したのである。「ニコラス」一世時代にも、宗教的壓迫を加へて基督教に改宗せしめ、「アレキサンダー」二世の時代に至り、少しく緩和されたのであるが、同三世及「ニコラス」二世時代に入り、又々峻烈極まる有様となつたので、多くの猶太人は、其虐待に堪ることが出來ず、自由の天地を米國に求めて移住したのであるが、こ



の猶太移住民が、帝制露國に復讐として、日本帝國に同情したのであるといふことである。そこで、日露戦争の當時、日本に金融其他の援助をして抗露の姿勢をとり、又露西亞の内部よりは、革命の直接行動を企て、彼の有名な明石中佐が、瑞典にかくれて猶太人と連絡をとり、露國の國內革命に成功したのである。又猶太人が米國に在て如何に反露的態度を取つたかは、「ポーツマス」媾和會議の時、露國大使「ウイッテ」の回顧録にも見る通である。又「タフト」大統領時代に、猶太財閥の巨頭が、米露通商條約廢棄を強要し、之を實行せしめたのであるが、かくて虎視眈々たる猶太人は、千九百〇五年以來、着々破壊工事に係りて其手を弛めず、歐洲戦争の開始されたる頃、露國帝制に對して火蓋を切り、首相「リポフ」は退敗し、「ケレンスキ」假政府となり、一九一七年三月「ニコラス」二世は、「ローマノフ」三百年の帝位を捨て、彼の悲惨なる歴史をとめて滅亡したので、日露戦争の際我高橋是清の相談に應じ、日本を援けた米國の金權王の支配人たる、猶太人「マコブ・シツプ」の深意も、反露運動の結果なりとも察せられるのである。

されど、猶太民族の大不幸とも稱すべきは、其の主張は兎も角、これに伴ふ文明の性質は、全然功利主義、即ち利害關係で、これを物質的に自己的に判斷するのは、根本思想として何等の報恩思想をも感得せぬので、要するに、歐洲普通の文明として、亞細亞文明をも、全面的に吸収せ

ざる底の不完全なる精神文明に支配せらるゝの結果、自由、平等、友愛と一時的快樂との餌となりつゝ、何等相互の報恩的精神を存せざるの結果を見るに至つたのである。併しながら、彼等の第一の精神的結合としては、神恩に對する猛烈なる感謝の念にあるので、此點だけは、世界の全民族に超越したる美點を有するのであるが、如何せん、人類間に於ける、報恩の觀念に乏しく、君臣間の感恩觀念の如きは、歴史上革命を有するの原因ともなり、結果ともなり、要するに因果の關係を相成するに至つたので、この點に就ては、絶対に我日本民族の精神的基本とは相違して居るのである。之を要するに、猶太人の思想としては、革命の事實を免るべからず。革命の事實にして免れざる以上は、有史以來の歴史も、猶太人の二千年の苦慘も、之を避くるに由なきを致したのである。

吾輩は深き同情を亡國民として悲惨なる歴史を繰返す、猶太民族に注ぎ、我日本の如き、革命なき統治様式を理想とし、君臣も、父子も、兄弟も、人類全體も皆同一の道徳を基礎とし、國民及び民族の結合を無窮ならしむると同時に、君民の關係も、亦、萬世不易ならしむること、我日本民族及國民と、御皇統との關係の如き美風を、全世界に樹立せんことを望み、深き同情を猶太國民に澆ぐと同時に、其反省と自決とを翹望して己まざるものである。

果して然らば、如何にして、猶太人をして反省せしめ、自決的に正しき道に入らしむることが



出来るであらうか。勿論、これは一朝一夕の事ではなく、一時の善處主義の嘴を容るべき處でもなく五年や、十年や、二十年で好結果を挙げ得ることではないのである。併し吾輩は、二千年以上も全世界の民族と敵視して、悲惨なる生活を營みたる猶太人の現状に對して、同情に禁えぬので、如何にして、一時は成功の空氣に觸れて歡ぶも、如何に彼等は一時眼前に好結果を擧げて、其野望を貫徹するも、其根幹に於て、人類の履むべきことにあらざる以上は、良心の奥底に悲惨味を感じるの苦境に陥るに至ること無論であると信ずるので、吾輩は、猶太人の道義的缺陷に對し、第一に注意すべき要點を掲げ、これを以て猶太人の反省を求むるが、正しい道であると信ずるのである。

右の缺點は、決して獨り猶太人にのみ存するのではない、露骨にこれを述べれば、世界中に、其缺點の最小にして、人類に對する重要道德の根本として、人類に教ゆべき道義ある祖先を有するものは、假令個人的には不完全とは謂ひながらも、獨り日本民族と日本國民とのみで、それを簡單に説明すれば、感恩觀念其物の濃淡と其普及の深淺であるので、獨り一般に忘恩の行爲を賤視するのみならず、感恩の思想を重視すべしとの信念を確信するに至らしむることが第一である。

何は兎もあれ、國民の思想を確立し、永久に其の動搖なきを期せんが爲には、一時的善處法に依り、理智的に注入したる學識の影響に信頼して、安心する譯には行かぬ。必ずや根柢深き教育によらなければならぬ。而かも、根柢深き教育に依り久しき星霜を経て獲得したる觀念を本とし、最も鞏固なる信念を以て、之を不變不動の域に進めねばならぬのである。元來教育其物には二種の區別があるので、簡單にこれを説明すれば、人的と物的の二種に、區別することを得るのである。他の方面より更に簡單にこれを述べれば、人道に對する人其人の修養を目的とし、公正なる而かも情合の深き人格者を養成するのが人的教育で、物質其物に對する學識と、其の應用の結果を大ならしむべき教育を、物的教育と區分すれば、容易に其意義を判別し得るであらうと思はるのであるが、大體より之を觀察すれば、人的教育によりて養成したる智識に、情操の發動を促がし情操に關する純正なる批判を加へ、其間に於て、自然的に發生する感謝の念を本とし、先第一に、人の人たる道を悟らしめねばならぬ。明治十九年十月に於ける 明治天皇、帝國大學行幸の聖諭記に、

大學今見る所の如くなれば此中より、眞成の人物を育成するは決して得難きなり。君臣の道も、國體の重きも、頭腦に之なき人物、日本國中に充滿しても、此を以て日本帝國大學とは云ふべからざるなり。

と仰せられたるを明記しあるが如きも、深く考ふべき次第であるので、物的教育のみにては何人



と雖我日本の大道を悟り得ざるべきは、明白なること、謂はなければならぬ。

(日本人の感恩觀念。)

今此處に、我輩の偶然に想起したる所感を述べれば、我輩が少年時代の頃、故郷に於て體驗したる事で、誠に他愛もない事ではあるが、これが即ち人類道德の根源であらうと信ずるので、今茲に忌憚なく、これを述べようと思ふのである。

我輩が十二三歳の頃、小學校の先生に連れられて、或る旅館に耶蘇教舊派の宣教師を尋ねて、教を請ふたことがあるが、其時其牧師先生が、自分の書かれた「パンフレット」の様なものや與へられ、神恩の絶對にして難有さを説き、日本に於ては、唯祖先と父母とに感謝の心を盡し、「天地間唯一の神様の絶大なる御恩」を輕視するは宜しくない。日本でも、神様や佛様を禮拜するは結構であるが、兎も角、全世界と、萬物と、人類と總ての生物を造られた、造物主たる唯一の神様を難有く思ふ念慮の淺いのは決して宜しくない。何を捨て、も先第一に、世界に唯一なる神様の御恩を感謝せねばならぬといふて、懇切に教へて下さつたのである。吾輩はそれを聽て深く感動したのであるが、生意氣にもこゝろ質問をしたのであつた。

私達も、神様を難有く拜しますが、それよりも、天子様や、御先祖様や、父母や、先生達の御恩を忘れてはなりません。どなたでも、御恩關係を遺れてはなりません。從て御國の恩を忘

れる譯には参りません。神様を難有思ふても、是れは其次のこととせう。神様の御欣びになることは、人間の道を盡すことであります。それは神様に對する一番大切なことであると、先生から教へられて居ります。父母は私を此世の人として作つて下さいました。そうして、先第一に私達を此世に出して、立派なものにして下さる御方の御恩を忘れてはなりません。今も云ふ通り、父母は私を作つて此世に出して下さいました。此御恩は、どうしても忘れる譯には参りません。先生からも、常に教へて戴きました。御恩と云ふものは、決して忘れてはなりません。御恩の爲には命を捨て、御禮を申さなければなりません。あなたの仰せらるゝ神様は、私ガもし立派な人になつて報恩の道を盡くせば、それで欣で下さるでしょう。見えもしないのに、御辭儀するなどはどうですか。

そうしたら宣教師さんは、「尤もです。併しあなたの父母があなたを造つたのでありません、あなたを造つて下さつたのは神様です。これを父母と考るのは、考へが足りない爲です」と答へられた。そこで私は「ソウデスカ」と云つて冷笑したら、宣教師は私に對し、「御母さんに聞て御覽なさい。私の髪の毛は何本ありますかと聞て御覽なさい。御母さんは、「知らないよ」と仰るでしょう。一生懸命になつてあなたを造つて下さつたなら、「キット」骨が何本か、髪の毛は何本位のか、御承知の筈です。御自分の作つたものでないから、御承知ないが、神様に伺つた



なら、屹度教へて下さいませ。」といふので、私は可笑さに堪えず、此宣教師は何といふことをいふのだと思ふたので、開き直つて宣教師の呉れた「パンフレット」を突き出して、「此の本には何千字書いてありますか。アナタの一生懸命に御書きになつた本ですから御承知でしやう」と言ふて突き出したら、流石の宣教師も「ビックリ」して一言もなく黙然つて仕舞ふた。さうしたら學校の先生が私を叱つて、「ソナナ無禮な事を言ふものでない」と仰つて、宣教師に謝して其儘辭し去つた後に、「長者に對しては敬意を拂はねばならぬ。あんな無禮なことを云ふてはならぬ」と仰つて色々訓戒されましたことがある。吾輩は實に生意義至極なことで、先生から愼む様訓へられましたことは、今でも忘れられぬのである。あれより後、終始氣にかゝり、幾分か生意義を愼みましたが、西洋人や、耶蘇教の人はあんなものかと思ふと同時に、日本文明の、感恩に對する奥床しき觀念を意識すると共に、強くも我日本の空論に走らず、人類間の道德に徹底するを難有く思ふ様になつたのである。當時の淺薄なる觀察を以て、今日を推すのは如何にも耻かしき事ではあるが、この幼少時のつまらない感想が、終始吾輩の觀念に寫るのは、自ら顧みて痛切に感ずるのである。誠に愧かしいことではあるが、當時でも難有いといふことを知つて居たのは、我日本祖先以來の大教の御恩であると、深く信ずるのである。

何は兎もあれ、耶蘇信徒の感恩觀念は神に對しては相當に濃厚なるも、人類間に於ける觀念は、自利的、物質慾思想に制せられ、其情想的感恩連絡には極めて冷淡である。これは獨り、耶蘇教のみならず、(猶太教では「メシヤ」の遵仰觀念は可驚程濃厚なるも)回教と雖も、人類相互の道德的關係としては、感恩の影響至て薄弱であるので、宗教と道德との間に密接なる關係を附するものは、人道上、相當に感恩觀念の作用の、強弱と濃淡によるのである。然るに獨り宗教として超越したる妙趣を有する、日本民族の尊信する神道に於ては、其基源を人類間に置き、造物者の思想を介入せしめ、天地萬物の創造者を人類に對する考察と獨立に考察し、(もしも正しく徹底したる意見ありて、天地人三者の創造者が、明白とならば欣で是に従ふに猶豫せざるも)人類間に於ける敬神崇祖の念を基準とし、感恩の至情と連絡して人道を構成し、萬事これによりて考察するの所信に基き、我等の踏むべき道を求むるのが、人道の本義であると信ずるのである。

そこで我輩は、感恩の二字に人類道德の根本が含有するので、この情操の結合なくしては、眞の道德とは謂へぬ。従て感恩の意義を正解する所に、人類の眞正なる道德なるものが存在するので、此意義を完全に現實せしむるものは、獨り日本道德のみである。支那の哲學も、印度の宗教も、古今を通ずる歐米各種の哲學も、悉く正しくこれに合致せず、たゞこれと一致するのは、假令人類間の社會的事業としては、成功とは謂ひ難きも、萬世不變の聖人として、崇拜すべき



は、支那の孔子と、印度の釋迦とあるのみであると、吾輩は信ずるのである。而かもこれを學びたる學徒は、僅かに少數者の外、遺憾ながら其真髓を捕捉し兼ねたので、斷じて人類以外に神の存在を認めず、たゞ僅に理想的神佛の活動を、人類以外に認識し、これを敬視するを忘れず、時間空間の判断を藐視せずして、萬事を行ふ基本とし、感恩の連結を人道の根本として、實行すべからざると信ずるは、吾輩も同様である。そこで吾輩は信ずる。感恩の二字は、人類道德の根柢で、この情操の結合なくしては、本當の道德とはいへぬ。従て感恩の意義を正解する所に、人類の道德が存在するので、此意義を完全に現實せしむるものは、獨り日本人道のみであると吾輩は信ずる。

要するに、真正なる人道は、其最後としては、矢張日本の神道に歸らざるを得ぬのである。従て日本の神道は、これを宗教的に見るも、感恩の熱情を以て神の存在を味ひ、其心持を敷延して、人類其他に及ぼすによりて始めて悟り得らるゝのである。然るに、前にも述べたる如く、猶太教檢討の權威者の述ぶる所によれば、猶太教は政教一致の建前となつて居るので、之を佛教とか、神道とかいふ所謂宗教と同列に観ることが出来ないのである。信仰道德は無論のこと、法律も政治も、猶太教の内容を成して居るのである。信仰や道德のやうな、内的なものと、政治や法律のやうな外的なものとは、ともに猶太教の内容を成して居るのであるから、所謂猶太教を解釋

する上に於ても、その重點の置き方に依つて、流派を生ずるのは、已むを得ないのである。猶太教徒の間には、傳統を重んずる保守派と、政治的活動に中心を認める革新派と、この中間の折衷派の區別があるやうであるが、之を一貫するものは、彼等の所謂選民主義であり、猶太民族だけが上帝の特寵を受けて居るといふ獨尊思想である。是等の點の研究は、眞に公平に猶太人問題を理解せんとするには、到底怠ることが出来ないものである。もしも猶太を論じてこゝに至らざれば、其の深意に徹底する譯には至らぬと斷言し得るであらう。併し其根本の所見に相違あるのは勿論、深く尊重する丈の價値はなからうと思ふ。何に致せ、政治的色彩を帯びたりとして猶太教を見るも、宗教的色彩の點よりこれを見るも、其の根本義に差異あるが如きは論外のことである。此兩者は、凡そ如何なる方面よりこれを見るも、相扞拮して容れざる所あるが如きは、必ずや、其いづれかに於て、若くは其雙方に於て、正しからざる、若くは穩かならざる、未徹底的色彩ありて、人道たるの價値なきは無論である。



## 第九章 回教其他に關する所見の概要

吾輩の如き宗教に關する修養の足らざる身を以て、如此ことを云爲するは、誠に愧かしき次第ではあるが、耻を忍んで先輩各位の叱正を請はんが爲に、茲に極めて露骨なる愚見を述べれば、凡そ人類の世間に在りて踏むべき道は、各人の胸中に隅出、若くは醸成する私慾を取り去り、假令、全然個人的に、これを徹去し能ざるものにもせよ、他人及他生類に對し、出來得る丈け、放肆なる自己の慾望を捨て、更に進んで感恩報謝の念を以て之に對し、其間に純正にして眞率なる人道を發見し一生懸命にこれを履行せんとするにあるので、平生の修養により、これを實行に顯はすを望まねばならぬが、それと同時に、慈愛の心に加ふるに尊敬の觀念を以てし、如何なる場合に於ても敬愛の二字を遺るゝが如きことがあつてはならぬ。再三こんなことを言ふは耻かしいことではあるが、前章にも述べたる如く、某牧師に對し小學をも卒らざる少年の身をも忘れて、反抗したる事實の如きは、誠に愧かしき次第で、あの當時先生より無禮をいふなといふて、叱らるゝと同時に、長者に對し彼の如き舉動に出るは敬意を失するが故に、慎むべき大切の事なりとして訓へられた如きは、誠に以て注意すべきことであつたのである。何に致せ、右に述べたることは、人道上最も注意すべきことで、常に是等の點を遺れざることが何よりも大切であると信ずる

と同時に、右の意味を土臺として考れば、自ら左の如き判断を生ぜずには居られぬのである。凡そ世界に現在する宗教の多くは、超世の聖賢が、理念的に啓開せられたる、對神觀念の信仰と、それに對する感謝の念の表現を主とするので、人類相互の關係より、自然的に發生する讚仰感謝の意識的發動の結果を加ふること、全然これなしと云ふにはあらざるにもせよ、純理的神佛を主體と推定するを本義とし、人類間の正しき道を確守し、感謝と報恩との念を鞏固ならしむべき、精神的文明を遵奉恪守し、其の統制の下に、確然たる人道に對する判断を行ひ、積極的に之を保存し、之を維持するの熱意により、斷じて宗教上の本意に背かざると思念してあるので、一言に之を言へば、信仰の綱を以て自分と神佛とを結合するのが宗教であると信ずるのであるが、先第一に、舊約全書所載の如きは、主として個人主義の功利的文明を偏重し、東亞文明の根本たる道義に關する觀念を藐視し、人類生活上の慾望と、物質的繁榮と、功利的成功を主目的とし、其幸福を競争裡的に獲得するの觀念を主とするもので、人生の陋劣なる物質的慾望に捉はれて、飽くことを知らざるの甚きをすら愧ぢざる意味を含むのである。従て歴史上基督教の舊新兩派は勿論、歴史上殆んど仇敵の觀ある猶太教の如きも、其大體に於て、理想的唯一神を讚仰するのみ。絶對に唯一以外の神性を認めぬので、歴史上の祖先たる而かも至聖至賢なる恩人と、英雋なる先輩多數を尊崇して、これを神として奉仕するが如きは、思も寄らざる所なりと思ふのである。



人類に對する猶太人の觀念的關係は、既に前章に於て大要これを述べたので、今茲に歐洲文明に伴ふ宗教を述べるの必要なく、最後の言として（これまでの拙著に數々之を論じたるにもせよ）儒教及佛敎の梗概を述べ、歐洲文化の哲學的方面にもいくらか觸接して見やうと思ふのであるが、其間に於て、世界的三大宗教の一として有力なる回教に關し、何等の記述なきは何となく淋しき感を覺るので、今茲に少くこれに觸れて見やうかと思ふのである。

方今に於ける各國々民と、各民族の特異なる行動中、注意を要すべきものは、各國の利害に關する世界の動靜と、國際的運動とであるが、是實に最も留意すべき重要事に相違ないのである。世界人類の道德問題に對しては、尙更に之を重視するの要ありと信するのであるが、是實に吾輩の猶太問題を提起し、これを討究したる所以である。要するに猶太に關することは目下急要の問題で最も巧みに善處すべき問題として考る丈の價値ありと思はるのであるが、他の一方に於て、素晴らしき活動をなさんとしつゝあるのは、實に回教其物であるが、回教の驚くべき擴張を示しつゝあるのは、實に近年のことで、世界戦争以來特に著しく、今正に猛烈なる運動をなしつゝあるも、其實際に於ては、是れを宗教運動と謂はんよりも、寧ろ政治的色彩を多分に含める、社會運動として見なければならんと思はるのである。猶太人問題の如きは、猶太人間には、他宗と相容れざる猶太教ありて、堅き信仰を受くるも、劃然と他の宗教と分離したる色彩を

有せる、宗教的觀念を有するので、回教とは斷然類似視する譯には行かぬのである。

既に前にも論じたる如く、猶太人は、同民族間に於て正反對の思想裡にありて、其行動をなしつゝあるも、其底意は同様であるが如く其本幹としては、民族問題に重大なる關心を有し、其人類統治に關する理想的所見に於ては、全然我等の民族とも相一致し得るので、萬世一系にして不滅なる最高主宰者を戴くにあらざれば、世界人類の平和と幸福を得難きを確信し、既に其民族的主張として是を言明するに關せず、同民族間に於ける、他の一方に於て極端なる民主主義を基礎として、共產黨の廓大を唱へて、世界の紛亂を企てつゝあるのは、宛も功利的なる政治、外交、經濟に魅せられたる、他の諸強國がこれと反對の事實を提供しつゝあると同様である。従て吾輩は、回教を我等の宗教として取扱ふが如きは固より望まざる所で、寧ろ宗教を超越せんとし、いそしみつゝある未成の宗教の一なりとして、是を見るのである。

果して然らば、世の所謂回教なるものは、如何なるものであらうか。

回教の教祖「マホメット」が、其姿を「アラビヤ」に現はせし頃は、各民族其所信の信仰を説き、「サバ」とか、「マジ」とか、猶太教とか、印度教とか、基督教とかの諸宗教が、入亂れて信仰界を混亂せしめつゝあつたのであるが、其中には、偶像崇拜教に屬したのもあつたので、此時「マホメット」は、出づれば没し、生ずれば滅するは、これ萬物の常である。生者必滅、會



者常難は、萬物天然の常性である。偶像を拜し、神として偉人を崇ひ、而して又、日月星辰を祀るが如きは、天地自然の眞理に反せりと極言して之を排し、住所なく、形像なく、終始なく、唯人間の最大秘想を顯し、天地の萬能を具備し、常住不滅なる宇宙唯一の大靈こそ、唯一の神なりと主張しこれを根本義としたのであるが、人間「マホメット」の幼時を知りたる同郷の人士は、其國神を侮辱し、國教を誹謗するを憤り、「マホメット」に對する嘲笑罵詈は、迫害と暴行に變じ、危難の身に迫ること數々なるに至つたのである。されど、「マホメット」の信念は彌々堅く、愛妻「カヂエ」を第一の信者となし、終に「イスラム」教（神意に服従するの意）を創立したのである。而かも「イスラム」即回教の基本教義としては、

- 一、宣 誓
- 二、祈禱禮拜
- 三、斷 食
- 四、巡 禮
- 五、喜 捨

の五條にして、先第一に宇宙には「アルラー」(唯一の神たる天神)の外に神なし、「マホメット」は「天神の道を傳ふる豫言者なり」との宣誓の言葉を生命となし、其後宗運に多少の興隆あり

しも、世界戦争と中亞復興の機運に乘じ、世界の各方面に涉り、三億七千萬の信徒を有するに至つたといふことである。しかも其の中最も顯著なる一事は一年に一月間の禁慾生活をなすことで、一齊に斷食一箇月に及ぶが如きは、驚異的事實ともいふべきことであると傳えらるゝのである。

回教信徒の概數は、「アラビヤ」、「トルコ」、「ミクリネシヤ」、東「アジャ」一帯、(埃及、「アフリカ」の東岸及「ベルシヤ」を加へたる)等であるが、以上回教國の外、滿洲の四百萬を初め支那全國に約七千萬、英領印度に七千萬、蘇聯に約二千五百萬、「マレー」及蘭領印度に六千萬、「ヒリッピン」に三百萬、北米に四百五十萬、中南米に五百萬と云ふことである。

今日に至るも、回教の世界的誤解を免れざることは、神の道を説く宗教が、左手に經典を捧げて、右手に利劍を掲げ、異教徒を攻伐するは宗教の根本義に反すといふことであるといふことであるが、如此判斷は論ずるまでもなき迷想で、何等介意するに足らぬが、而かも其の聖典「コーラン」に、

正義の筆を揮ふて斃れたる學者と、劍に斃れたる殉難者は、共に天國に上るべし。  
學者の墨汁は、忠死者の血液と等しく貴重なり。

世界は單に四大事項によつて支配せらる。曰く智識の習得、公正なる判決、善事の祈禱、大膽



なる勇氣これなり。

等の言葉もあると云ふことである。

乍去、事實の傳る處によれば、「マホメット」は一世の傑人には相違なきも、立派な道德の品行善良なる人格者とは謂ひ難いものである。其言行録によれば、

死者に侮辱を與る勿れ、敗者を追撃する勿れ、傷兵を斬る勿れ、掠奪を行ふ勿れ、斷じて婦女を辱しむる勿れ、犯すものは死刑に處すべし。

とあるのであるが左の言を顧みれば、果して言行一致の聖者と稱し得るであらうか。

苟も人間たるものは、現世に於ても、未來に於ても、一夫多妻の淫樂を享有すべきにあらざれども、貴重なる犠牲者乃至勝利者たる桂冠を有するものに限り、聖樂園に於て此歡樂を享くべし。

など、「コラン」に明言しあると傳ふるが如きも、其本意は兎も角、果して聖者の自誠として傳ふべきであらうか。

回教の教祖とはいへ、「マホメット」其人の事に就ては、今更に事々しくこれを批判したくはないので、人間としての素行其他に就ては、恐くこれが記載を中止しようと思ふのであるが、教祖「マホメット」の死に近づくと、

神よ。願くば我に現當二世拔苦與樂の榮えを下し賜へ。又地獄の苦難を受けざらしめ給へ。

と祈れりと傳るが如きは、果してこれを凡人以上の卓拔なる覺者と稱すべきであらうか。前にも述べた如く、教祖の經歷上、稀なる大偉人たりしは疑なきも、其實際の履歴によるも其操行の大要を察知することが出来る。併し、吾輩は此傳説を信ずるを好まぬと同時に、其反證を望みつつあるのである。要するに、回教は「マホメット」に依りて開かれたる一種の宗教には相違ないが、其宗教内には、一人の僧侶もなく、一の犠牲物をも須ひず、神と人との間には絶対に中介物を挿まざる一種の教義を守り、且其信念として、極端に偶像の介入を嫌惡すると傳へ、

神は一神なり。永遠に不滅なり。神は生じたるものにあらず、また生ぜしめられしものにもあらず。而かも神に等しきものは、宇宙間に求めて一もあることなし。

といふので斷然超人的存在であるといふのである。何に致せ、回教の一論者は、

予は一神を信ず、「マホメット」は神の教を傳るものなり、との信仰に生きるものなり。心内の神を、眼に見る偶像の爲に卑しめらるべきものにあらず。教祖を崇むるは、世間の人道を破壊するにあらず。今日に存する教祖の訓戒は人をして道理と宗教の圈内に満足せしむ。「アラ」の叫びは餘りの難有さに、教祖及其眷屬を神の如くに言ひ現はしたのである。「ベルシャ」の學者は、神が同宗の長老等の肉體を借りて住み給へりと言ひしも、これ等の迷執は取拂はれ



た。神の従者に對する生理上の問題、及び人生の自由に就き、基督教にも回教にも、議論の沸騰せることはあつたが、基督教は兎も角、回教としては、人情に逆らひ、社會の安寧を害せしことはなかつた。これ本宗に僧侶なく、從て政教の分立なかりし爲である。從て宗教に改革を加ふるの要なく、僧侶の野心も大望もなかりしは幸であつた。

との意味を明示したこともあるが、これ實に回教に對する批判とも稱すべきものであると吾輩は思考するのである。要するに回教は宗教として之を批判するよりも、寧ろ一種の道教としてこれを見るの適當なるを信するので、其宗教らしき行事は其基本教義として、祈禱と、禮拜と一年一回の禁慾生活と、斷食などを實行するに際し、信者の執るべき作法などを數ふるに過ぎぬのである。

元來、我日本の神道は、人道の極致とも謂ふべきもので、日本民族の道義的觀念、即ちそれである。此道義的觀念は、祖神によつて開かれたる國家其物を根本とするのが基礎であるから、日本國民としての觀念を度外視しては、これを考慮する譯には行かぬ。從て國家の存在と、獨自的に之を考ふるが如き思念は、假令これを想像するも、湧起しやうもないので、全然これを考慮に置くことが出来ないと同時に、國民としての思想を離れて、民族としての觀念を顯はさんとするが如きは、全然不可能である。個人と、一家と、社會と、國家を區別して、個々に之を判斷する

が如きは、夢想だも思ひ及ばざるのみならず、今一步進みて、人類的、世界的考察上より生ずる道義觀念の如きも亦同様で、唯其の深淺が教養の結果によりて等差を生ずるのみである。此の差異點は他の國民及民族と同一ならず。從て我日本國民及民族の思想としては、假令時により國民間の協合に異同の變化あるも、國家に革命を見るが如きは考も及ばざる處で、萬世一系の天皇（即統治者）を仰いで、何等變易の色なきも、亦同一心理の活動の結果である。そこで日本國民も日本民族も、全然其の成立を同うするので、此點は、我日本が未だ會て亡國（即易性革命）の悲みを體驗したることなき、至幸なる歴史を繼續し得たる、自然の結果である。從て其の道徳的觀念は、これを國家の成立より見るも、社會の組織より見るも、一家の存在より見るも、個人其物の上より見るも、全然同一で、實に我等日本人の祖先が、忠孝一致の大道を醸成し置かれたる、大慈大悲の賜で、日本人たる以上は、何人と雖、此點に疑をさし挿むものなきは無論である。此確信の下に、如何なる場合にも、臣民の組織の變易によりて一天萬乘の天皇を變ずるが如きことなく、又其臣民の變更せぬのに、其君主及統治者の系統が移動を見たるが如きと雖も絶對にこれなき原因ともなつたので、要するに、日本人の信ずる神は、人外の生産にあらずして、日本人の君たり祖先たるの實在であり、決して理想上の空漠なる存在ではないのである。右の如き原理は、支那に於ける五千年（三皇、五帝、堯、舜、禹、湯、文、武、黃帝以來）の昔より、如何



なる聖賢も、英雄も、未だ曾て思念せざりし所で、獨り孔子一人の憧憬として、其の主義を春秋に示せる如く見ゆるのみである。これ既に、吾輩の舊著にも數々明示せる所で、今更これを論ずる迄もないのである。また吾輩が古今第一の聖賢として尊敬する印度の釋迦は、これまた法華經に於て、右の意義を明示して居るのであるが、是も亦吾輩が既に幾度もこれを引用したので、今更茲にこれを論ずるには及ばぬと思ふのである。

何に致せ、諸君も御覽の如く、世界には國家的分立あるも、國家的平和と人類の康福にして維持し得る以上は、平和も其康福をも求め得るであらうか、或は假りに道義的觀念を以て一貫するも、理性と功利と眼前的表顯を満足せざれば、平和と康福とを求め得ること、正に今日の如くなるは、事實上自然の結果で、永遠に今日の狀態に苦むは已を得ざる事實となるであらうか。或は又、世界の人類をして、國家の組織なき民族的結合を是認せしめ、民族の世界的發展を歓迎せしめ、且其の民族にして優秀なる價値を有する以上は、これを尊敬して之を上位に仰ぎ、世界の平和と康福とを其の手中に置き、何事をも計畫實施せしむるときは、世界の平和と人類の康福を望み得べきであらうか。それともまた、人類の康福と平和とを維持する爲め、是非善惡の判斷をなすべし、法律的職務や、國交の紛糾より生ずる、平和の裁斷者たる軍人の職務や、平時に於ける國民の康福を平和的に維持するの職務を有する外交家を始め、凡そ總ての法律的、軍事的及外交的機

能を擧げて優秀なる人類の衆團に信頼すべきは、人類の従ふべき當然の原則なりと速斷し、これを一民族の專有と假想し、其民族を世界人類の首班として、これに委任するが如きは、果して如何であらうか。吾輩の信ずる所に據れば、是實に思も寄らざる妄想にして、猶太民族の迷想的信念の如きも、蓋し此種に屬する謬感思想の結果であらうと、吾輩は信するのである。何に致せ、一民族をして世界を支配せしめんとするが如きは、餘りにも專横なる一妄斷にして、其の思想習慣の同一ならざるに關せず、強てこれを行ふが如きは、一國の專肆横暴が人類の平和康福上、爪弾きすべき、霸道速進の結果として世界を統一しつゝ、暴政を行はんとするに同じく、決して歡迎すべき方法にあらざること無論である。

之を要するに、如何なる世界的問題にても、功利的に對立するものは、永遠の平和を康福とを人類に齎すこと、絶對的に不可能にして、假令一時はこれを実顯することあるにもせよ、これ實に全世界の人類に幸福を與ふる所以ではないのである。そこで今茲に考究すべき問題は、世界中に民族的の結合ありて其勢力を確立するも、法律的、經濟的、武力的には其統制を有せざるときは、別にこれが統制力を有する國家的組織ありて現在せざる以上は、たゞ單に、民族的存在の威力を以て之を統一し、全世界の平和と、全民族、全國民の康福を確かむるの能力なきは勿論である。然るに今世界の國家的分立上、道德的連絡あり、若しこれに加ふに、統制を以てし、進で



これを統一する國家的組織あるときは、宛然一國家の存在するが如く、明かに全人類の平和と、康福とを將來するの望あるは勿論であるは是亦何等の疑なき所である。

之を要するに全人類間に如何に民族的結合の事實ありて生ずるにもせよ、國家的組織を以て一貫せざる以上は、全人類の平和と康福を求むるに由なく、假令全世界に國家的分立あるにもせよ、道徳的關係を基準としての統一組織ありて、之が統治の道を講ずるときは、庶幾くは一致統合の實をあげつ、全人類の康福と、全世界の平和を擧ぐることを得べきである。而かも功利的一致のみを目的として、相對立するときは、永遠に平和と康福を促進するに由なきは無論である。此意義より推考すれば、猶太的理想統一は、當然失敗に終り、獨り我日本國の理想的統治の有望なるを證明し得べしと信ずるのであるが、兎にも角にも、國家と國家との間にも、國民と國民との間にも、道徳的と恩誼的との感謝生活を基本とするにあらざれば、平和と康福とを將來し得ざるは、勿論民族的結合にして國家組織を有せざる世界的結合は、世界統一の目的に適應せざるは勿論、到底世界の平和と、總人類の康福を望むべき資格を有せざるものと明めなければならぬので、此意味より推考すれば、猶太人の宿望たる、

猶太人の専制君主を奉戴する、全世界猶太國の未來に於ける建設。

などは、疑もなく一時の空想であらう。果して然らば人類の康福を催促しつ、世界の平和を維

持し、而かもなほ彼等の私望を満足せしむることは、果して出來得るであらうか。

吾輩の本著作に對する當初の目的としては、僭越ながら、我日本國の神道に關する私見を詳述し、世界唯一の人道は是れなり、これにあらざれば、世界の平和と人類の康福を促進するに由なきを確言せんと欲するにあつたのである。が、我日本國の神道には、徹底的説明者なく、常に神秘的境遇を去らず、其世間に傳る所の如きは、故らに細論に觸れずして、覃思悟入の域を需むるのである。從て古よりも傳ふる所の如く、我國は「言擧げせぬ國」として明晰に訓諭せられて居り、其時機の熟せんとするを俟たず、猥りに言論を弄するが如きは、最もこれを避くべき次第なりと感ずるが故に、詳細なる議論はこれを他日に譲り、近く到來すべき時運を待ち、暫く擱筆せんと欲するのである。

さりながら我國の神道に關し一事申述べ度ことあるは、吾輩の讀者諸君に對し、默過し難き所で、我國の神道には、世界各國に類例なき一種の特色ありて存することが、即それである。

凡そ世界古今の歴史を精査するも、神佛二者の共存する如き觀念を有するものは一國もなからふ。然るに我國の總ての家庭には、其の大小に關せず、殆んど、神棚と稱する靈域を有せざるなく、これと同時に佛壇と號する拜佛の場所を有せざるはないのである。神佛以外の拜壇を有するもの、例へば耶蘇教信徒の如きは、神棚や、佛壇や、自宗拜壇の共存を認容せざるが如き家庭も



あるであらうが、大體の觀察上、神棚は絶対に他の宗教を超越したる存在として、これを見るので、凡そ此特色は世界の何處にも見出し得ざる所であらう。之を要するに、我國の神道は、世界の何國にも存せざる超越宗教の意義あり。如何なる宗教とも對立の意義なく、また歴史的存在の人類を離れたる神なく、敬神崇祖の奥底に存する大意義に、何等の疎隔なく、敬神即ち崇祖の意義を有すること、孝即忠と、忠孝一致との關係の如くであるので、感恩の意義の凝結したる表現とも謂ふべき、人生思恩の現はれである。我國の歴史に於ても、國民間に十分の諒解なかりし、中古時代に於て、神佛相争ふの事實を貽せることあるも（神佛相争へるにあらず、神徒佛徒の思想の扞格せるなり。）如此きは、一時代の異例にして、永久の存在とは稱し難く、又時代の思想の急變に際しても、これに類する時例あること、明治維新後の如きありて存すとは謂へ、皆是我國として言ふに足らざる一時的迷想到過ぎぬのである。この間に尊き歴史を留めたるは、聖徳太子にして、假令一時の誤解はありたるにせよ、日本の特色たる神道と、外來の佛道との間に存する、相互關係の妙味を與へて、今日特種の色彩を生ぜしむる原因をなしたのは、實に殿下の賜ともいふべきである。

今茲に吾輩の意中を卒直に述べれば、右の如く我國の神道は、他の宗教に對し絶対超在の意義を有するのであるが、神道及佛敎の諸先輩が、もしも意に充たざる謬見なりとして、吾輩の意見を不快視せらるゝならば、何等の遠慮もなく教えて戴き度なのである。吾輩は誠實に、神道の如き、世界に比類なき超宗教的宗教の實在を我國に仰ぐを無上の光榮と信ずるので、我國の神道者が外來の宗教を排斥し、これを包容するの意思を缺くの嫌あるが如きは、これ實に我國に特有する大神道を悟らずして、一種の偏見に捉らるゝの致す所で、我國の神道は、他の宗教を超越し、而かもこれを包容する所に一種の妙味を存するのである。宗教問題に關する愚見は、右の所信を述べて一先之を終るのであるが、尙ほ此章に附掲したきことあるも小冊子に纏めて之を論ずるの至難なるを感ずるので、總ての點に於ける補缺の意味に於て、尙二三の愚見を述べようかとも覺ゆるのである。

吾輩も數々想起しつゝ、自省するのであるが、凡そ宇宙間の事物は縦に之を班列して判斷するか、之を横に頽別して判斷するかは二途に外ならぬので、若しも一方に偏して之を判斷するとき、動もすれば、不公平なる結論に到着して、自ら悟らざること多きは、蓋し免れざる所である。左れば哲學班別の要義は、時間と空間に關する考察を加ることであるが、時間と空間に對する平易なる觀察を以て、凡ての場合に満足なる判斷をなし得べしと確信し得るや否や、此意味より判斷すれば、世間には、凡眼を以て洞視し難き物體もあり、眼界の及ばざるが爲に、發見し難き事物もある如く、凡眼を以ては思索し難き問題の、眼前に横ること亦決して尠なからざるは、



疑もなき事實である。而かも東洋哲學に屬する諸賢哲の所論の如きは、其深奥なる意義の潤澤なるは驚くの外なく、之を西洋哲學の、羅馬及希臘等に於ける純理的に偏する哲人の所言と近代歐洲に於ける廣汎なる哲學に顧みるも、其の多岐にして殆んど究極する所を知らざるは驚くべき程である。

右の如く論じ來れば、如何に簡易なる問題も、考察の方向によりては、如何なる賢哲も説明を與へ難き、難問題となること多きは、蓋し明である。誠に多愛のなきことではあるが、吾輩の體驗したる一笑話に、吾輩の幼兒が、吾輩と入浴中、雷鳴を聞き、唐突にも「雷サンはナゼ鳴るの？」の奇問を發したので、吾輩は閉口したのである。雷鳴は如何にして生ずるかの問題ならば、物理學的に説明することも出来るが、「ナゼ」の奇問に答ふるの資格がないのである。これは蓋し如何なる人が、人文科學を以て之に對應するも、恐らく満足なる解答を與へ得ぬであらう。然らば自然科學的哲學を以て判斷を下すも、これと同様で、たゞ是れを一笑に附し去るの外はないであらう。果して然らば、それを適應なる材料として幼兒の訓戒となるべき理解を得せしめ得ざるやといふに、必ずや幾多の妙味を發見し得るは疑もなき所で、此處に情操的判斷を加ふるのは、人生の妙味ではなからうか。

これは獨り幼兒に對する場合のみならず、世間の甚源なる理義を、斷片的の簡單なる材料を以て説明し、世の所謂理外の理を以て、超理的意義に想到しつゝ、之を判斷する場合に於て、事實上適切なる解釋を得ること決して尠くはないので、この邊の玄理をも會得せず、たゞ「理屈一方の解釋を以て、凡ての場合に満足を求めんとするが如きは、實際上、殆んど何事の深遠なる説明をも加へ難き結果となるであらうが、世の中の萬事を科學的哲學にのみ判斷せしむること能はざるは勿論、或は宗教的解釋に俟ち、或は哲理と宗教が色彩を混和したる境遇に於て、之を判するの必要に會することあるは、蓋し明である。右にも述たる如く、東洋哲學に屬する諸賢哲の所論の如きは、其深奥なる意義の潤澤なるは驚くの外なく、支那上代に於ける、諸子百家言論の集彙とも謂ふべき三十六子全書所載の至言とも稱すべき、二三の例を掲ぐれば、

「今の世主、皆其國の危くして兵の弱きを憂るや、彊て說者に聽く、說者伍をなし、煩言、飾辭、而して實用なし、主、其辯を好み、其實を求めず、説く者得意、道路曲辯、輩々群を成す。民、其の以て王公大人を取る可きを以てや、皆之を學ぶ、夫人黨を褒め、與に説議す。國に於て紛々焉たり。小民之を樂み、大人之を説ぶ、故に其民農者寡し、而して游食者衆し、衆ければ則ち農者殆し、農者殆ければ則ち土地荒む、學者俗を成す、則ち民農を捨て、談説に従事す。高言、僞議、農を捨て、游食し、言を以は相高ぶる。故に民上を離れ、不臣者群を成す。

此貧國弱兵之教なり。云々。(商君書)



とあるが如きは、實に、今日の社會の有様を諷するものとも見ゆるのである。又尸子の廣澤篇には、

井中より星を視る、視る所數星に過ぎず。邱上より以て視れば、則其始めて出るを見、又其入るを見る。明の益にあらざり。勢然らしむる也。夫れ私心は井中也。公心は邱上也。故に、智私に載すれば、則ち知る所少。公に載すれば、則知る所多し。(尸子)

とあるなどは、誠によき訓戒であり、而かも、一たび其解釋を轉じ、井中より見るは研究なり、邱上より見るは觀察なりと解したならば、其味更に深厚であらう。又商君書の説民篇には、

故に、刑を行ふに、其輕きものに重くすれば、輕者生せず。從て重きもの從て至るなし。此を之を其治に治むると謂ふなり。刑を行ふに、其重きものを重くし、其の輕きものを輕くすれば、輕者止まず。則ち重き者從て止まず。此れを、之を其亂に治むと謂ふなり。故に輕きに重くすれば、則ち刑去り、事成り、國強し。重きに重くし、而して輕きに輕くすれば、則ち刑至て而して事生じ、國削らる。云々。(商君書)

と謂ふてあるのであるが、これなどは、歐米人の思ひもよらざる所であらう。支那の聖典に記載する所は、今更、茲に述べるの必要はないが、試に三十六子全書載する所の九牛の一毛にも過ぎざる二三章のみを掲げて見るも右の通りで、西洋哲學とは段違ひの如く思はるゝのである。また我

日本の先覺者の教の如きは、其時代の變遷によるとは謂へ、日本の特色を有するは無論であるが、吾輩の讃仰する日蓮上人の教により、我日本の國體としては、最も汚れたる北條氏時代に當り、大義名分の觀念が、明かに示されたのである。吾輩の舊著日本國體と日蓮主義(大正七年著)にも明記する如く、釋迦の「蛇の譚」と、露西亞の現狀と題せる一章に於て、

露西亞の現在は、實に面白くない状態であるが、釋迦如來は、チャンとこれを後人に教えてをらるゝのである。釋迦如來は蛇の談をしておいでになる。之が露西亞の現狀を「ピシヤツ」と物語つて居る。或る所に一疋の蛇があつた、首と尾とが争を始めたのである。尾の曰く、貴様は、何時も先に立つて、我を引つ張り廻し、旨いものは貴様が食ふ、怪しからぬ奴ぢや。實力のあるものが主人とならなければならぬ。首の曰く、吾輩は昔から偉いのぢや。何も言ふことはない筈ぢや。といふて争つた結果、然らば「ドツチ」が上位か實驗しやうと云つて、尾は木に巻き附く、是に於て、首は前に進むことも出來ず、腹がへつても食ふことも出來ず、其處で頭が閉口して、どうも御前の方がエライ様だ、御前を主人としよう。先きて立て貫ひ度といふことになり、尻尾の奴は、大威張で先に立て進だ處が、遂には、火の燃へて居る穴の中に墮ちて、死んで了ふたといふのである。これは釋迦の蛇の譚であるが、人間も亦自分の分限を守ることが忘れると、かういふことになる。如何なる事があつても、大義名分を棄してはなら



ぬ。今の露西亞の現状は、實に此の蛇のやうではあるまいか。兵隊は曰く、我々がなくては戦も出來ず、國も守れまい、労働者は曰く、我々が働いて我々が食ふのだ、上の人は曰く、己がえらいのだ、と何とか彼とか争つて居る結果「ヒツクリ」反て、今は逆に歩いて居るのである。日蓮主義は、自分の分に應じて努力し、勉勵して行くのである。首は首の役に力める、尾は尾の役目にとめる。其へんが、日蓮主義であることを知らねばならぬ。

日蓮上人は、大義名分の衰へた時に成長され、武士が上下の理に迷つて居るときに立つて、其迷を叱咤されたのである。宗教でも、道理を誤て本佛を忘れるは、恰も我家の父を忘れて、隣の父を尊んで居るやうなものである。かう云ふやうなときに、大義名分を明にすべく立つたのである。只今の世界も、亦其時に似て居る。露西亞のやうなのは、其れではあるまいか。

と論じたことがあるが、これなどもよく注意して見なければならぬと、吾輩は信ずるのであるが、要するに歐米諸國の國家的觀念も、事實上「力」の比較考察が、其原因をなすので、其根本に於て、我日本國の國體觀念と、思想とに相容れぬのみならず、實に人類の世界的平和と康福とを破るのも、この「力」の觀念が原因をなすのである。

法華經譬喻品の、今此三界の文の如きも、此境遇を味識し、唯我一人の靈位ありて、永久に三

界を支配するにあらざれば、絶対に、平和と康福を期待し得ざるべきを確證されたる金言に相違ないので、この意味に關することは、吾輩の舊著に於て、既に幾度も論證したる積で、今更にこれを繰返すの必要なを信ずるのである。

兎にも角にも、世界中の民族には、同民族の間に甚しく矛盾したる、而かも極端に矛盾したる思想を有するものあるは、實際に於ける、明瞭なる事實である。従て、猶太民族の一部に於て、憲法政治をすら非認する、專制政治を主張するかと思へば、他方に於ては、極端に民政を是認する共產主義を、謳歌するのであるが、同一民族が、此の相互矛盾する政治を主張するのは、其根柢に於て公正ならざるのみならず、何事を決定するにも、根本的に道義を重んずるの意思なく、たゞ、其場合に應じて善處主義を執り、利害と損得、觀念に釣られて、彌縫的手段に動かさるゝの結果とも言へよう。露國の「トロツキー」が、「スターリン」と容れざる、又「スターリン」の、「トロツキー」を敵視するは、其の根本的思想の變化にあらざして、徳性に何等尊重の意なく、たゞ、利害觀念の變革に動かされ、徳義觀念に着想なきの致す處で要するに、其外貌に於て、如何に熱心に、如何に謹格なるが如きも、其内心に於て、賤陋なる氣分を含有するやを察するに足るべく、其の朝夕に變易する同志者の所行の如きは、噴飯とも、齷齪とも評すべき價値がないので、唯々、其心事の賤むべきを感ずるのであるが、要するに、右の如き外觀を呈するに至



りたるは、必ずしも、右に述べるが如き、輕薄なる心事の動搖に基因するにあらずとするも、其の源因中の源因とも稱すべきは、其の運動を司配する根本義の、道德觀にあらざして、功利觀に捉はるゝの致す所に相違ないので、もしも、道德觀念を以て、思想の根本義を改めざる以上は、猶太民族の動靜は、世界の平和を破り、人類の康福を奪ふの結果を將來すべきやを恐るゝのである。吾輩は、世界人類の未來を祝福せんが爲には、深く此點に留意し、百年の長計を誤らざらんことを望んで已まぬのである。而かも猶太人の如此き結果を示すに至りたるは、一種の復仇心の善處の方策として、世界の人類の思想を攪亂せんが爲め、故らに相反する二種の思想を主張するので、其實際に於ては、其間に深き諒解ありて相通するのではあるまいか此點より觀察するも、猶太人の苦しき立場に同情すべきである。

## 第十章 結言 善處主義の排斥

世界の道德的思想を亂すものは、根本的判斷を忌避する善處主義である。が、其の今日の流弊を致さしめたるは、自然の結果なりとはいへ、此趨勢に拐誘せられつゝ、これを利用して人類の道德と康福とを紊したる猶太民族の行爲を主とするのではあるまいか。而かも世界的に優秀なりと自稱するは、猶太民族であり、事實的に歐米諸國を操縱するも亦、猶太民族であらう。加之、一方に於て「シオン」の決議なりとして傳る所によれば、「シオン」血統猶太人の、專制君主を奉戴する、全世界的猶太國の未來に於ける建設を目的とするので、其内容は「シオン」の決議に明示せらるゝ如く、飽く迄も專制政治を主張し、徹頭徹尾、一頭政治を主張しつゝあるといふことで、立憲政治をすら絶對に非難し、天來の統治者の萬世不易なるを欲求し、これを君主主義に結合し、之にあらざれば世界の平和、人類の康福を望み難きを信念しつゝあるにも關せず、他の一方に於ては、共產主義の策源となりつゝ民主主義に狂奔し、世界の人類を懲着し、自ら其元締となりて、思想上の矛盾を示しつゝ亡國の民たる本能を満足せしめつゝあるといふことである。

若し眞實に、如此矛盾ある状態に於て、世界の人類を引き附け、同民族統治の世界を組成せんとするが如きは、畢竟、正義人道を攪亂するものにて、決して世界の平和と、人類の康福とを齎



し得べきものではないので、是實に猶太人の自省改悔を求め、我日本に於ける統治の制に顧みて、其過を正さねばならぬのである。さりながら、今日に於ける世界各國の統治制度は、道義によらずして權益に據り、徳に依らずして力に依り、強者の壓力を悪用して、其私慾を逞せんとするにあるならば、深く此點に覺醒し、而して後始めて眞平の統治制を發見し、これを實行せざるべからざるは無論である。近來世界人類の主張にかゝる諸問題中、主として猶太人によりて取扱はるゝものゝ如きは、皆果して同一類に屬する誤想の歸結ならば正に世界の思想界を支配する聯盟諸問題の如きも、よく／＼注意して判断せねばならぬ。例へば、國際聯盟の主張する軍縮問題の如きも、其根本義に大なる誤謬あり、猶太人一個の立場としては、亡國民族として、軍備の強弱に無關係なるも、軍備ある國家の國民としては、よく／＼注意して、世界人類の問題として、これを研究せねばならぬ。既に前章にも論じたる如く、

小規模の軍隊を動かすの容易なるに比し、大規模の作戦に要する軍費、及國民の拂ふべき犠牲大なるを以て、よく／＼必要に迫りたる場合の外、國交の斷絶を避くべし。然るに華府會議の影響を受けたる世人は、軍備の縮小を以て平和を將來するの手段なりとの錯覺を起し、反て後來の戦争を容易ならしむるの傾なきにあらず。

とは、明白なことであるが、何に致せ、軍備縮小とか、軍備制限とか唱ふるは、一種の空論に過ぎぬので、皆是一種の可厭き猶太的欺瞞手段にして、要するに、國家なき民族の巧慧なる見地よりすれば、誠に賢明なる手段ではあるが、國家よりしての見地とすれば、弱者の屈服を夢みる（弱者たらしむることの比較的困難ならざる）國家の野望とも稱すべき事である。而かも、この點に就ては、國家なき民族と、大なる境域を有す國家に隸屬する大國民と、全く其利害を同ふし、其結果としては小國の不利を齎すに過ぎざるは明かである。

何に致せ、萬一の場合を考察すれば、世界に於ける大國の分在は、戦争を誘發するの結果となるべく、戦争を誘發する他の原因と俱に、之を排斥すべきは、世界の平和と、人類の康福の爲に必要である。従て苟も平和なる世界を作成せんが爲には、各國の間に、甚き大小の別なき特殊の制限を置き、年月を累ねても、之を實顯するの道を講ぜねばならぬ。而かも此一事は、世界を統治する一支配者の權威に待つを要するは無論である。然るに、目下の状態に於ては、世界の各國は、各國の分有する未開地を私有地と同視して之を處分し、對外方針を此國策に概ぎて、殖民政策と稱する一種の對外策を講ずるが如きは、何等公正の意義なきものである。

抑も、富源を發見し、天府を拓開し、以て人類の幸福を進むるは、人類のなさざるべからざる天職である。固より、一私人乃至一國人の壟斷すべき處ではないのである。幾萬方里の地を私有し、以て自己の富を作るは、其手腕に委せてもよからうが、只自己の偏見に從て處分し、之を廣



漠たる荒地のまゝに放置し、他人の來て之を開かんとするを拒むが如きは、箇人の權利としては暫く措くも、人類の守るべき義務として之を看れば、決して正しき行爲としてこれを許すべきではない。もしも自己の力を以て、其富源を拓開すること能はざる場合に於ては、他人を使役し若くは他人の協力を待ち、之を拓開すべきである。乃ち此點より觀察すれば、土地廣くして人々稀薄なる地方の所有者は、土地狭くして人々の多き地方に勞力の供給を仰ぎ、以て人力の足らざる所を補ひ、依て以て、其富源を拓くべきであるので、是こそ、天地に對する人類の責務である。例へば、米國は、我國人の米國に移住し、米人の爲に其天府を拓開するの事業に關與せしむるを好まず、我日本國に、米國勞働者多數の來らざるを奇貨とし、強て我國人の入國を拒まんとするが如き事實を生ずるに至りしが如きは、如何に國際的權利に協ふとは謂へ、人道上首肯し得ざる所である。吾輩は此點より觀察し、利害の關係上自から此實狀に至りたるに顧み、併せて世界の諸大國が、未開の土地を侵略したるの事實に鑑みて、世界の各地方に於ける人口と土地との關係を考慮し、一國の領有すべき限度を規定し、之に依て軍備にも大差なきの結果を齎し、自ら戰爭を杜絶するの事實を見んことを翹望するのである。

右の如きは、今日の問題としては、机上の空論に過ぎざるは勿論なりと雖も、世界の紛争を杜絶し、其平和を確定せんが爲には、是非とも考慮せざる可からざる、必要問題の一なりと信ずる

ので、機會ある毎に是に近づき、依て以て人類の幸福を増進せんことを望むのである。

之を要するに、現在に於ける國際的問題は、餘りに巧慧を主として利害に捉はれ、何等相互共同の道德的觀念に乏しきが故に、深く此點に注意し、眼前の善處主義を斥けて更に進路を求め依て以て、人道の本義を闡明せねばならぬ。吾輩は今茲に愚見の一端を叙述すると同時に、我日本帝國の天職に省悟し、對支問題の解決を契機とし、世界の平和と人類の幸福を鞏固ならしめんが爲め右に述たる精神を實行するを第一歩として處理せられんことを熱望して、此稿を終らんとするるのである。

一、東亞聯盟に關する私説は、「日本民族の世界的使命」と題する近著の結言として掲載せるが故に、茲にはこれを省略するのであるが、同書の結尾に掲げたる、愚見の第二に、左の點あるを以つて、補今茲に之を補正せんと欲するのである。

二、世界の人類中、國民として何等の變遷を見ざるも、統治者の系統に變化あるを免れざるに反し、開關以來何等の變更なきは唯一の日本國あるのみ。

最後に一言を差し加へたきは、支那事變に伴ふ日本帝國の英米佛諸國の批判は、如何に支那の巧慧なる欺瞞構作の結果なりとは謂へ、餘りに諒解なきが如くなるも、(國際聯盟の態度は論ずるの價値なし) 其實際に於ては、日本帝國の心事を悟らざるの如き、暗愚者にあらざること勿論な



るも、其立場より、利害の判断に魅せられたる結果、日本帝國を侵略國として之を看るにあらざれば、自己の立場より判断し、國歩の進展に不利なりとの見地に立ち、たゞく自己利害の打算より我日本を判じたるの結果にして、如何に真相を示して其反省を求むるも、其實際に於て、彼等の利益とならざる以上は、其見地を改むるが如きは、決して望み得べからざる所なるべし。此場合に於て、我帝國の真意を表はすは、極めて愚策なるが如きも、その愚策たるを思念して、これを努めざるは、是れ實に、我日本の踏む所も亦道義の道にあらずと謂ふの外なく、如何に其結果に於て、無効なるにもせよ、誠意を以て其真相を示すは、是れ實に我厚德を全うする所以の道なるを憶ひ、一意に、彼等の誤解らしき判断を是正せしむるに努め、彼等に有利なる時機を捉へ、彼等をして是正の道を講ずるに容易ならしむるは、是實に友義を遺れざる道德的行爲として、守らざる可からざる所にして、我帝國のなさざるべからざる處なりと信ずるのである。而かも、尙此處に留意すべきは、此場合に於て、唯單に自己の正しきを宣傳誇稱して、其惡感を促すが如きは、其實際に於て、彼等をして道義的行動をとりて、正道に歸するに躊躇せしむる所以にして、是れ實に我等の踏む尊き天職を全うする所以にあらざるを省悟し、自ら進んで此方針によるの決意をなさざるべからずと信ず。

何は兎もあれ、今回の日支事變は我日本帝國が、將來の天職を實行すべき第一歩をなすものに

して、決して一時的の偶發事實として、是を取扱ふべきにあらざるが、故に吾等日本人同胞は、決して其事業の速成を期せず、未來に於ける第一事業として道義世界に近づくべき模範となりて、世界各國を善導するを遺れず、前著結言の第三に明言する如く、其第一着の事業としては、現時の鄙陋なる世界的思想をも賤視することなく、先第一に、對支問題の解決に際して、第二期に對する準備として、國家の體制を正し、後來世界の統治を實行するに適當なる方法の第一歩を選択せざるべからず。是實に最も重視すべき未來に於ける軌範なりと信ず。言外の要義は讀者のこれを諒知せられんことを望む。

——(終り)——



昭和十四年七月八日印刷  
昭和十四年七月十一日發行

(世界の平和と人類の幸福)  
〔非賣品〕

複製  
不許

著者 佐藤 鐵太郎

發行人 松本 晴吉

印刷人 奈良 直一

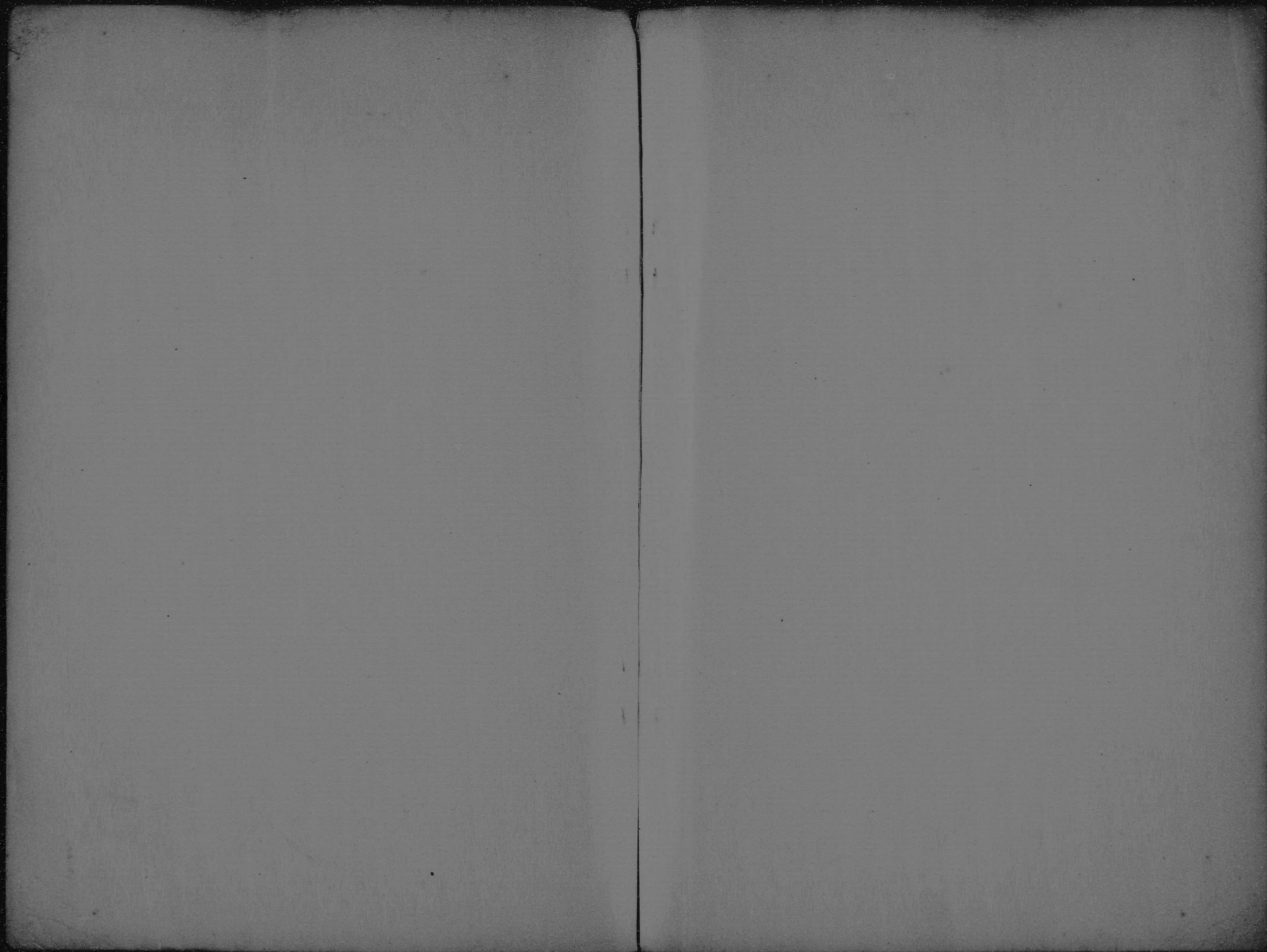
東京市麹町區富士見町二ノ一〇

發行所

奉仕會本部

電話九段(33)三二〇八番  
振替東京三七九八〇番







財團法人 奉仕會

東京市麹町區富士見町二ノ一〇  
電話九段(33)三二〇八番